

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第252集

都城市所在

まつした

# 松下遺跡

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

2020

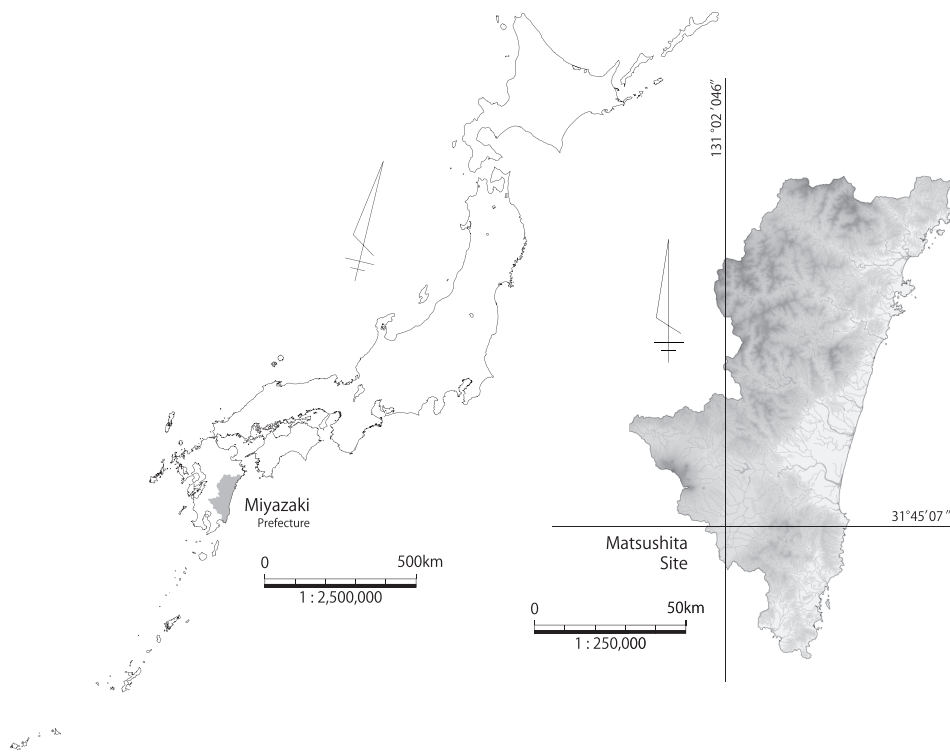
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

まつした

# 松下遺跡

一般国道 10 号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7



2 0 2 0

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

地域高規格道路「都城志布志道路」の建設は、地域交流ネットワークを形成し圏域の均衡ある発展を担うとともに、防災や医療、物流の面における対策を強化するインフラ整備として大きな期待が寄せられています。

さて、それぞれの地域に根ざした歴史的遺産である埋蔵文化財は、我が国の歴史と文化の正しい理解の基礎をなすものです。一方、開発によって失われる側面もあるため、宮崎県教育委員会では、地域開発と調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでいます。

本報告書は、平成29年度から平成30年度にかけて発掘調査を実施した、都城市志比田町に所在する松下遺跡の調査結果をまとめたものです。今回の調査では、竪穴建物跡や周溝状遺構など、弥生時代終末期～古墳時代前期前半にかけての集落跡を確認した他、弥生時代中期に遡る土器集中箇所も検出されました。さらに、断面形が逆台形状の深く掘り込まれた古代の溝も検出されました。

この報告書が、文化財に対する県民の皆さんの理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するために広く活用していただける資料となれば幸いです。

結びに、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた関係諸機関および関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和2年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 山元高光

# 例 言

- 1 本書は、国道10号都城道路建設に伴い、平成29・30年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した松下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、第1次調査を平成29年6月5日から平成29年10月27日まで、第2次調査を平成30年9月25日から平成31年1月25日まで、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、調査課調査第二担当主査 恵利武馬を主任に、竹田享志・二宮満夫・加藤真理子を担当として発掘作業員の協力を得て行った。現地調査における図面作成及び、写真撮影については、調査担当者が中心に行った。
- 4 現地調査における測量業務については、(株)旭総合コンサルタント(第1次調査)、(株)南日本総合コンサルタント(第2次調査)、空中写真撮影については(有)スカイサーベイ九州にそれぞれ委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。本書にかかる業務については、図面の作成、実測、トレースを、主として恵利が整理作業員の協力を得て行い、加藤・古川誠が補佐した。
- 6 本書で使用する土層及び土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色貼』に拠り記述した。
- 7 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第II系(世界測地系)及び東京湾海拔(T.P.)で、方位は座標北(G.N.)を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 8 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の『電子図25000』を、地形分類図は宮崎県農政水産部農村計画課作成の5万分の1『地形分類図 都城』を基に作成した。
- 9 本書で使用した遺構等の略記号は次のとおりである。

S A・・・ 竪穴建物跡	S B・・・ 掘立柱建物跡	S C・・・ 土坑
S E・・・ 溝状遺構	S H・・・ 単独の小穴	S L・・・ 周溝状遺構
T r・・・ トレンチ	P・・・ 竪穴建物内土坑・小穴	K r-M・・・ 霧島御池降下軽石
↳・・・ 砥面の範囲	↔・・・ 摺面の範囲	
- 10 本書の執筆及び編集は恵利が行い、第I章第1節を藤木聡(県文化財課)が行った。
- 11 出土遺物の分類や年代観等は、第V章に示した文献を総合して参考にしている。
- 12 整理作業に伴う自然科学分析については(株)パリノ・サーヴェイに委託した(結果については、第IV章に掲載)。
- 13 出土遺物・諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

# 本文目次

## 第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の方法	4

## 第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

## 第III章 調査の成果

第1節 基本層序	9
第2節 縄文時代の遺物	14
第3節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	14
(1) 遺構の分布	14
(2) 竪穴建物	17
(3) 土坑	39
(4) 周溝状遺構	43
(5) 第2次調査区南東部遺構群	45
(6) 遺構に伴わない遺物	47
第4節 古代の遺構と遺物	52
(1) 遺構の分布	52
(2) 溝状遺構	53
(3) 遺構に伴わない遺物	58
第5節 中世～近世の遺構と遺物	58
(1) 遺構の分布	58
(2) 土坑	59
(3) 溝状遺構	59
(4) 遺構に伴わない中世の遺物	61
第6節 時期不明の遺構	62
(1) 掘立柱建物	63
(2) 掘立柱跡	63

## 第IV章 自然化学分析の結果

第1節 はじめに	72
第2節 試料	72

第3節	分析方法	72
第4節	結果	73
第5節	考察	77

## 第V章 総括

第1節	弥生時代～古墳時代の様相	80
第2節	古代の様相	81
第3節	中世～近世の様相	82

## 挿図目次

第1図	国道10号都城道路路線と本発掘調査の遺跡位置	1	第24図	S A 4 土器出土状況図	34
第2図	路線予定範囲に対する確認調査トレンチ位置及び本調査箇所	3	第25図	S A 4 完掘平面・断面図	32
第3図	松下遺跡周辺地形分類図及び周辺の主な弥生時代遺跡	5	第26図	S A 4 出土遺物①	36
第4図	松下遺跡及び周辺遺跡分布図	8	第27図	S A 4 出土遺物②	37
第5図	第1次調査区土層断面図	10	第28図	S A 4 出土遺物③	38
第6図	第2次調査区土層断面図	11	第29図	S C 1 平面・断面図	40
第7図	第1・2次調査区基本土層及び下位層の柱状図	12	第30図	S C 1 出土遺物	41
第8図	松下遺跡の全遺構分布図	13	第31図	S C 2 平面・断面図	42
第9図	縄文時代の遺物	14	第32図	S C 2 出土遺物	42
第10図	弥生時代の遺構分布図	15	第33図	S L 1 出土遺物	43
第11図	第1次調査区弥生時代の遺構分布図	16	第34図	S L 1 平面・断面図及び土器出土状況詳細図	44
第12図	第2次調査区弥生時代の遺構分布図	17	第35図	南東部遺構群平面・断面図	46
第13図	S A 1 平面・断面図	18	第36図	1号土器集中区出土遺物	46
第14図	S A 1 土器出土状況図	19	第37図	S H 1 出土遺物	47
第15図	S A 1 出土遺物①	20	第38図	第1・2次調査区出土の弥生時代中期の遺物	47
第16図	S A 1 出土遺物②	21	第39図	第1次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物①	49
第17図	S A 2 - b 平面・断面図	22	第40図	第1次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物②	50
第18図	S A 2 - a 平面・断面図	24	第41図	第2次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物	51
第19図	S A 2 出土遺物	25	第42図	S E 1 出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物	52
第20図	S A 3 - b 平面・断面・模式図	27・28	第43図	S E 1 平面・模式図及び出土遺物	54
第21図	S A 3 - a 平面・断面図	30	第44図	S E 1 断面図①及び概念図	55
第22図	S A 3 出土遺物	31	第45図	S E 1 断面図②	56
第23図	S A 4 平面・断面図	33	第46図	S E 1 断面図③	57

第47図	遺構に伴わない古代の遺物	58	第52図	時期不明の遺構分布図	62
第48図	S C 3 平面・断面図及び出土遺物	59	第53図	S B 1 平面・断面図	63
第49図	中世～近世の遺構分布図及び各断面図	60	第54図	掘立柱跡平面・断面図	63
第50図	S E 2 出土遺物	61	第55図	暦年較正結果	75
第51図	遺構に伴わない中世の遺物	61			

## 表目次

第1表	炭化材 樹種同定結果	28	第2表	土器観察表⑦	70
第2表	土器観察表①	64	第3表	石器計測表	71
	土器観察表②	65	第4表	鉄器計測表	71
	土器観察表③	66	第5表	放射性炭素年代測定試料観察結果	72
	土器観察表④	67	第6表	放射性炭素年代測定結果	74
	土器観察表⑤	68	第7表	樹種同定結果	76
	土器観察表⑥	69	第8表	種実同定結果	77

## 写真目次

写真1	3号竪穴建物出土の炭化材	79
-----	--------------	----

## 図版目次

図版1	松下遺跡より南を望む	小溝状遺構群完掘状況	
図版2	調査区遠景／調査区全体合成写真	図版12	縄文時代の遺物／S A 1 出土遺物
図版3	第1次調査区／土層堆積状況／ 第2次調査区／土層堆積状況／下層堆積状況	図版13	S A 2 出土遺物
図版4	S A 1 床面状況／土層堆積状況／完掘状況／ 床面出土土器／中央土坑付近土層堆積状況	図版14	S A 3／S A 4 出土遺物
図版5	S A 2 床面状況／土層堆積状況／完掘状況	図版15	S A 4 出土遺物
図版6	S A 3 全景／床面状況／完掘状況／S A 3、 S C 1 全景（俯瞰）／S A 3 土層堆積状況	図版16	S A 1／S A 2／S A 3／S A 4 出土遺物
図版7	S A 3 南側周堤堆積状況／出土炭化材／ S C 1 床面状況／土層堆積状況／出土土器	図版17	S C 1／S C 2 出土遺物
図版8	S A 4 床面状況／床面遺物出土状況／完掘状 況／土層堆積状況／貼床下土層堆積状況	図版18	S L 1／1号土器集中区／S H 1 出土遺物
図版9	S L 1 完掘状況／土層堆積状況／出土遺物状 況／S C 2 遺物出土状況／1号土器集中区及 び溝状遺構状況	図版19	1次包含層出土弥生時代終末期～古墳時代前 期前半の遺物①
図版10	S E 1 完掘状況	図版20	1次包含層出土弥生時代終末期～古墳時代前 期前半の遺物②
図版11	S E 1 土層堆積状況／S C 3 遺物出土状況／	図版21	2次包含層出土弥生時代終末期～古墳時代前 期前半の遺物／S E 1 の遺構に伴わない遺物
		図版22	石包丁／鉄器／S E 1 出土遺物／包含層出土 古代の遺物①
		図版23	包含層出土古代の遺物②／S C 3／S E 2／ 包含層出土中世の遺物

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

都城志布志道路は、平成 6 年 12 月、宮崎県都城市から鹿児島県志布志市に至る総延長約 40km の地域高規格道路として計画された。このうち、九州縦貫自動車道都城インターチェンジ（以下、I C）から都城市の五十町 I C までの約 13.4km の区間は都城道路として国土交通省による事業が進められている。都城道路の埋蔵文化財取扱協議は、平成 9 年度から始まり、平成 9 年 5 月 7 日付けで宮崎県都市計画課長から宮崎県文化課（現文化財課）長に対して「都城道路の都市計画決定に係る関係課との調整について」照会があった。この文書を受け、計画決定について支障はないが、周知の埋蔵文化財包蔵地が 13 箇所あり、取扱協議が必要である旨を平成 9 年 6 月 13 日付けで回答した。その後、平成 11 年 11 月 29 日付けで建設省九州地方建設局宮崎工事事務所（現国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所、以下、宮崎河川国道事務所）長から宮崎県教育長あてに、「一般国道 10 号都城道路の文化財有無について」と照会があり、同年 12 月 10 日付けで周知の埋蔵文化財包蔵地と未周知の協議必要箇所合わせて 15 箇所を回答した。その後、路線の計画変更等を含め埋蔵文化財取扱協議を重ねてきた結果、道路計画の変更が困難であり、工事により影響を受ける範囲については記録保存の措置を講ずることとなった。

松下遺跡における確認調査は、平成 26～28 年度において、用地取得の完了した箇所から順に実施し、一部において弥生時代の遺構・遺物等が発見された。これを受け、平成 29 年 6 月 22 日付けで宮崎河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘通知が提出され、同年 6 月 27 日付けで宮崎県教育長から発掘調査の指示を回答した（第 1・2 次調査）。なお、発見通知は、第 1 次調査分が平成 29 年 10 月 31 日付け、第 2 次調査分が平成 31 年 1 月 29 日付けでなされた。

## 第 2 節 調査の組織

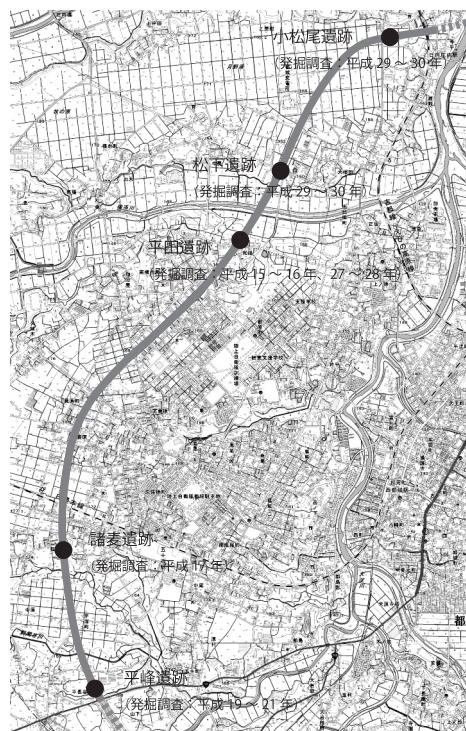
松下遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

【調査機関】 宮崎県埋蔵文化財センター

### 平成 29 年度 発掘調査・整理作業

所長	菅付 和樹
副所長兼総務課長	甲斐 久志
総務課総務担当リーダー	副主幹 寺原 真由美
調査課長	吉本 正典



第 1 図 国道 10 号都城道路路線と本発掘調査の遺跡位置図



調査課調査第二担当リーダー	副主幹	島木 良浩
調査課調査第二担当	主査	恵利 武馬 (発掘調査・整理作業担当)
調査課調査第二担当	主査	竹田 享志 (発掘調査担当)
調査課調査第二担当	主査	二宮 満夫

#### 平成30年度 発掘調査・整理作業

所長		長峯 勝志
副所長兼総務課長		田中 礼子
総務課総務担当リーダー	副主幹	寺原 真由美
調査課長		吉本 正典
調査課調査第二担当リーダー	主幹	島木 良浩
調査課調査第二担当	主査	恵利 武馬 (発掘調査・整理作業担当)
調査課調査第二担当	主事	加藤 真理子 (発掘調査担当)
調査課調査第二担当	主査	二宮 満夫

#### 平成31年度 整理作業・報告書作成

所長		山元 高光
副所長兼総務課長		内野 真由美
総務課総務担当リーダー	主幹	寺原 真由美
調査課長		赤崎 広志
調査課調査第二担当リーダー	主幹	東 憲章
調査課調査第二担当	主査	恵利 武馬 (整理作業・報告書担当)
調査課調査第二担当	主査	二宮 満夫

#### 事業調整

宮崎県教育庁文化財課 主査 松本 茂 (平成29・30年度)

宮崎県教育庁文化財課 主査 藤木 聡 (平成31年度)

### 第3節 調査の経過

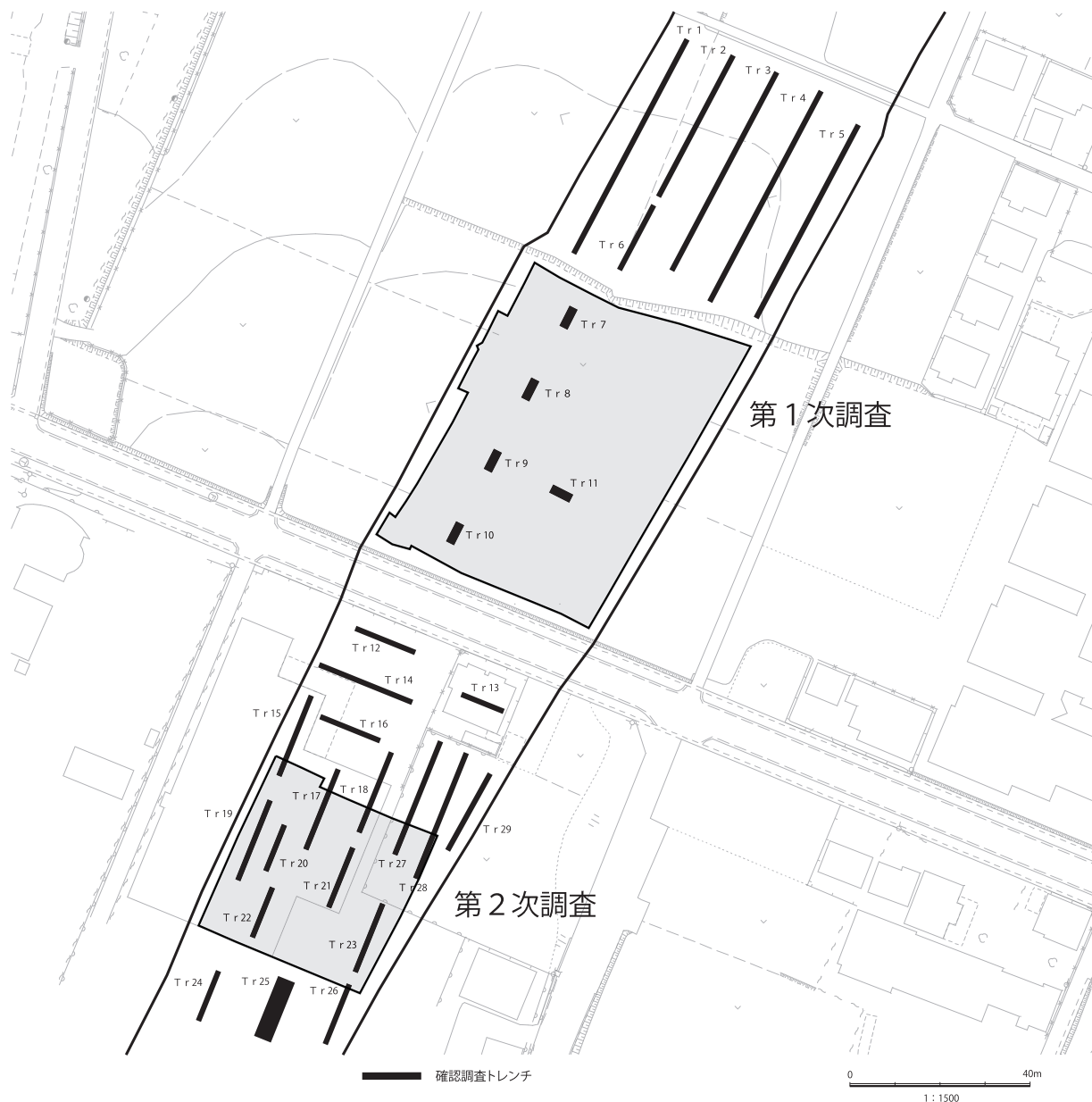
松下遺跡の発掘調査は、平成26～28年度において用地取得の完了した当該遺跡の範囲や隣接地を、県文化財課が確認調査を行い、調査必要と判断したことで、平成29年度に第1次調査を行った。さらに、平成30年度に用地取得の完了した当該遺跡の範囲を同年度に確認調査を行い、調査必要となったことで、平成30年度に第2次調査を行った。

#### 第1次調査 (平成29年6月5日～平成29年10月27日)

遺跡は都城市志比田町9541番地他に所在し、調査対象面積は4,600㎡ (実掘3,500㎡) である。調査においては、6月5日から重機を用いて近世から現代の耕作土と推定される第Ⅰ～Ⅱ層と、桜島文明降下軽石層にあたる第Ⅲ層の除去を行った。同時に事務所、駐車場等の整備も行った。7月から人力による包含層掘削を開始した。調査区南西部隅から1号竪穴建物跡 (S A 1)、南部中央付近から1号周溝状遺構 (S L 1) を検出した。いずれも弥生時代終末頃と推定される遺構で、S A 1の埋土からは多くの遺物も出土した。北部中央付近では、2号竪穴建物跡 (S A 2) を検出した。北西側からは3号竪穴建物

跡（SA3）と1号土坑（SC1）を検出した。これらの遺構は弥生時代終末期～古墳時代前期前半頃と推定される遺構である。包含層からは、第IV～V a層にかけて当該期の遺物がまとまって出土した。また、近現代の芋穴や耕作による攪乱土からは、弥生時代～近世の遺物が出土した。

10月11日に第V b層上面において空中写真撮影を行った。検出した遺構の掘削作業を10月24日まで行った。SA1とSA3は当初設定した調査区の外に広がるのが判明したため、安全面を考慮しながら、路線用地範囲の際まで拡張して掘削を行った。重機による埋め戻しを10月25日～27日にかけて行い、現地での調査を終了した。



第2図 路線予定範囲に対する確認調査トレンチ位置及び本調査箇所

## 第2次調査（平成30年9月25日～平成31年1月25日）

第2次調査の地点は、第1次調査区の南西約25mに位置し、調査対象面積は2,000㎡（実掘1,600㎡）である。調査地点に隣接する排土置き場が確保できなかったため、調査に先行して表土掘削と、その排土搬出を行った。調査区の範囲には、精密機械の工場があったため、表土中に大規模な建物の基礎や構造物が残存しており、場所によっては霧島御池降下軽石層の第VIb層まで攪乱されている箇所もあった。また、旧地形は南側の横市川に向かって緩やかに傾斜しており、さらに削平の影響もあり、包含層の第IV～V層の堆積・残存状況は0～80cmと層厚に差があった。

10月9日から人力による包含層掘削を開始した。まず、第IV層上面から古代と推定される1号溝状遺構（SE1）、中世～近世と推定される畠の畝跡、2号溝状遺構（SE2）を検出した。SE1は調査区の北西～南東に延びていた。調査区北西側からは、4号竪穴建物跡（SA4）を検出した。遺物は弥生時代終末期頃のものが多く出土したが、調査区南東部付近からは弥生時代中期頃の遺物がまとまって出土した。

12月25日に第IV～V a層上面において空中写真撮影を行った。検出した遺構の掘削は1月24日まで行った。1月25日に重機による埋め戻しを行い、現地での調査を終了した。

なお、埋蔵文化財への理解を目的として、現地説明会を第1次調査は平成29年9月30日、第2次調査は平成30年12月15日に行った。地域の住民を中心に多くの方々に参加していただき、松下遺跡の調査の成果を報告した。

## 第4節 調査の方法

### グリッドの設定

調査対象地全域に対して、国土座標（第1次調査：X=-138,290、Y=4,340、第2次調査：X=-138,420、Y=4,300）を起点に10m×10mグリッドを1単位として設定し、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付し、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

### 遺構の掘削

遺構については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半截もしくは4分法により埋土の堆積状況を確認しながら掘削することを基本とした。貼り床を有する遺構については、床面上の調査後、貼り床を除去し、地山面まで完掘した。遺構からの出土遺物については、トータルステーションを用いて三次元座標の記録を行った。なお、包含層からの出土遺物については、1グリッドをa～dに均等4分割して層ごとに取り上げた。

### 作図記録

遺構実測は、基本的に竪穴建物跡、土層断面等については縮尺1/20、溝状遺構については縮尺1/50で、実測を行った。調査の工程上、一部トータルステーションを用いて記録した三次元座標を基にデジタル図化も行っている。

### 写真撮影

全調査区ともに、基本的に35mmのフィルムカメラでカラーリバーサルフィルムとモノクロフィルムを用いて撮影したほか、デジタルカメラでも記録している。なお、第1次調査、第2次調査ともに、遺構検出面において業者委託による空中写真撮影を行った。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

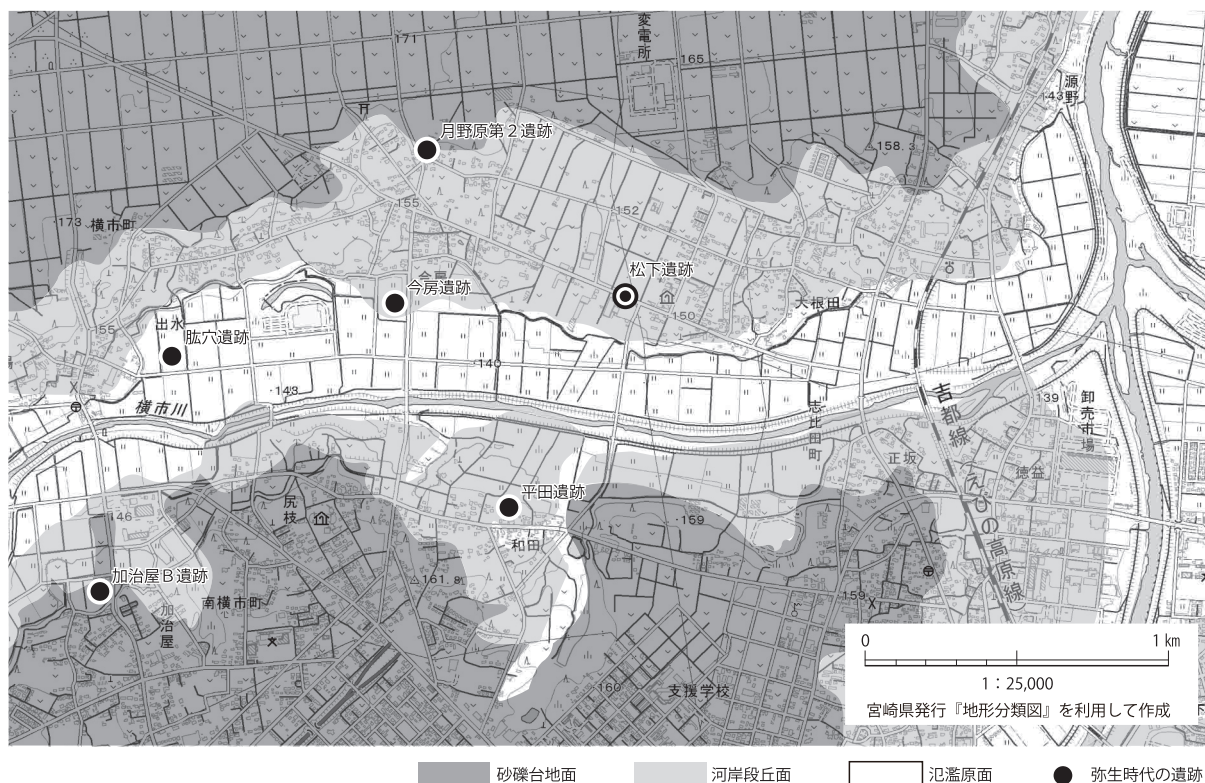
都城市は、宮崎県の南西端に位置し、東の鰐塚山山系や北西の霧島山系をはじめとする山々に囲まれた広大な都城盆地の中央部にあり、面積は約653km<sup>2</sup>、人口約16万人に及ぶ。北から南東にかけて高原町、小林市、宮崎市、三股町、日南市、串間市の4市2町、南西方面は鹿児島県霧島市、曾於市、志布志市の3市に隣接する。

都城盆地の中央部には、大淀川が多くの支流を集めながら北流し、その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県曾於市を経て蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流下し、大淀川に合流する。横市川流域には、河岸段丘と氾濫原が形成され、現況は水田や畑地が広がっている。

松下遺跡は、宮崎県都城市志比田町に所在する。都城市街地から北西に約4km、横市川左岸流域に形成された、標高約148mの河岸段丘上に位置している。北側には月野原台地が広がり、南側には横市川を見下ろす。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する横市川の周辺には、左岸・右岸ともに河岸段丘面上において、縄文時代早期から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。ここでは、横市川流域の既往の調査を中心に概観する。(第3・4図)



第3図 松下遺跡周辺地形分類図及び周辺の主な弥生時代遺跡

## 縄文時代

横市川流域において現在までに草創期の遺跡は確認されていない。早期については、蓑原台地北端の緩傾斜地に所在する田谷・尻枝遺跡で、散石状の礫群とともに円筒形土器や磨石が出土し、さらに散礫の下部からは陥し穴が検出された。平田遺跡B地点と加治屋B遺跡では、それぞれ18基の集石遺構が検出された。

前期から中期の遺跡は少なく、星原遺跡で霧島御池降下軽石（約4,600年前）と鬼界アカホヤ火山灰（約7,300年前）に挟まれた黒色土中から集石遺構が検出され、また加治屋A遺跡と田谷・尻枝遺跡で陥し穴遺構が検出された程度である。

一方で、霧島御池降下軽石後の後期から晩期にかけては遺跡数が増加する。

後期では、右岸中位段丘上に立地する正坂原遺跡で磨消縄文系土器、指宿式土器、貝殻文系の市来式土器が出土している。蓑原台地北縁に所在する加治屋B遺跡では、三万田式土器などの遺物が出土している。月野原台地南部の牧ノ原第2遺跡では、当該期の竪穴建物跡も検出された。

晩期に入ると、牧ノ原第2遺跡に隣接する横市中原遺跡で組織痕土器、孔列文土器や黒色磨研土器が出土し、蓑原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡では、縄文時代晩期の土坑群が検出されており、それに伴う孔列文土器が出土している。正坂原遺跡において黒川式土器、刻目突帯文土器などが出土している。右岸低位段丘に所在する坂元A遺跡では、縄文時代晩期から中世に至るまでの小区画の水田跡も検出されている。

## 弥生時代

横市川左岸の肱穴遺跡では、刻目突帯文土器や石包丁などを伴う縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての松菊里型の円形竪穴建物跡と水田層が検出された。月野原台地の南端に所在する月野原第2遺跡では、瀬戸内系の凹線文土器が出土した他、母智丘山頂部の母智丘原第1遺跡や牧ノ原第2遺跡、平田遺跡B地点では、中期後半頃の土器が出土している。

後期以降では、平田遺跡D地点・E地点で竪穴建物跡、周溝状遺構の他、特徴的な遺物である鉄矛が出土している。横市川流域では後期後半から終末期にかけて集落跡が多数みられる。加治屋B遺跡で後期末の竪穴建物跡や周溝状遺構、後期後半から終末期にかけての竪穴建物跡も検出され、同台地上の池原遺跡も当該期の遺物が出土している。左岸低位段丘に所在する今房遺跡、平田遺跡F地点・G地点でも当該期の竪穴建物跡や周溝状遺構等の遺構や遺物が出土している。

## 古墳時代

坂元A遺跡では、弥生時代終末～古墳時代前期頃の水田層が広い範囲で確認されている。また、中期の溝状遺構とそれに並列する杭列も検出され、近くからは水田祭祀に伴うものと考えられる丹塗りの脚台付壺型土器が出土している。左岸低位段丘に所在する鶴喰遺跡では、68基の竪穴建物跡とともに都城市域では初めてのカマドを伴う竪穴建物跡が検出された。完形の馬鐸などの豊富な遺物も出土している。同時期とみられる竪穴建物跡は、月野原台地南部の母智丘原第2遺跡や右岸のシラス台地北縁部に所在する中尾遺跡、蓑原遺跡でも検出されている。中尾山・馬渡遺跡、畑田遺跡、上牧第2遺跡、牧の原第2遺跡では、同時代の遺物が出土している。

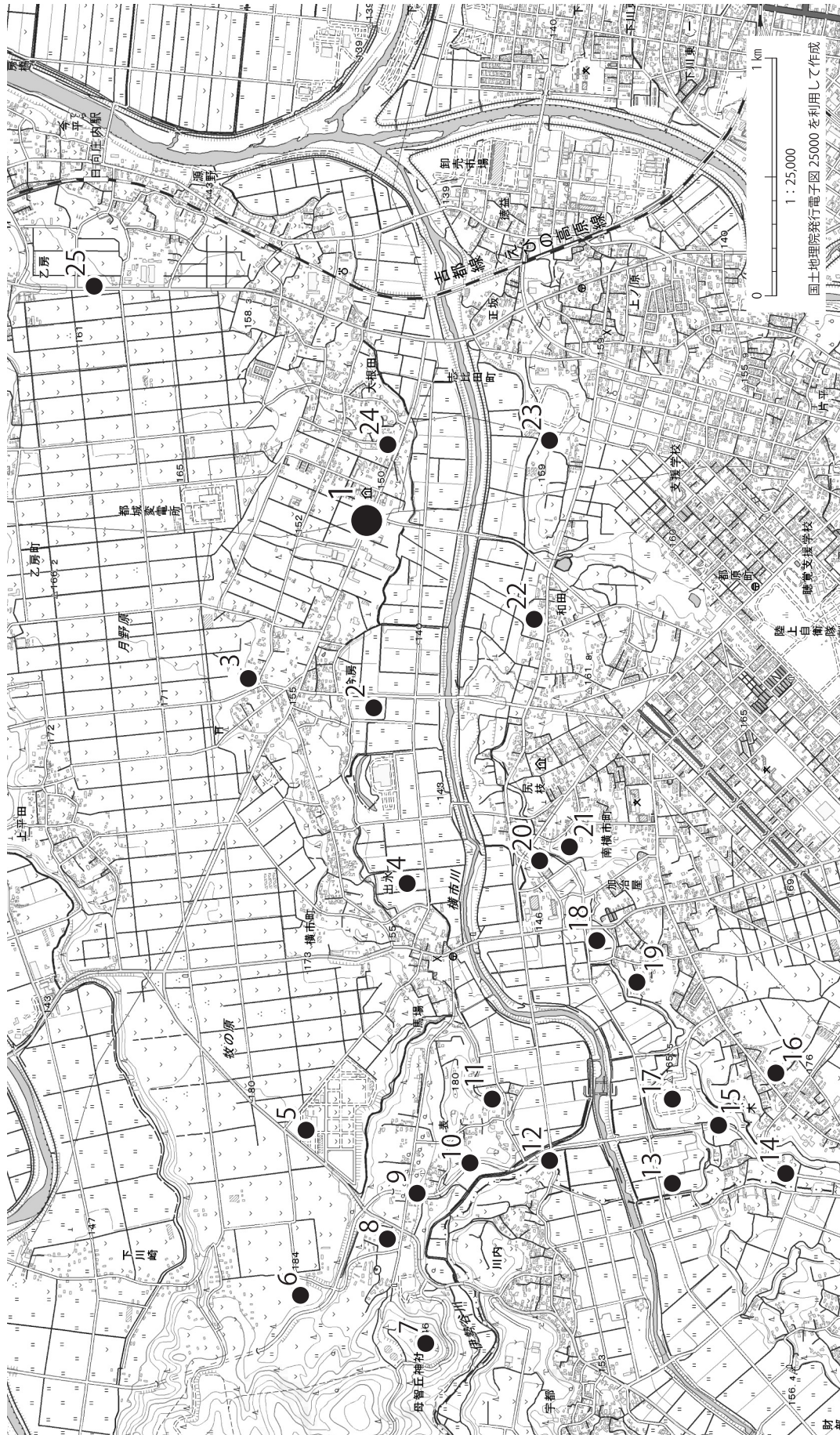
## 古代・中世

横市川流域は、日向国諸県郡財部郷に属すると考えられ、11世紀前半に成立した「島津荘」の一円荘に含まれる。また、古代末から中世初頭の遺跡が点在し、旧日向国から旧大隅国、旧薩摩国へつながる古代ルートが存在が想定されている。古代では、中尾山・馬渡遺跡で掘立柱建物跡と墨書土器、越州窯青磁、緑釉陶器等の多量の遺物が出土している。また、馬渡遺跡では、在地有力者の居宅跡とみられる掘立柱建物跡が確認されている。

中世については、集落跡やその生産基盤となる水田・畠跡の生産遺跡の他、山城等が多く確認され、桜島文明降下軽石（約550年前）により埋没した小溝状遺構（畠跡）も検出されている。畑田遺跡、母智丘谷遺跡、鶴喰遺跡、肱穴遺跡、今房遺跡等で水田跡、鶴喰遺跡、肱穴遺跡、牧の原遺跡、横市中原遺跡、中尾遺跡、蓑原遺跡、加治屋B遺跡、坂元B遺跡、上牧第2遺跡、中尾山・馬渡遺跡、平田遺跡、正坂原遺跡等で畠跡が検出されている。また、鶴喰遺跡では大量の土師器、舶載磁器類の出土のほか柱穴に礎石を伴う大型掘立柱建物跡や回廊状遺構も検出されている。さらに、火山災害（桜島文明降下軽石）を被った水田跡も確認されている。鶴喰遺跡の北西部には、中世城郭である新宮城跡があり、空堀や土塁が確認されている。松下遺跡の東約300m付近には、16世紀初頭に蒲生武範が居住した蒲生屋敷（大根田屋敷）跡である松元遺跡がある。

## 近世

肱穴遺跡では、17世紀から18世紀にかけての集落が、坂元B遺跡と加治屋B遺跡では、18世紀後半以降の集落が営まれていたことが分かっており、現在につながる水田や畑が広がる農耕地帯であったと推察できる。平田遺跡F地点では、墓と考えられる土壙が5基検出され、埋土からは洪武通宝や寛永通宝等の銭貨も出土している。



第4図 松下遺跡及び周辺遺跡分布図

## 第三章 調査の成果

### 第1節 基本層序（第5・6図）

松下遺跡は、西から東に流れる横市川と月野原台地の間に形成された、横市川から見て高位の河岸段丘面に立地する。調査区の地形は、第1次調査区北から第2次調査区南にかけて比高差約2mで緩やかに傾斜している。第1次調査区は畑、第2次調査区は工場として利用されていた。近現代～現代の耕作土である第I層～第II層を重機により除去して、第III層から本格的な調査を開始した。

基本土層観察は、第5・6図土層確認位置図に示した第1次調査時での調査区東壁、第2次調査時での調査区東壁及び下層確認トレンチにおいて確認した。本遺跡の基本層序は下記の通りである。

第I層は、灰黄褐色砂質土で、層厚約0.3～0.6mの現代の耕作土である。

第II層は、灰褐色土で、10mm以下の桜島文明降下軽石がまんべんなく含まれ、弱い粘性を帯びる。層厚は0.1～0.4mの近現代～近世の旧耕作土である。

第III層は、灰白色砂質土の桜島文明降下軽石層で、0～5mm程度の軽石を主体とする。所々、桜島文明降下軽石ブロックが混じる。調査区全体には広がっておらず、地形的に低い所や窪んでいる箇所を確認される。耕作等の削平の影響も受けている。層厚は0.2m程度を測る。

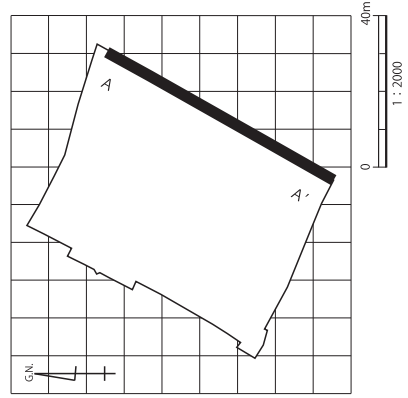
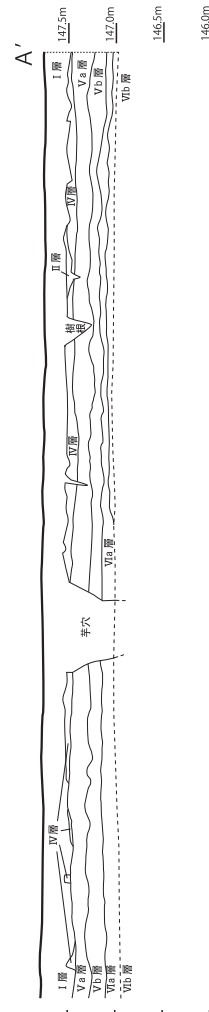
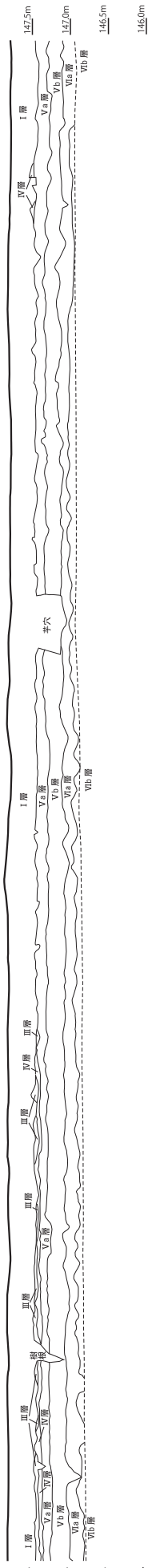
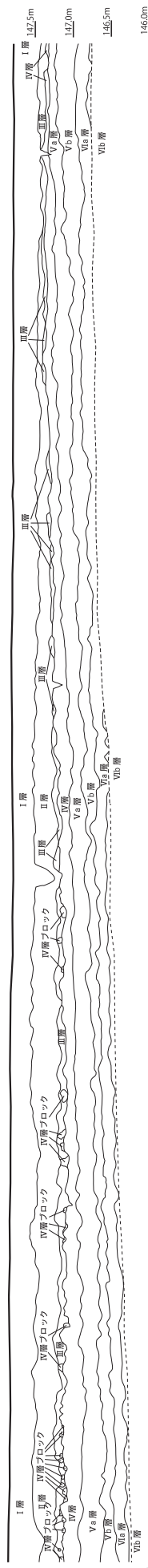
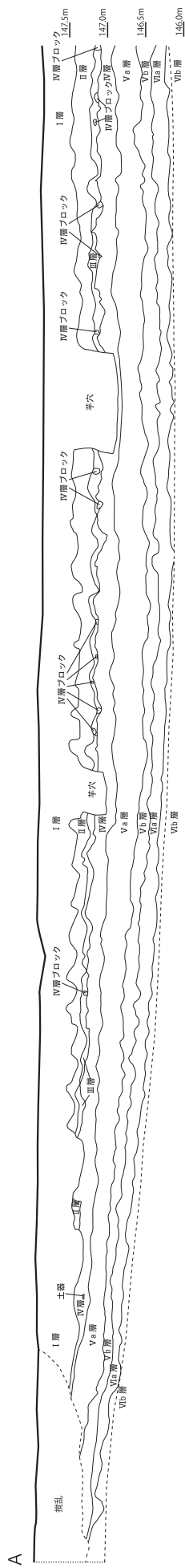
第IV層は、黒色土シルト質土で、上部は1mm以下の桜島文明降下軽石が混じる。層厚は0.1～0.4mを測る。

第V層は、黒褐色土で、霧島御池降下軽石の含む割合により2層（a、b）に細分される。a層は霧島御池降下軽石をわずかに含み、下部は弱いしまりを帯びる。層厚は、0.2～0.4mを測る。b層は上部が遺物包含層に当たるが、下部は無遺物層である。褐色を呈し、下部になるにつれてしまりを帯びる。層厚は0.2m程度を測る。

第VI層は、黄褐色で、霧島御池降下軽石の割合により2層（a、b）に細分される。a層はb層（霧島御池降下軽石層）の漸移層に当たり、第Vb層より霧島御池降下軽石の割合が高く、強いしまりを呈する。層厚は0.1～0.3mを測る。b層は霧島御池降下軽石の純層で、層厚は1.3～1.75mを測る。

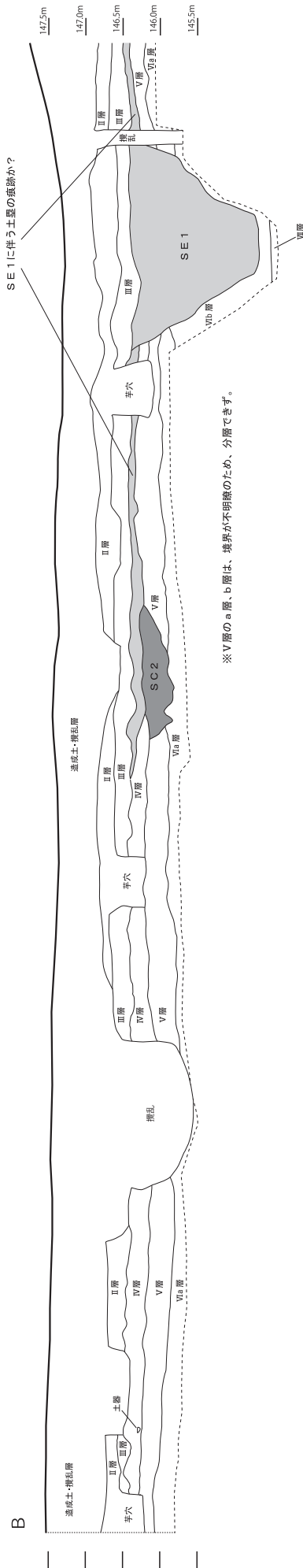
なお、第VI層より下位層については、トレンチ等の掘削に伴い、黒色粘質土層及び鬼界アカホヤ火山灰層が確認されているが、部分的な確認のみで、全体的な検出作業は行っていないので、基本層序には組み入れていない。



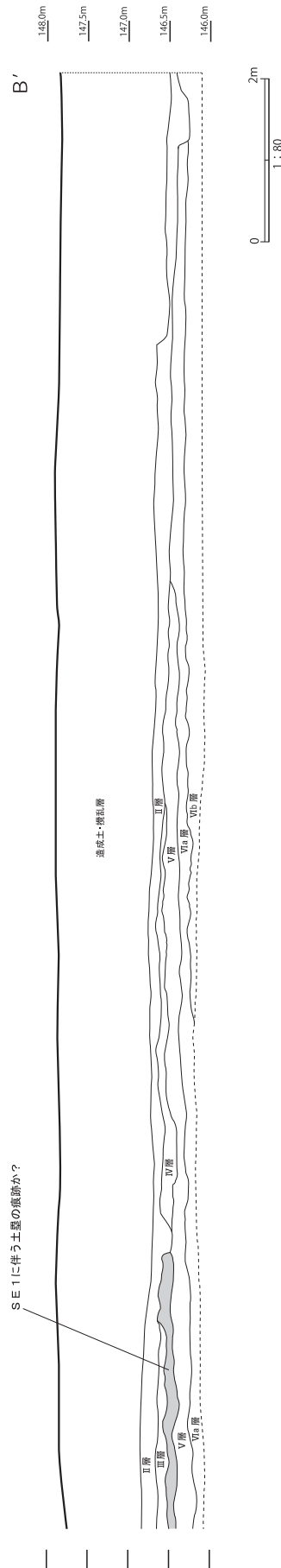


※ 層の詳細は第6図に記載

第5図 第1次調査区土層断面図



※V層のa層、b層は、境界が不明瞭のため、分層できず。



I層：灰黄褐色砂質土。層圧30～60cm。【現代の耕作土】

II層：灰褐色土。10mm以下の白色軽石（桜島文明降下軽石）がまんべんなく含まれ、弱い粘性を帯びる。

近世の遺物が出土する。層圧10～40cm。【近世・近代の耕作土】

III層：灰白色砂質土の桜島文明降下軽石層。5mm以下の軽石を主体とする。所々、桜島文明降下軽石ブロックが混じる。層圧は最大20cm。

IV層：黒色土。シルト質である。上部は1mm以下の白色桜島文明降下軽石が混じる。Kr-Mをわずかに含み、層圧は最大40cm。【弥生時代～中世の遺物包含層】

V層：黒褐色土。Kr-Mの含む割合により2層（a、b）に細分。【弥生時代の遺物包含層】

a層はKr-Mを少量含み、下部は弱いしまりを帯びる。層圧20～40cm。

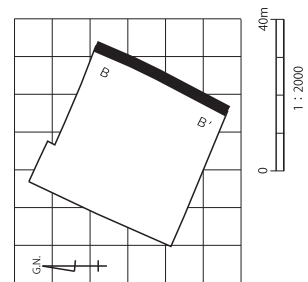
b層は上部から弥生時代の遺物が出土するが、それより下部は無遺物層である。下部は褐色を呈する。Kr-Mを含み、下部になるにつれてしまりを帯びる。層圧は最大20cm。

VI層：黄褐色土。Kr-Mの割合により2層（a、b）に細分。

a層はb層（Kr-M層）の漸移層にあたる。Kr-Mを多量に含み、強いしまりを呈する。層圧10～30cm。

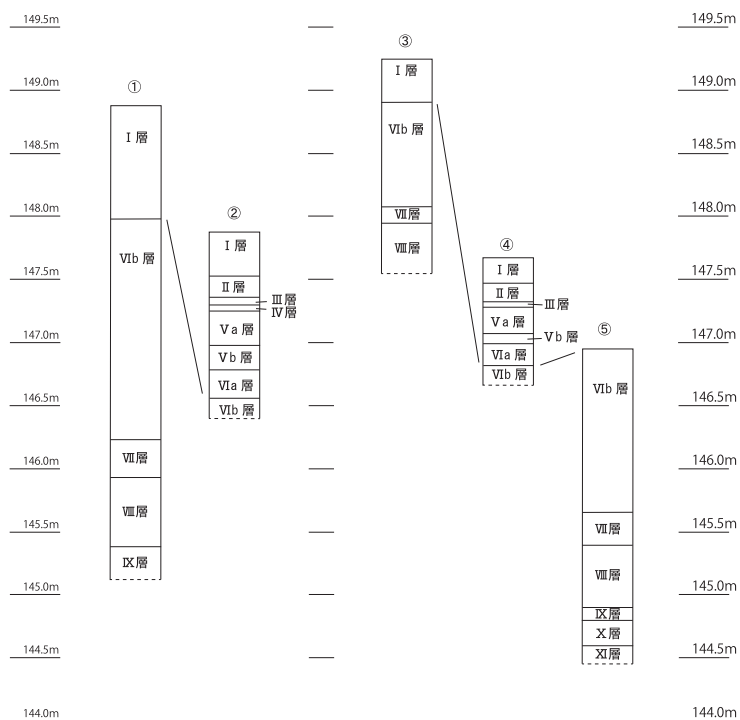
b層はKr-Mの純層で、層圧130～175cm。

VII層：黒色系粘質土。シルト質で粘性が強く、若干の水分を含む。

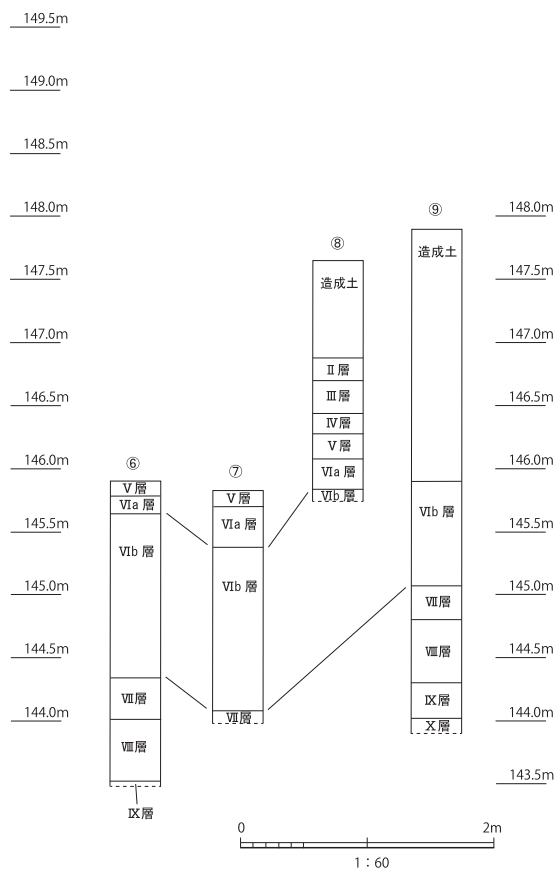


第6図 第2次調査区土層断面図

### 1次調査地点



### 2次調査地点



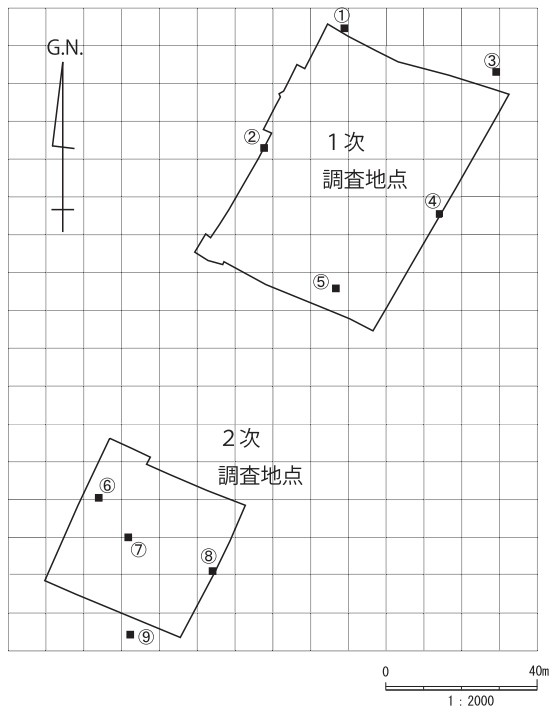
※ I～VII層は、2次調査区土層断面図に記載。

Ⅳ層：鬼界アカホヤ火山層。

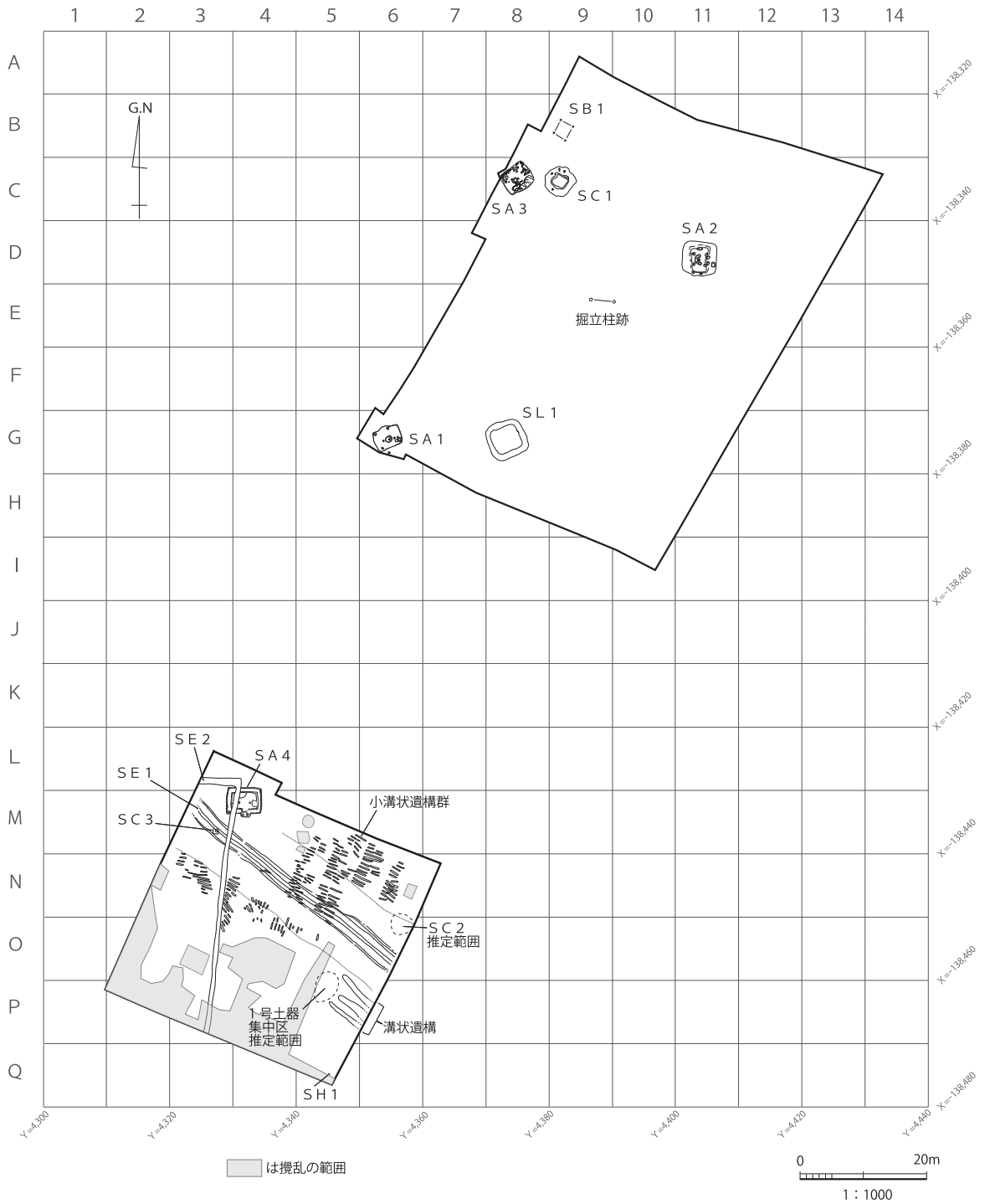
Ⅸ層：黒褐色シルト。

X層：褐色粘土質土。(桜島11火山灰を含む。)

XI層：暗褐色粘質シルト。



第7図 第1・2次調査区基本土層及び下位層の柱状図

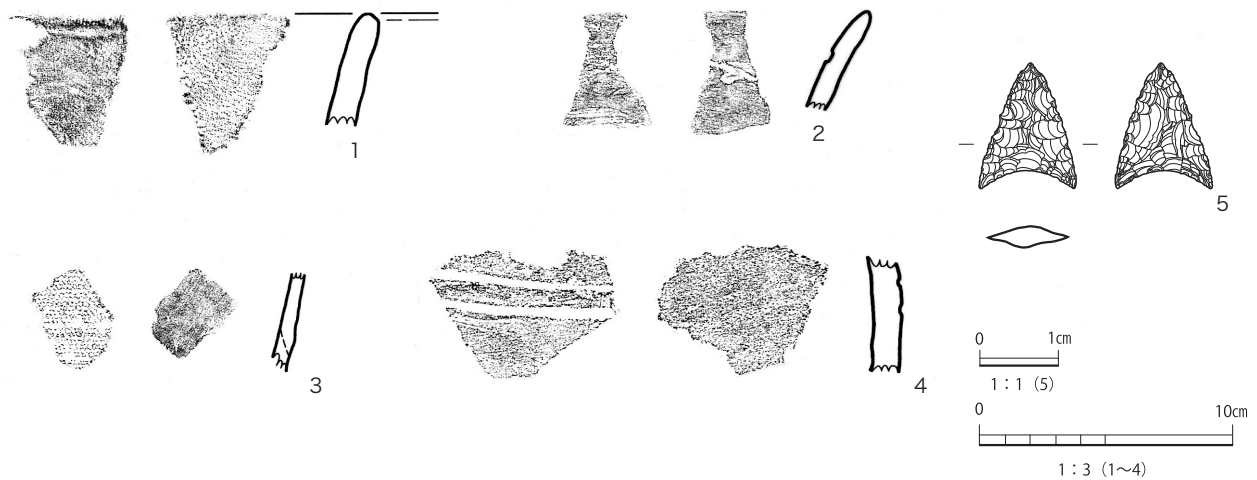


第8図 松下遺跡 全遺構分布図  
(弥生時代～古代の遺構面と中近世の遺構面を合成)

## 第2節 縄文時代の遺物

遺構や包含層はなかったが、縄文時代晩期に属する土器1～4、石器5等がわずかながら出土したことから、ここで報告する。

1～4は深鉢である。1・2は外傾する口縁部で、1はSE1から出土し、厚手で粗製、口唇部を丸く収める。2はSA3から出土し、薄くて精製、口唇部は尖る。1は内外面にナデ、2は内外面に横方向のミガキが施され、特に2は内外面に穀物と思われる圧痕が認められる。3もSA3から出土した組織痕土器の胴部片で、外面に布目の圧痕が施される。4はSL1出土の胴部で、外面に2条の沈線が巡る。5はSC1出土の打製石鏃である。石材はガラス質安山岩で、形状は左右対称の二等辺三角形を呈し、基部の挟りが深く、左右の脚端は尖る。



第9図 縄文時代の遺物

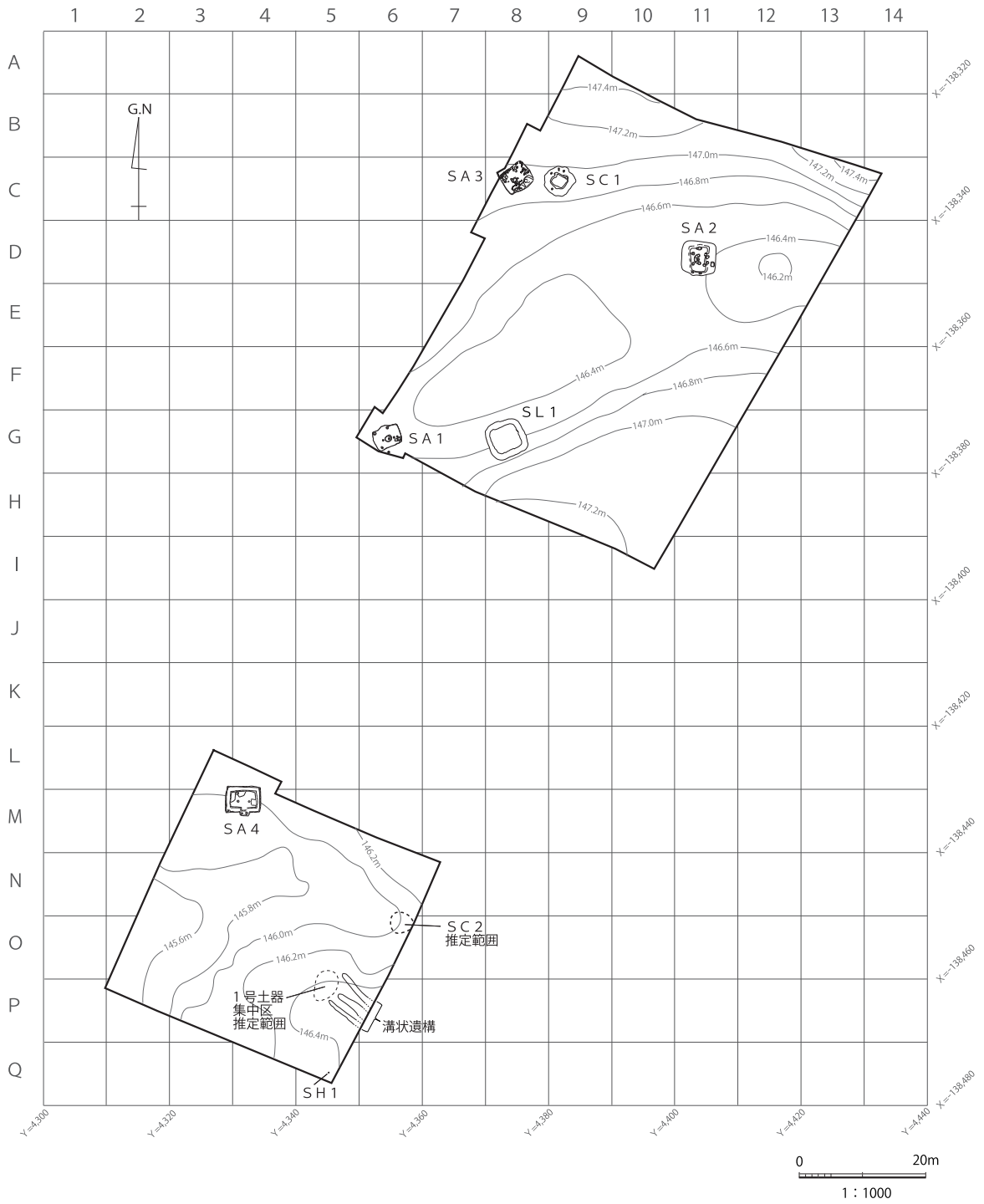
## 第3節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

### (1) 遺構の分布

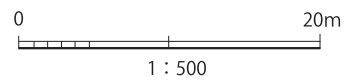
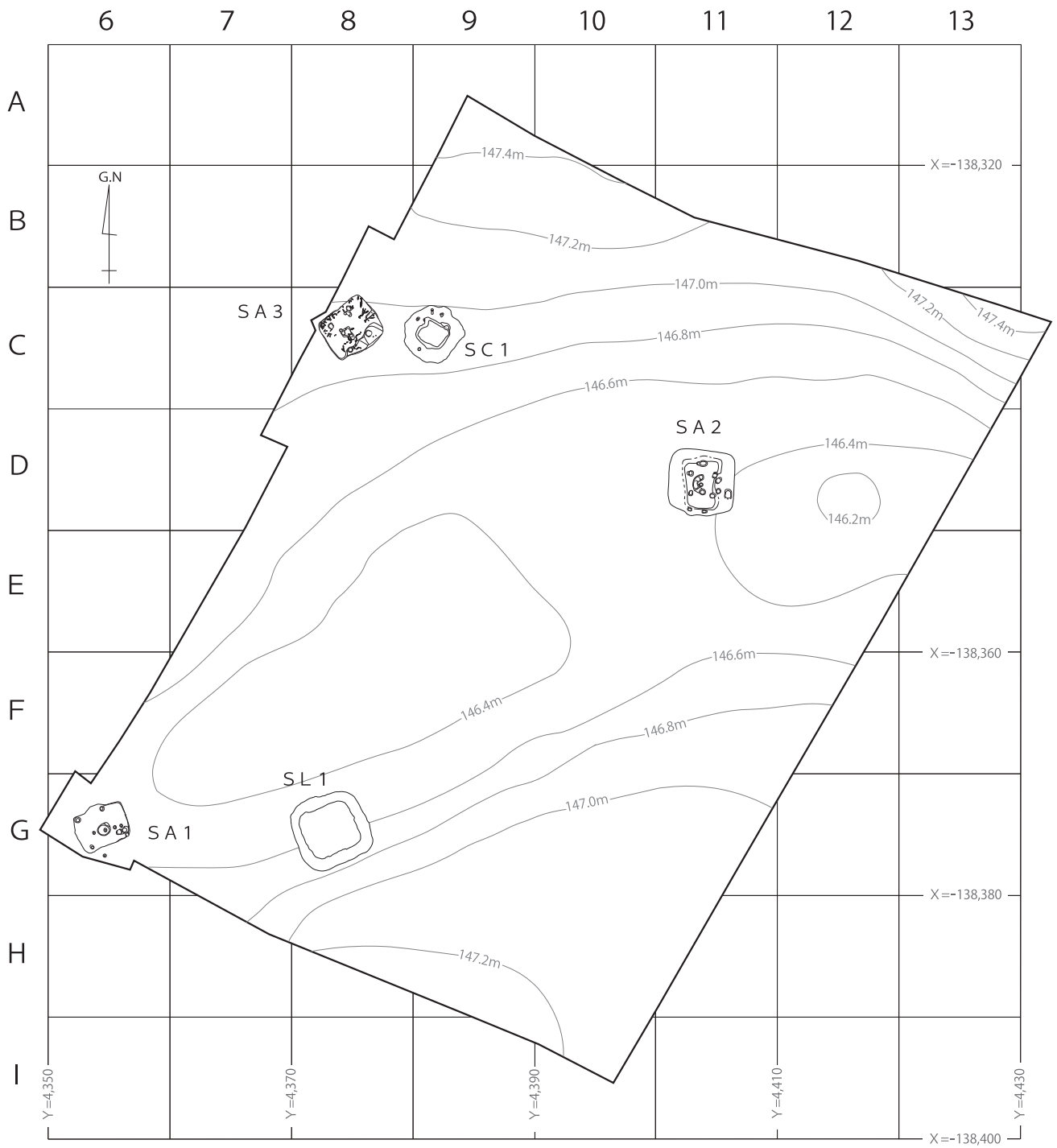
第Ⅲ層除去後のⅣ・Ⅴ層において検出することができる、弥生時代中期から古墳時代前期前半にかけての遺構面である。松下遺跡は、横市川左岸の河岸段丘面にあたり、調査区においては北側から南側にかけて緩やかに2.0m程低くなる。検出した主な遺構は、竪穴建物4軒、土坑2基、周溝状遺構1基などである。

旧地形としては、北側に位置する第1次調査区は、調査区中央付近が北東から南西にかけて浅い谷地形になっている。その谷地形からSA1、SA2、谷を挟むように北側からSA3、SC1、南側からSL1を検出した。検出遺構と大半の出土遺物はいずれも弥生時代終末期～古墳時代前期前半に属すると考えられ、中期に属する遺物も少量ではあるが出土した。

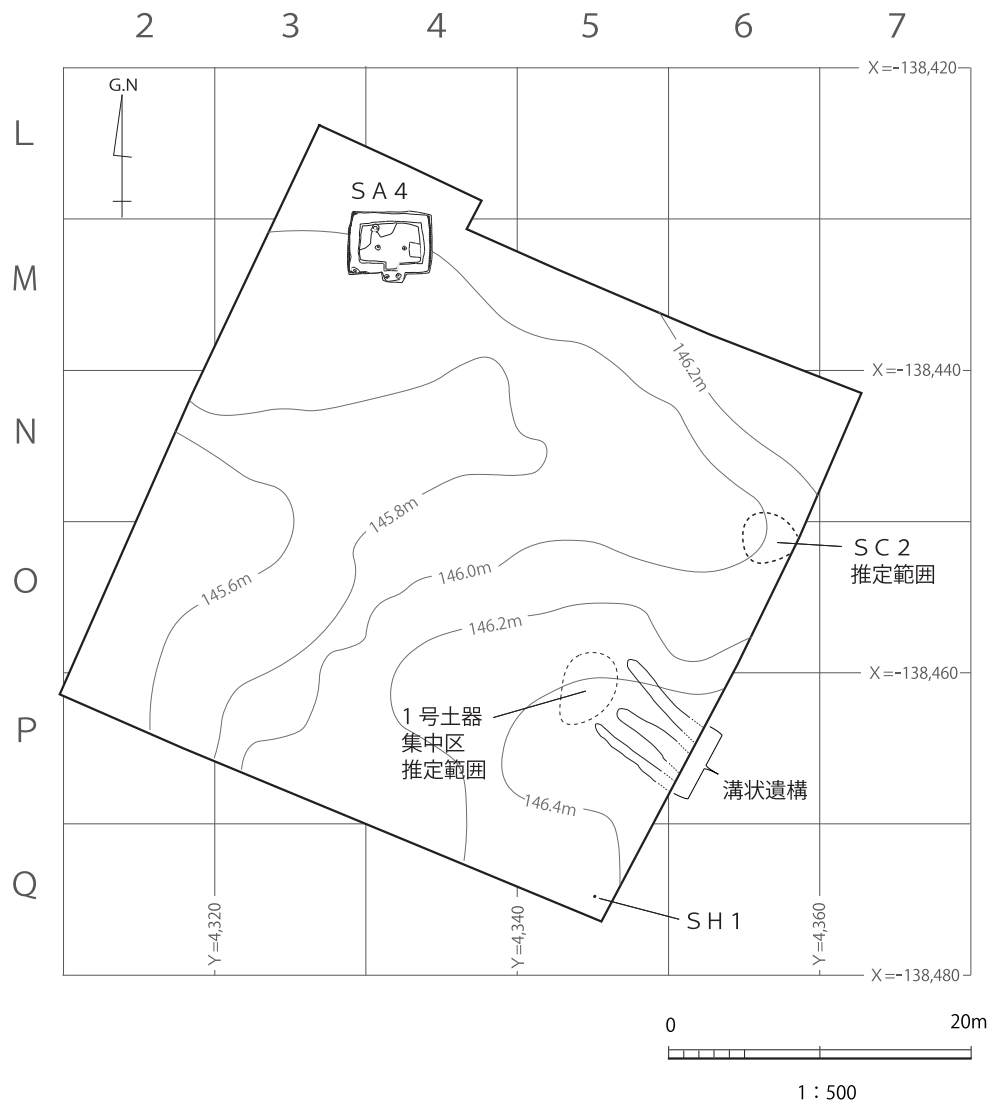
第2次調査区は、南側約半分が現代構築物による削平を受けていたが、旧地形としては北側はほぼ平坦面をなし、南側になると、南西にむかって最大1.0m程の高低差で緩やかに傾斜していく。北側の平坦面では古墳時代前期前半に属するSA4と2号土坑(SC2)、南東側では中期後半に属する土器集中区などを検出した。



第10図 弥生時代の遺構分布図



第11図 第1次調査区弥生時代の遺構分布図



第12図 第2次調査区弥生時代の遺構分布図

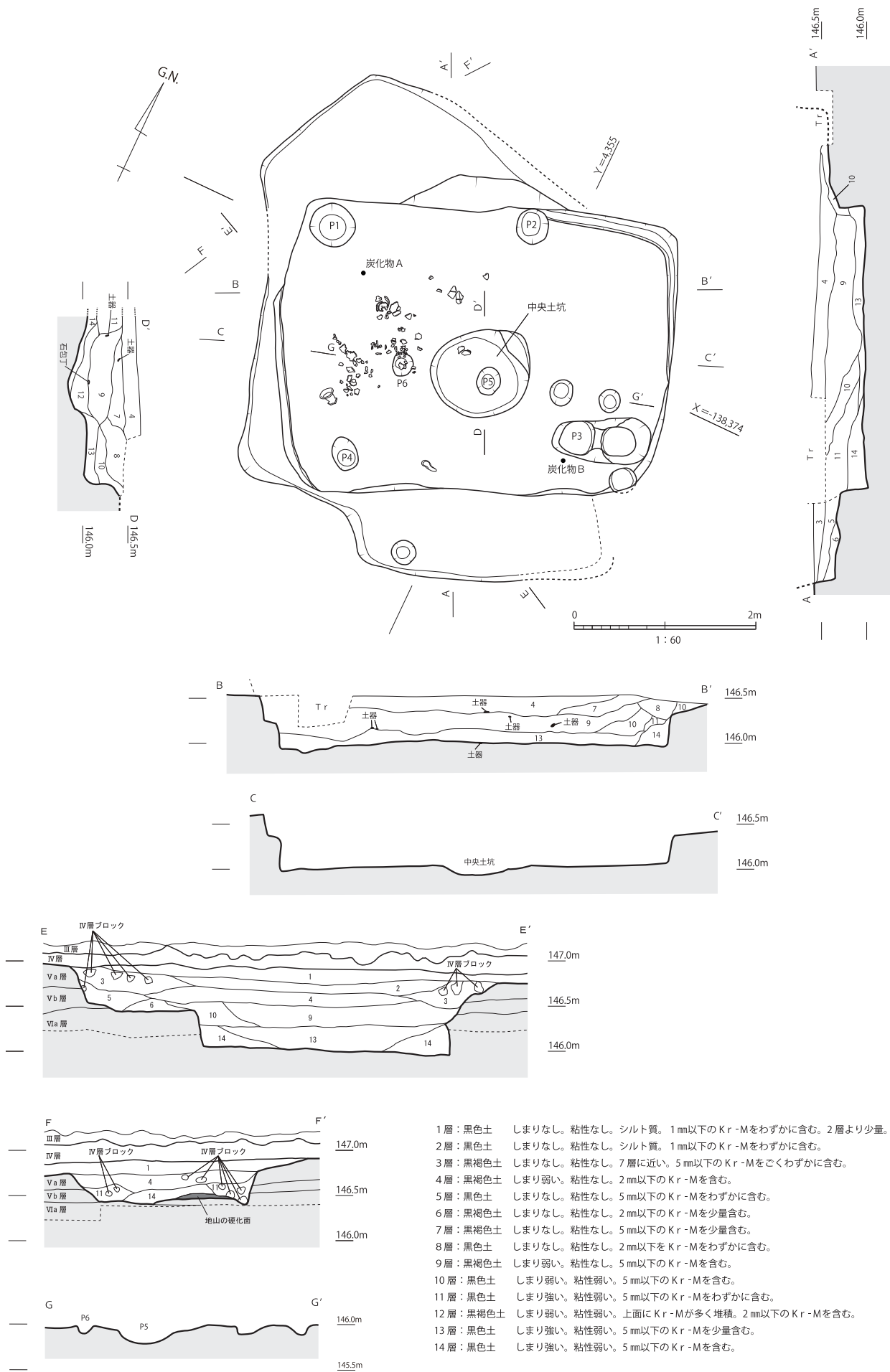
## (2) 竪穴建物 (SA 1～4)

### 1号竪穴建物 (SA 1) (第12～16図)

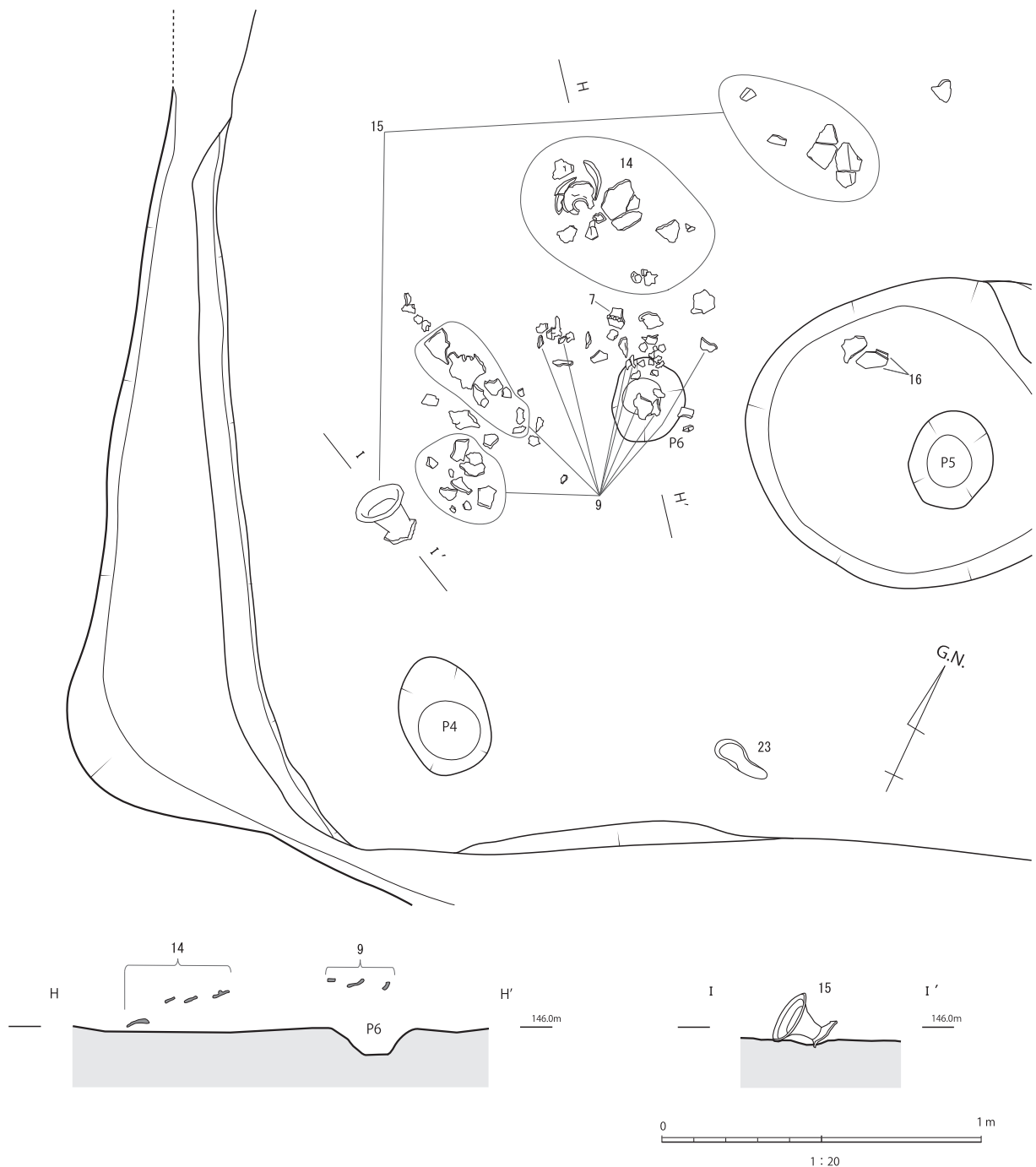
6 Gグリッドで、長方形を基調とする竪穴建物を検出した。周囲には、東側約15mの位置に周溝状遺構 (SL 1) がある。調査区の南西隅に近い南側の壁際に、遺物包含層であるIV～V層の堆積状況を確認するため、排水を兼ねた先行トレンチの掘削中に、VIb 上面で黒色土の広がりを確認した。周辺を掘削・精査したところ、V a層除去後に少量の遺物を含む黒色土の方形プランを検出した。遺構の一部が当初設定した調査区の外に続くことから、調査区壁面の断面から本来の遺構構築面がV a層上面であったことが確認できた。その後調査区を拡張して建物の全体的なプランを検出した。

SA 1の平面形は、長軸4.5m、短軸3.1mの隅丸長方形を呈する竪穴を主要な居住空間にして、この床面より約0.4mの高い位置に、北西から南西にかけて、幅約0.2～1.4mの不整形なベッド状の張り出しが設けられている。建物の主軸はN-65°-Eをとる。深度は本来の遺構構築面であるV a層上面から主要な居住空間の床面までが約0.9m、直立する壁高は、最大で西壁肩から主要な居住空間の床面までの約0.6m、主要な居住空間の床面積は約13.5㎡を測る。北東隅と西の壁面直下に幅0.06～0.16m、深さ





第13図 SA 1 平面・断面図

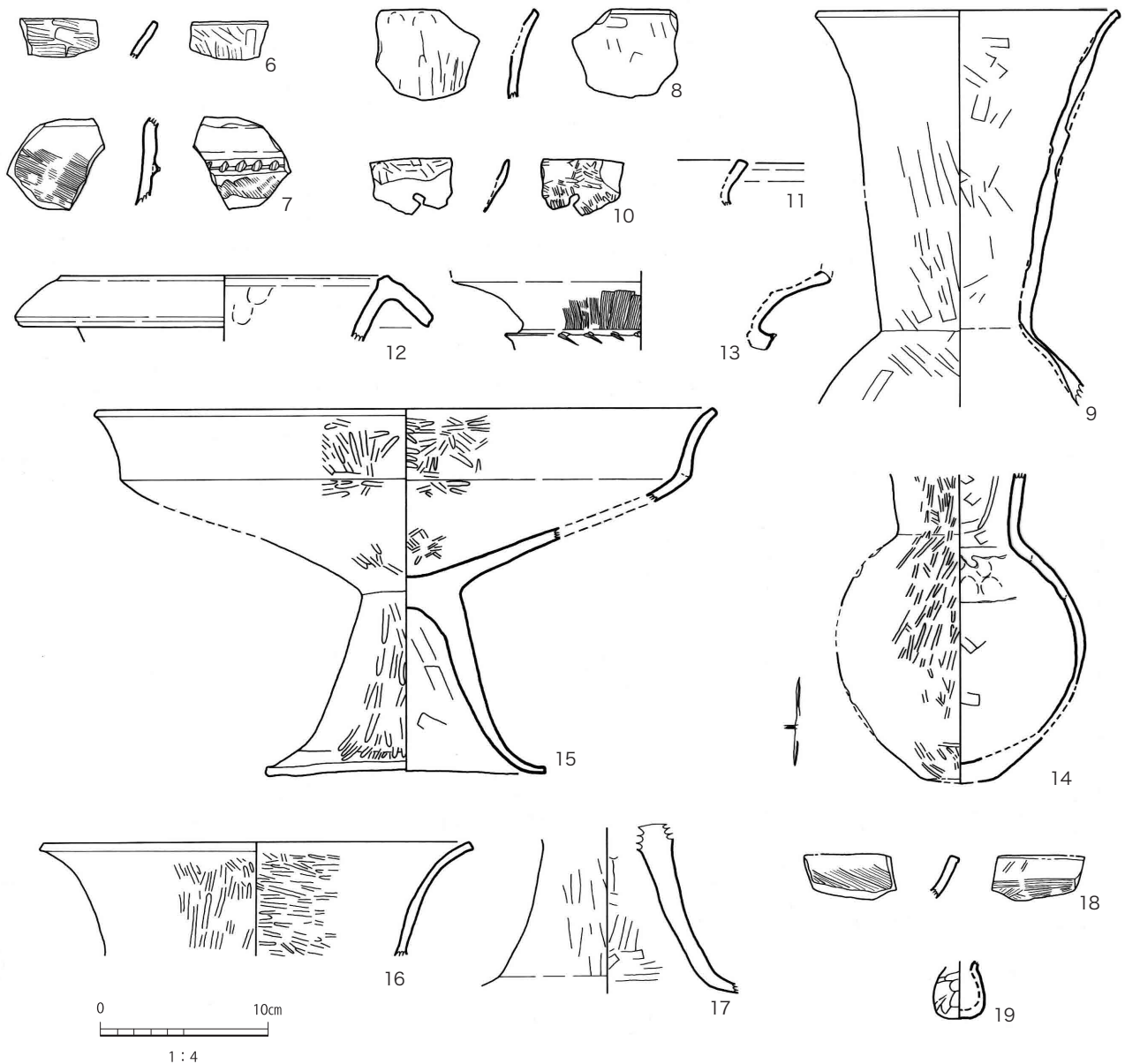


第14図 SA 1 土器出土状況図

0.02~0.04mの壁溝を設けている。

床面では小穴10基を検出した。床面の形と対応しないが、P 1~P 4が主柱穴と考えられる。深さはいずれも約0.1mの窪みをもつ程度であった。P 5は中央土坑で、規模（径約0.9~1.1m、深さ約0.2m）の不整楕円形を呈している。内部の底面が硬化しており、一部被熱した箇所があった。その他の小穴はいずれも用途不明である。

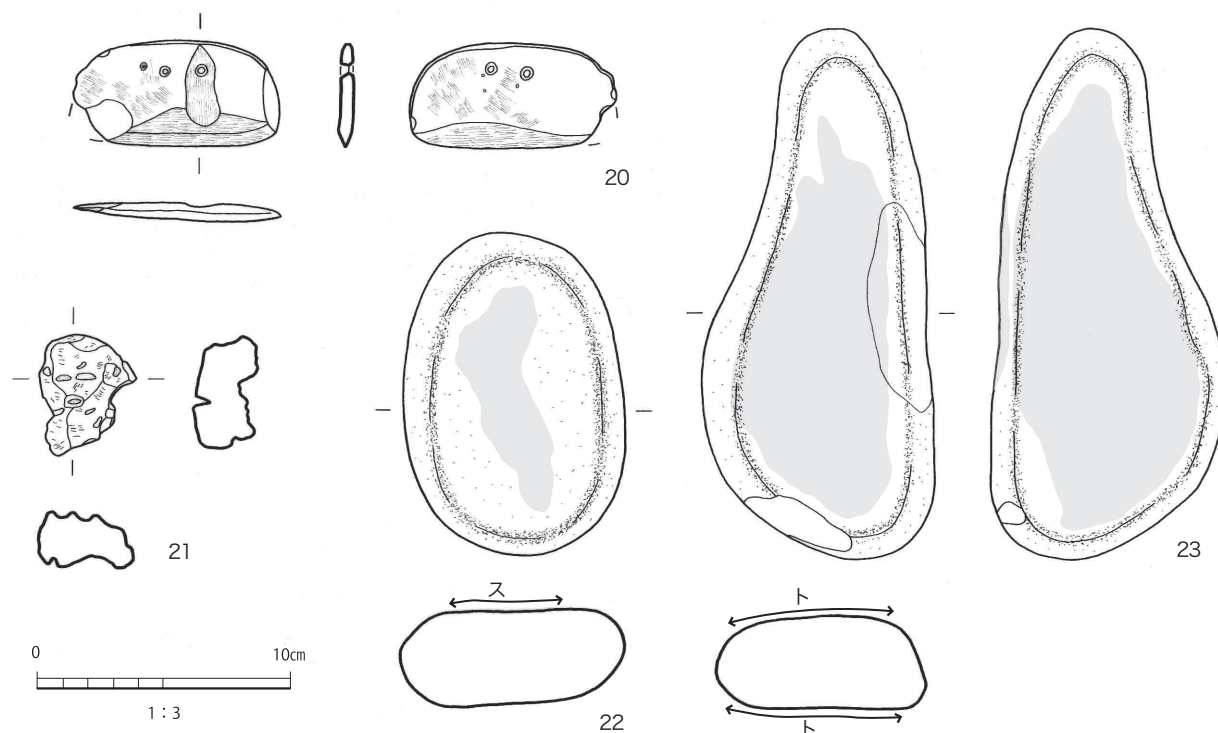
埋土は黒色系粘質土からなり、14層に分けられる。レンズ状に堆積しており、崩落を繰り返しながら自然に埋没していったことが伺える。明確な貼床は設けず、床面として地山のVI b層全面に硬化面を確



第15図 SA 1 出土遺物①

認した。遺物は主に4、7、9、13層に含まれるが、4、7、9層の遺物は最終の埋没過程時での流れ込みである。13層から出土した遺物は、そのほとんどが床面から近い高さで出土し、床面の西側半分に集中している。破碎されているものが多く、建物の廃絶に合わせて竪穴内に廃棄したものと考えられる。また、遺物の他に5～10cm程度の炭化物の検出が目立ったことから、床面直上から検出した炭化物2点の放射性炭素年代測定を行った（第IV章参照）。

6・7は甕である。6は口縁部で、内面は横方向の工具痕、外面は頸部に縦方向のハケが施されており、外面全体にススが付着している。7は頸部に近い胴部で、内外面の頸部付近に横方向のナデ、胴部には斜方向のハケが施されている。また、外面には1条の刻目突帯をもつ。8～14は壺形に属する個体である。8は緩やかに外反する口縁部で、端部は面をなす。9は長頸壺で、頸部は外傾しながら伸び、大きく外反する。口縁部の端部は面をなす。10は内湾する口縁形で、やや受け口状になる。口唇部に指

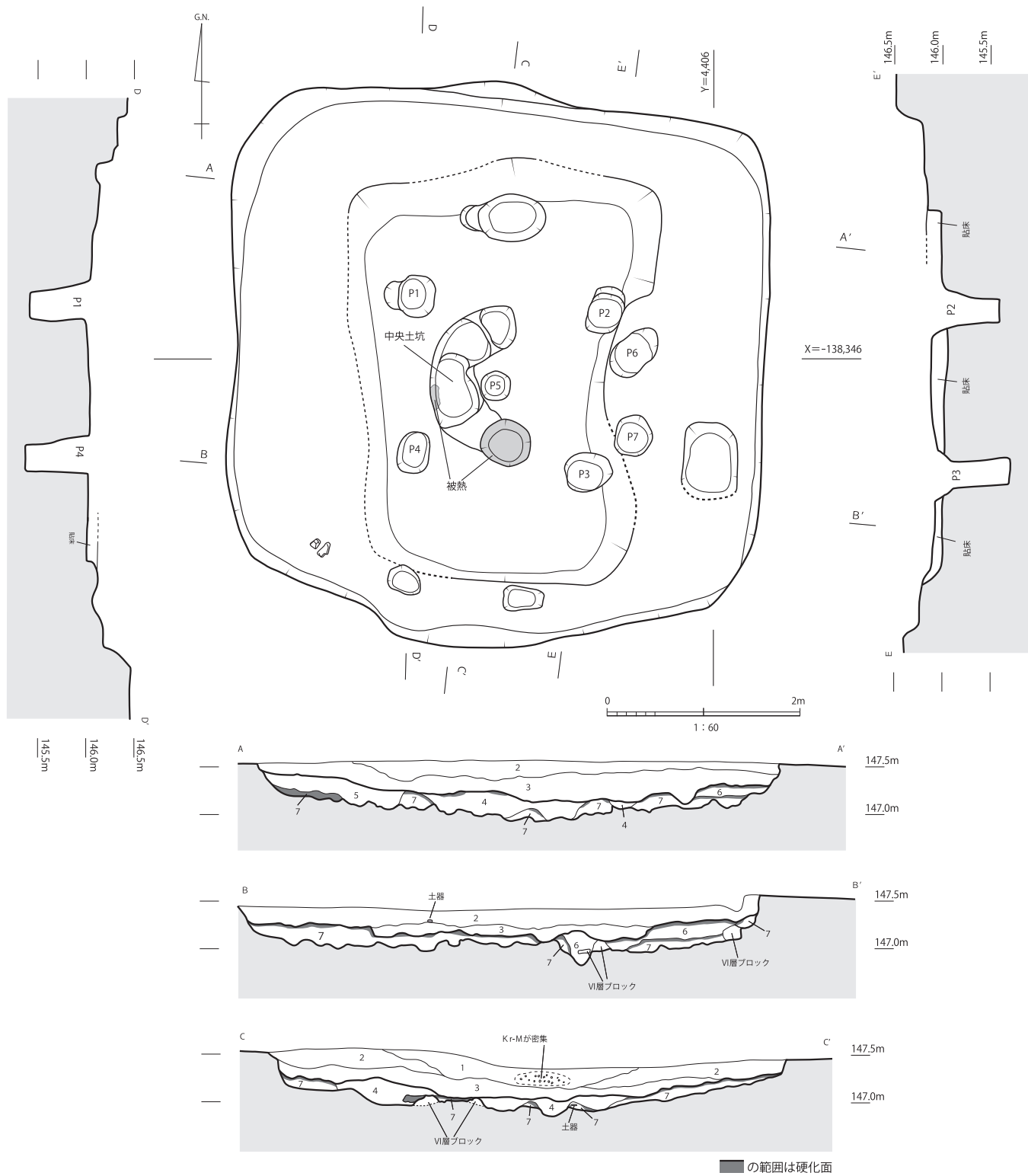


第16図 SA 1 出土遺物②

頭痕が残り、外面に縦方向のハケの後、ミガキが施されている。11は短く外傾する口縁部をもつもので、内外面に丁寧なミガキの後、横方向ナデが施されており、端部は面をなす。12の口縁部はやや垂れ下がった逆「L」字状を呈する。この遺物のみ中期に属する。13は頸部に斜めの刻目を有する突帯をもつ複合口縁壺である。上部は粘土のつなぎ目で口縁部が外れており、逆「く」の字に内傾していく様相が見て取れる。14の胴部はやや縦長の球胴である。底部は小さな平底で、ここも含めて外面は丁寧なミガキが施されている。また、胴部下方には直線的に広がる十字の線刻が施されている。15～17は高坏である。15は坏部を有し、口縁部が外反しながら短く立ち上がり、端部は面をもつ。脚部はスカート状に開く。16は坏部から直立しながら伸び、端部で外反する口縁部で、口唇部面をなす。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。17は脚柱部で、坏部との接合部と考える粘土のつなぎ目が上端に残る。底部にかけてスカート状に開く。18は鉢の口縁部で、端部は面をなす。19はミニチュア土器で、外面に指頭痕が認められる。20は頁岩製の石包丁である。背部は緩やかに湾曲し、刃部は直線的である。孔は両側から2か所に穿たれ、未貫のごく浅い孔が4か所認められる。21は軽石製品である。平滑にした面に、目と口を掘り込むことから人を表現した岩偶と推定する。また、左目の横に耳孔の表現もみられる。22は磨石である。砂岩製の扁平な円礫で、表面の平滑面に磨面が認められる。23は砥石である。両面と側面の長軸方向に砥痕が認められ、被熱により一部が赤化しており、また、黒変している箇所もみられる。

## 2号竪穴建物 (SA 2) (第17～19図)

11DグリッドのV b層上面で、方形プランの黒色土の広がりを検出した。遺構の性格を確認するために設定したトレンチ断面B-B'の東側で、柱穴と考えられる深い小穴や貼床を確認したが、2面の硬化面が確認できたことで、建て替えの可能性をもつ竪穴建物として調査を開始した。その後、平面掘削



- 1層：黒色土 しまりなし。粘性なし。中央のレンズ堆積。5 mm以下のKr-Mを含む。中央付近には、10 mm程度のKr-Mを含む。
- 2層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。1 mm以下のKr-Mを含む。所々、5 mm以下のKr-Mが混じる。
- 3層：黒褐色土 しまり弱い。粘性なし。10 mm以下のKr-Mを多量に含む。下部に連れてしまりが強くなり、1 mm以下のKr-Mが多量に混じる。
- 4層：黒色土 しまり強い。がちがちに硬い。粘性なし。1 mm以下のKr-Mを多量に含む。所々、5 mm以下のKr-Mを少量含む。建替え後の貼床か。
- 5層：黒褐色土 しまり弱い。粘性なし。5 mm以下のKr-Mを含む。
- 6層：黒褐色土 しまりとても強い。がちがちに硬い。粘性なし。上面にはKr-Mが多量に混じる。建替え時に貼られたベッド状の貼床と考えられる。5 mm以下のKr-Mを多量に含む。
- 7層：黒褐色土 しまりとても強い。粘性なし。建替え前の貼床と考えられる。10 mm以下のKr-Mを含む。

第17図 SA 2-b平面・断面図

において、貼床面で検出した主柱穴とは別の主柱穴を貼床除去後に検出したことで、確実に建て替えが行われたことを確認した。以下、建て替え前の建物を S A 2 - a、建て替え後のものを S A 2 - b とし て詳述する。

#### S A 2 - b

建物の平面形は長軸5.8m、短軸5.5mの不整隅丸方形を呈している。主軸はN-5°-Wで、ほぼ南北にとる。総床面積は、ベッド状遺構を含めて約30㎡である。西辺は、建物中心にある主要な居住空間から約0.1m高く段を付けるように建て替え前の貼床（7層）でベッド状遺構が施されており、この部分は建て替え前から同じ様相であったと考えられる。東辺は、建て替えの前の貼床（7層）の上に黒褐色系粘質土の6層を施して、周囲のベッド状遺構の高さと合わせるように、高さ約0.2mの段を作り、新たにベッド状遺構を設けている。南辺は地山（VIb層）を掘削し、幅約0.4~0.6m、床面からの高さ約0.2mの段が設けられている。北辺は、地山（VIb層）を整形して高さ約0.1mの段が2段設けられ、その上に貼床が施されている。その貼床面は、中央から北辺に向かってなだらかに約0.3m程度上がる。これにより、幅0.5m~1.6m、高さ約0.1~0.3mのベッド状遺構が建物の周囲を一周する。最大深度は、検出面から中心の床面までが約0.5m、ベッド状遺構面までが約0.3mである。

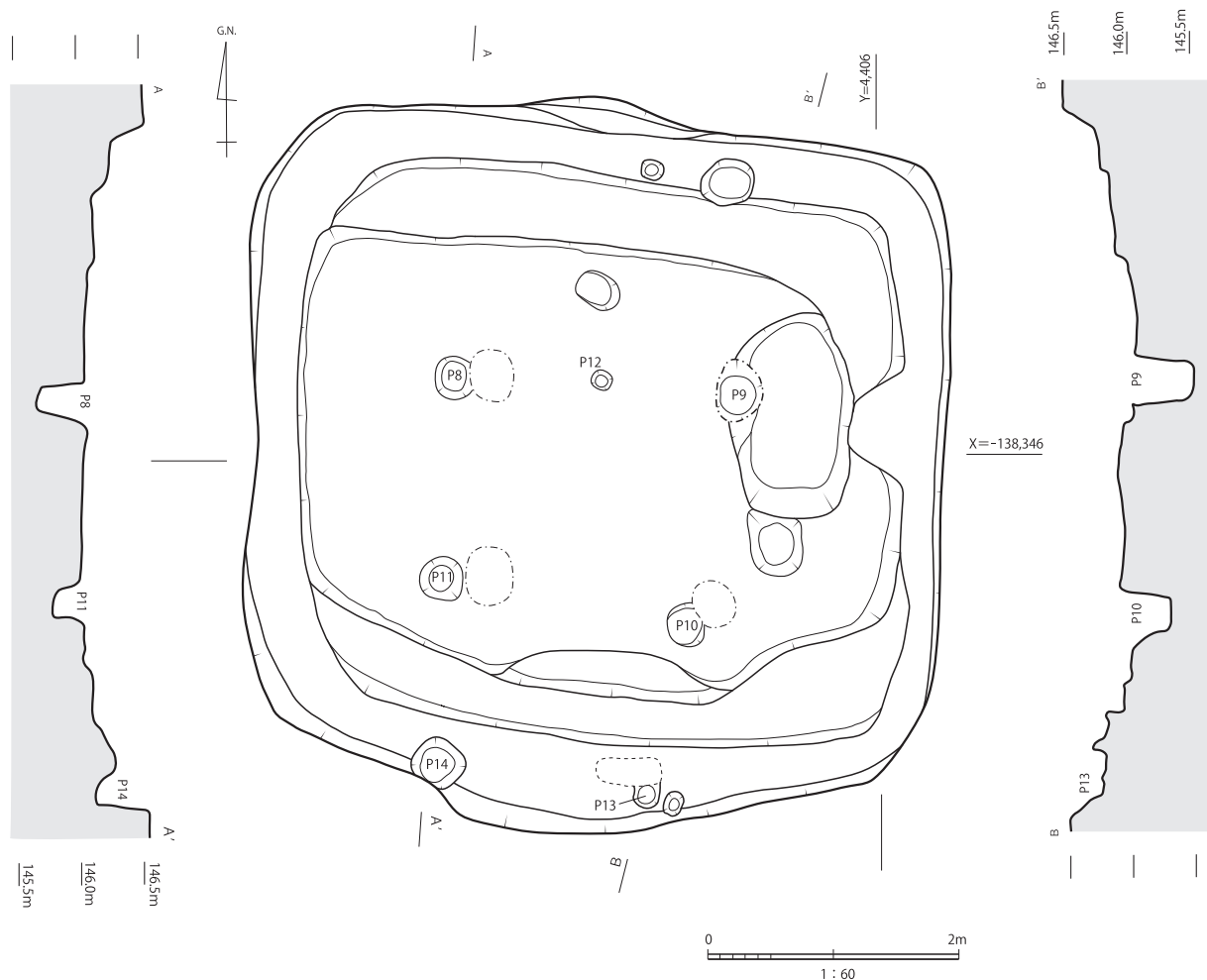
床面上では小穴11基を検出した。方形に並ぶP1~P4が主柱穴であると考え。P2は建て替え前と同じ位置で、P1は東側に0.3m程度、P3は北東側に0.3m程度、P4は東側に0.4m程度建て替え前の主柱穴からずれた位置に設けられている。規模はP1径約0.45m、深さ約0.6m）、P2（径約0.4m、深さ約0.64m）、P3（径約0.45m、深さ約0.6m）、P4（径約0.4m、深さ約0.64m）を測る。主柱間距離はP1-P2、P2-P3の順に2.0m、1.7m、1.8m、1.6mである。P5は建物中央にある小穴であり、規模は（径約0.3m、深さ約0.2m）を測る。P6、P7はP2、P3の補助的な柱穴であろうか。規模はP6（径約0.45m、深さ約0.22m）、P7（径約0.4m、深さ約0.2m）で、柱間距離は約0.9mである。この付近は建て替えの際にベッド状遺構が設けられており、その上面には、住居の際からP6、P7の間を通り、建物中央に向かって延びる霧島御池降下軽石を多量に含む硬化面が確認された。このことから、この付近は出入口に相当する場所で、P6、P7はそれに関連する柱穴であったと考えられる。中央土坑はP5を囲むように西側を巡っており、その西側と南側に被熱面を1か所ずつ確認した。中央土坑の南側には規模（径約0.5m、深さ約0.3m）の窪みを確認した。内面は全面的に被熱しており、ここが火処であったことが推察される。

6層は東側に設けられたベッド状遺構で、建て替え後に造られたものと思われる。6層、7層の上面は霧島御池降下軽石を多量に含んでおり、これは貼床にしまりをもたせるために意図的に敷かれたものと推察される。

埋土は黒色及び黒褐色系の粘質土からなり、4層は中央~北側の床面に広がっている。しまりが強く、一部上面に硬化面を確認した。4層を剥がした下から建て替え前の主柱穴を検出したので、建て替え後に設けられた主要な床面の貼床と考える。1~3層は地形に沿って竪穴内に流れ込むようにレンズ状に堆積することから、自然堆積層と考えられる。

#### S A 2 - a

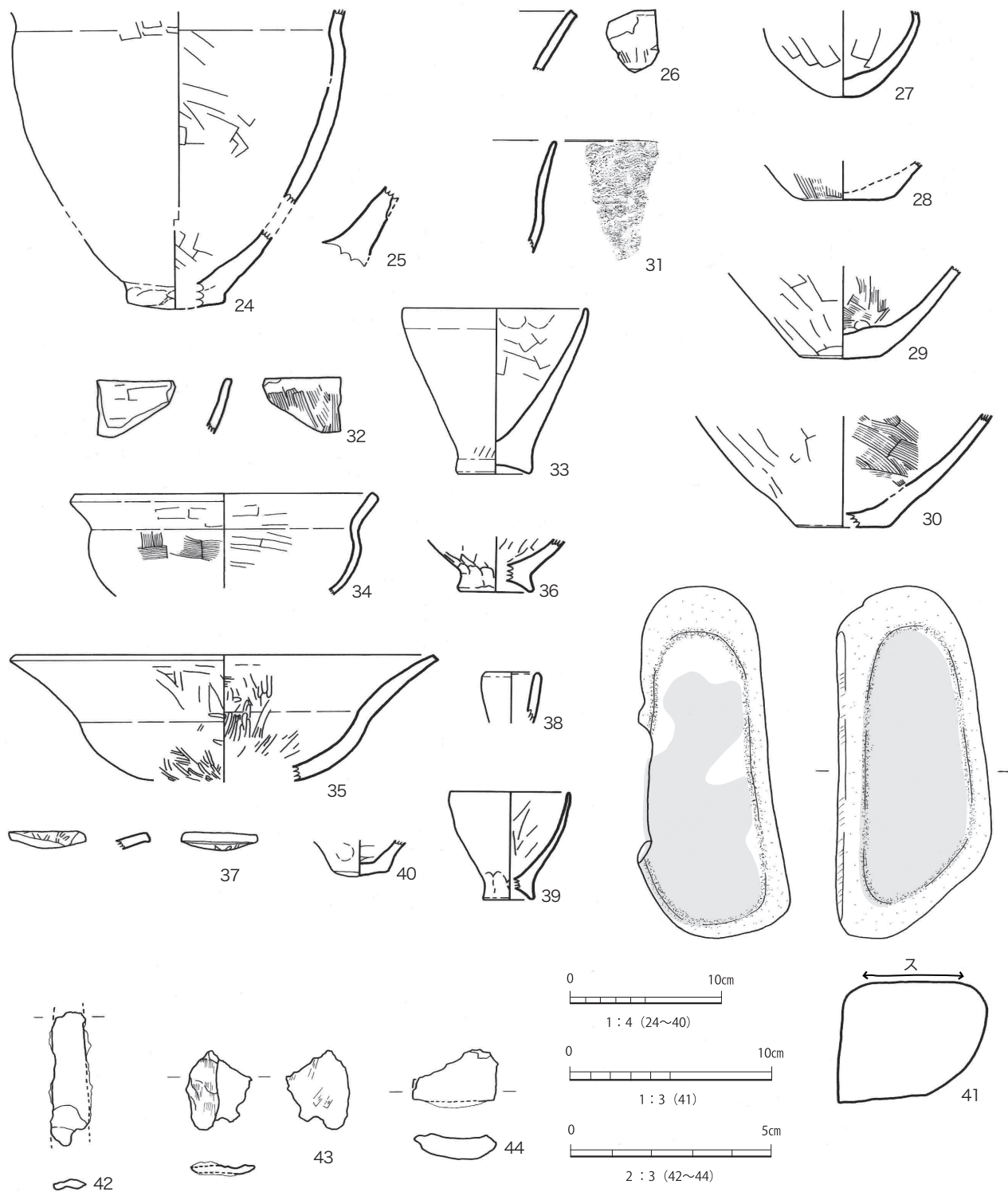
建物の総床面積は、建て替え後とほぼ同じである。長軸4.6m、短軸4.0mの長方形の床面を中央にして、幅0.6~0.75mのベッド状遺構が周囲を巡る。7層は、建て替え前の貼床で、VIb層に由来する径5



第18図 SA 2-a平面・断面図

～15cmのブロックを含む。ほぼ全面に渡って施される。東辺の壁際は、高さ約0.1m、幅約0.4mの地山(VI b層)の段が、周辺の段と同じ高さ整形され、その段差を埋めるように貼床が施されている。北辺、西辺、南辺は建て替え後と同じ様相であると考え。P 8～P 14が建て替え前の建物に伴う小穴である。このうち、方形に並ぶP 8～P 11が主柱穴と考えられる。規模はP 8(径約0.3m、深さ約0.4m)、P 9(径約0.45m、深さ約0.48)、P 10(径約0.3m、深さ約0.4m)、P 11(径約0.35m、深さ約0.22m)である。P 9は、他の柱穴と比べて径が一回り大きい。主柱間距離はP 8- P 9、P 9- P 10の順に2.3m、1.9m、2.0m、1.6mを測る。P 10の埋土は建て替え後の東側ベッド状遺構を構成する7層と同じであった。このことから、建て替え前の柱穴を埋める作業と東側のベッド状遺構造作が同じタイミングで行われたと考える。P 12は規模(径約0.15m、深さ約0.18m)と小さいが、内部は硬化しており、主柱穴を結ぶ線上に位置していることから、支柱の柱穴と考えられる。P 13とP 14は柱間距離が約1.7mで、深さは共に約0.1mである。南辺は、地山のVI b層を整形して段が設けられており、また、この辺のみ約0.1～0.3m程度緩やかに張り出していることから、この場所が建て替え前の出入口であり、P 13、P 14はそれに関連する柱穴と考えられる。

遺物は主に建て替え後の住居を埋める2～3層に含まれる。ただし、2・3層は自然堆積による流れ



第19図 S A 2 出土遺物

込みで、遺物は建て替え後の床面直上である4層との境界に多く出土していることから、建物の廃絶時に伴うものと考えられる。

24・25は甕である。24は図上で復元したもので、やや丸みのある平底をもつ。内外面に工具ナデが施されている。25は底部付近である。内面にススが付着しており、放射性炭素年代測定を実施した（第IV



章参照)。26～30は壺である。26は端部に面をもつ口縁部である。内外面に横方向のナデの後、ミガキが施されている。27～30は底部で、27は小さな底面をもつが、ほぼ丸底に近い。それ以外は平底である。27は内外面に斜方向の工具ナデ後、丁寧なナデ、28の内面は斜方向のハケ後ミガキが施されている。29・30は内外面に斜方向の工具ナデが施され、29の内面には指頭痕が残る。31～36は鉢形の土器と考えられる。31は緩やかに屈曲しながら立ち上がり、口唇部に向かって薄くなる。口縁部外面に2段の櫛描波状文が施されている。宮崎市源藤遺跡出土資料に類似するものか。32は内湾する口縁部で、外面はハケで調整する。33は緩やかに内湾する口唇部で、端部を鋭くつくる。34の胴部は球状を呈し、端部を面にする口縁部は「く」の字に屈曲しながら、やや短くつくる。外面にススが付着する。35は、浅い胴部からやや不明瞭に屈曲して大きくのびる口縁部をもつ。口縁端部は面にする。口縁部外面は横・斜方向のハケが目立つが、全体に丁寧なミガキがかかる。内面の口唇部にススが付着する。36は小型の鉢の底部付近で、上げ底にする。37は器台の口縁部と思われ、内外面にミガキが施されている。38～40はミニチュア土器と考えられる。38はほぼまっすぐに立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。39は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部を鋭くつくる。底面は指つまみによって上げ底を施している。40は平底の底部で、内外面に指頭痕が巡る。41は砂岩製の砥石で、表面と側面の2面に砥面が認められる。42～44は鉄片である。42は鉈の柄にあたるか。43の器種は不明だが、木質が残る。44は三角鉄片の可能性があり。

### 3号竪穴建物（SA3）（第20～22図）

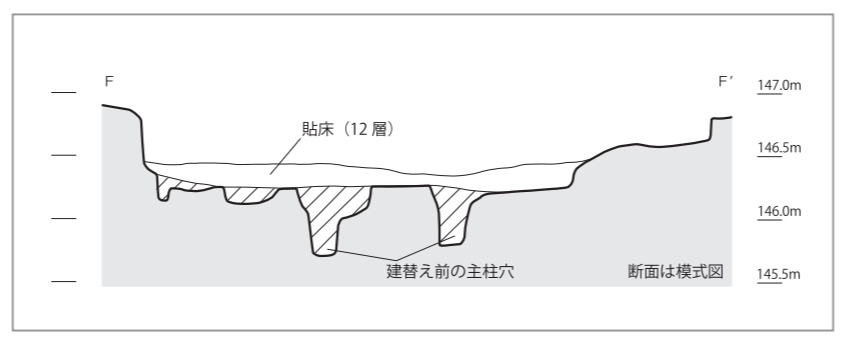
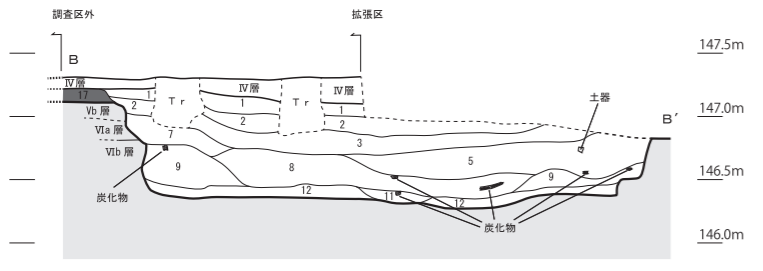
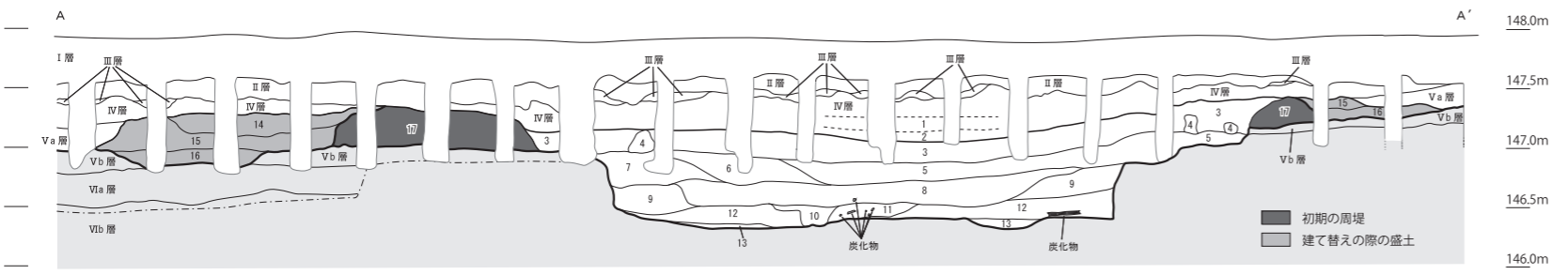
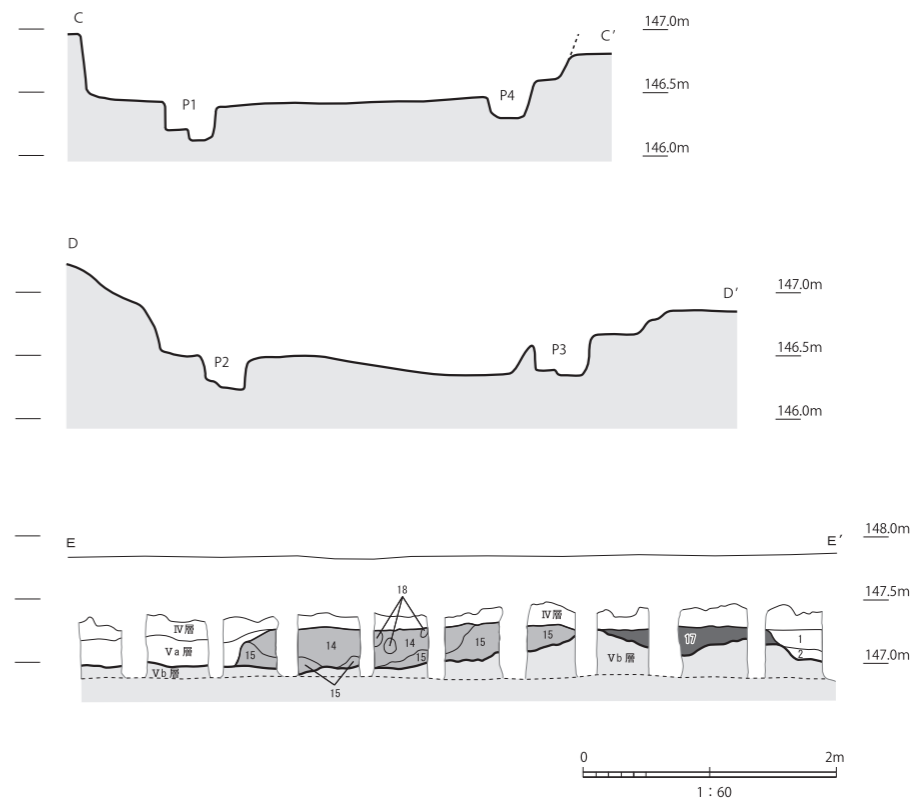
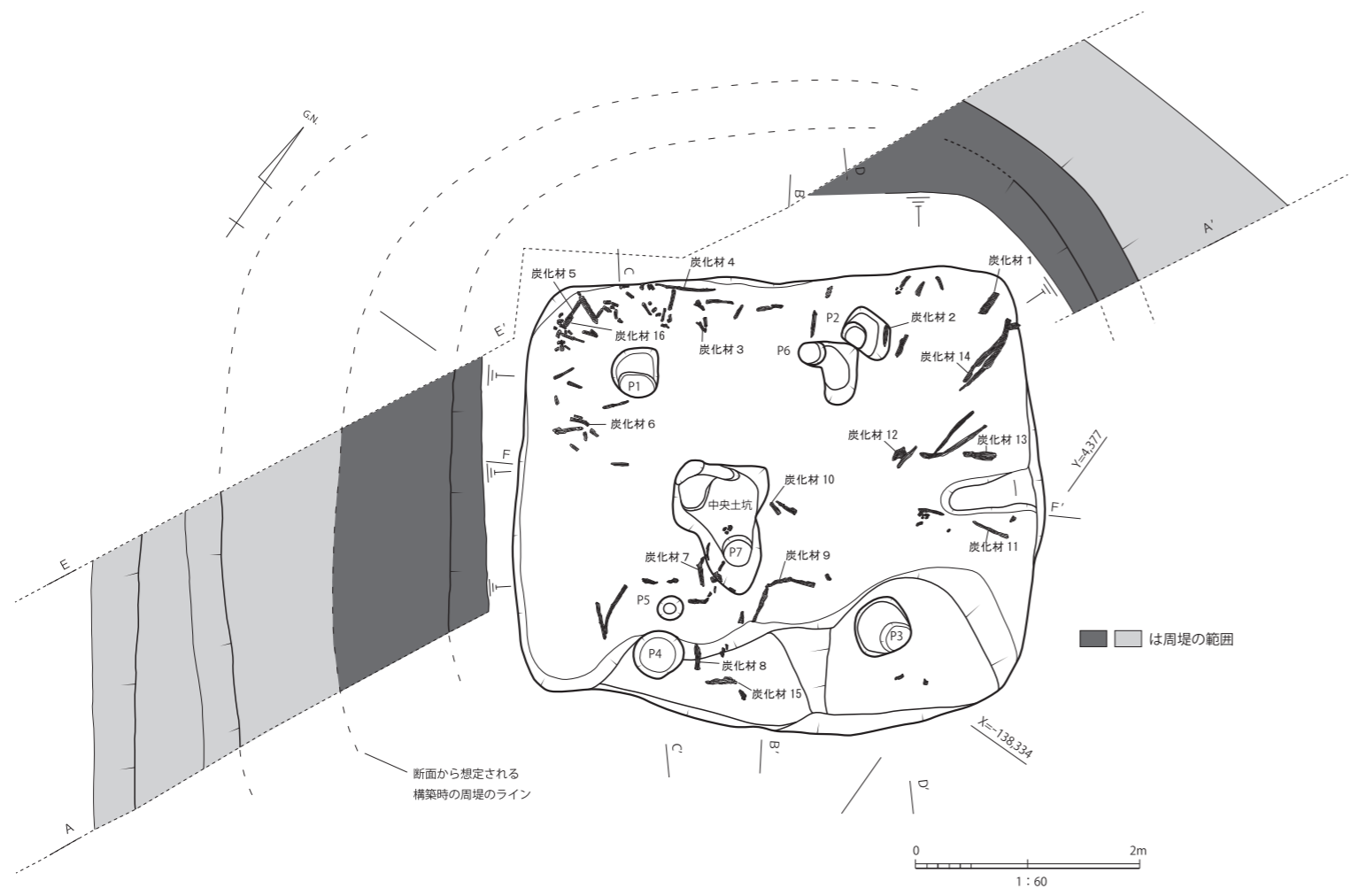
8CグリッドのVa層上面で、長方形プランの黒色土の広がりを検出した。SC1の西側に近接する。平面形の西半分を確認したが、残り半分は調査区西側外へと続いていたので、検出した範囲の調査を行った後に西側を拡張することにした。平面的な調査をする前に、先行トレンチを設定して掘削したところ、床面、壁溝、小穴及び壁面の立ち上がりが確認できたことで竪穴建物と判断したが、掘削中に多量の炭化材が出土したため、焼失住居の可能性を考えながら調査を行った。

平面掘削において、貼床面に支柱穴と考えられるほぼ方形に並ぶ4基の柱穴を検出し、さらに完掘を目指して貼床を剥がすと、中央付近に上記とは別の支柱穴と考えられる2基の柱穴を検出した。このことから、SA3は建て替えが行われた竪穴建物であると確認できた。また、当初の検出作業では、遺構埋土との差を認識できず、平面的に検出できなかったが、トレンチA-A'において、SA3の両肩外側に遺構構築面であるIV層上に周堤と推察される高まりを確認した。このため、調査区の拡張の際には周堤の平面的な検出に努め、建物の周囲を巡る小ブロックを多量に含む高まりを確認し、これを周堤とした。以下、建て替え前のものをSA3-a、建て替え後のものをSA3-bとして詳述する。

#### SA3-b

長方形を基調とした竪穴建物で、平面形は長軸4.7m、短軸3.6mの隅丸長方形を呈し、軸はN-35°-Wにとる。推定床面積はベッド状遺構も含めて約16.9㎡である。壁高は北西掘り込み面から床面まで最大約0.7mを測る。15層を床面とし、ほぼ平坦になっている。建て替え後は2本柱から4本柱へと柱数を増やし、建て替え前の東辺のベッド状遺構の高さに合わせるように主たる居住空間を埋めたと考えられる。南辺にはV層に相当する黒色土で、幅0.5～1.5mのベッド状遺構が整形されていた。

今回、SA3の西半分が調査区外に至ったことから、遺構にかかる堆積状況が西壁断面で上位層から検証できた。このことにより、建物を掘削した土で構築された、SA3を巡る高まりの残存を一部確認



- 1層：黒色土 しまりなし。粘性なし。2mm以下のK-r-Mを少量含む。
- 2層：黒色土 しまりなし。粘性なし。2mm以下のK-r-Mを含む。
- 3層：黒色土 しまりなし。粘性なし。5mm以下のK-r-Mを少量含む。
- 4層：黒色土 しまり弱い。粘性なし。5mm以下のK-r-Mを含む。
- 5層：黒色土 しまりなし。粘性なし。5mm以下のK-r-Mを含む。  
中央付近に5～10mmのK-r-Mが混じる。
- 6層：黒色土 しまり弱い。粘性なし。5mm以下のK-r-Mを含む。
- 7層：黒色土 しまりなし。粘性なし。5mm以下のK-r-Mを含む。
- 8層：黒褐色土 しまり強い。粘性なし。10mm以下のK-r-Mを多量に含む。
- 9層：黒褐色土 しまり強い。8層よりしまり弱い。粘性なし。10mm以下のK-r-Mを多量に含む。
- 10層：黒褐色土 しまり強い。粘性なし。10mm以下のK-r-Mを含む。9層よりK-r-Mの割合少ない。  
5mm以下程度の炭化物が混じる。
- 11層：黒褐色土 しまり強い。粘性なし。3mm以下のK-r-Mを含む。
- 12層：黒褐色土 しまり極強い。粘性なし。貼床と考えられる。10mm以下のK-r-Mを多量に含む。
- 13層：黒色土 しまり弱い。粘性なし。3mm以下のK-r-Mを含む。5mm程度の炭化物が混じる。
- 14層：黒色土 しまりなし。粘性なし。シルト質。5mm以下のK-r-Mを少量含む。
- 15層：黒色土 しまりなし。粘性なし。シルト質。3mm以下のK-r-Mを少量含む。
- 16層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。2mm以下のK-r-Mを含む。
- 17層：黒色土 しまりなし。粘性なし。2mm以下のK-r-Mを少量含む。
- 18層：黒色土 しまりなし。2層よりしまりあり。粘性なし。3mm以下のK-r-Mを少量含むブロック層。

第1表 炭化材 樹種同定結果

番号	和名	番号	和名	番号	和名	番号	和名
1	ミツバウツギ	5	サカキ	9	ムクロジ	13	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	エゴノキ属	6	ムクロジ	10	モチノキ属	14	モッコク
3	コナラ属アカガシ亜属	7	炭質物	11	コナラ属アカガシ亜属	15	クスノキ科
4	コナラ属コナラ亜属コナラ節	8	クスノキ科	12	カエデ属	16	アカガシ亜属

第20図 SA3-b平面・断面・模式図

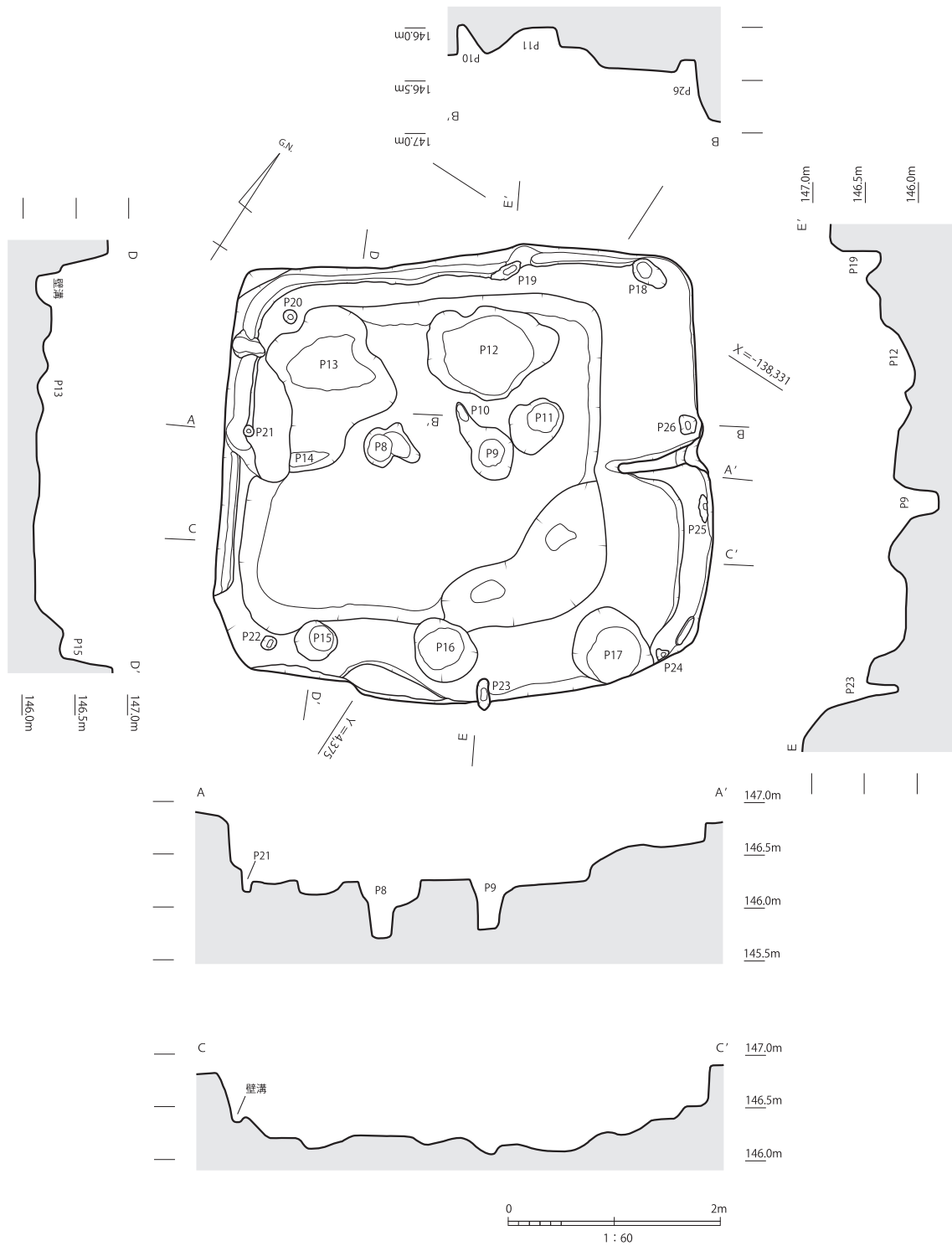
した。調査区の拡張後に高まりの平面的な広がりも一部検出できたことからこれを周堤とした。規模は、最大で西側が幅約3.3m、高さ約0.24~0.4m、北側が幅約1.9m、高さ約0.2~0.38mを測る。そのうち、17層が山状に一塊の層であったことから、これが当初からの残存する周堤と考える。規模は、高さ0.18~0.34m、幅0.54~1.76mである。14~16層は、第IV層に酷似しており、建て替えの際に修繕の一環として施された盛土と考える。18層は、IV層に相当するしまりをもった粘質土である。西側は調査区外に至り、東から南側は先述したが、当初の遺構埋土との違いを認識できず、検出できていない。形状は遺構に沿って屈曲していく様相が伺え、S A 3の外縁を巡るように復元できる。また、南西側と北側では幅の違いがみられるが、これは、旧地形が北東から南西に方向に緩やかに傾斜していることから、自然崩落によって、北側は建物内に流れ込み、西側は南側に広がるように堆積したことが考えられるが、14~16層は人為的に作られたとも考えられる。さらに、南側の16層が堆積するV b層上面の窪みは建物構築時に掘られた土坑の可能性も考えておきたい。

床面上では小穴7基を検出した。P 1~P 4は支柱穴である。規模はP 1（径約0.25m、深さ約0.3m）、P 2（径約0.2m、深さ約0.27m）、P 3（径約0.25m、深さ約0.3m）、P 4（径約0.4m、深さ約0.3m）を測る。支柱間距離はP 1-P 2、P 2-P 3の順に2.0m、2.7m、2.2m、2.4mを測る。P 1~P 3の断面は段が付いており、柱を引き抜く作業の際に肩部が壊れたことが考えられる。P 5はP 4に、P 6はP 2に付随する補助的な柱穴であると思われる。深さは両方とも約0.15mである。中央付近に長軸1.2m、短軸0.5mの不整形な中央土坑、その南東端にP 7を検出した。内部は全体的に被熱していたため、火処であったと推察される。

先述したように、本住居には炭化物が多く遺存しており、これらは概ね5~11層に含まれる。自然堆積の5~7層においては主に炭化物粒が大量に出土し、8~11層においては、炭化物粒に加えて、炭化材が多く出土している。特に、建て替え後の貼床である12層上面の8~9層において炭化材がまとまって出土しており、炭化材の長さは約0.1~0.8m、幅は最大で0.1mを測る。壁際に集中して、建物の中心に向かって放射状になっているものが多く、北側からは壁と平行に、壁際に沿っているものも検出された。このことから残存している炭化材の多くは垂木や屋根材と推察される。また、8~9層には熱を受け部分的に赤化した土も確認した。これらのことから、本遺構は土屋根建物で、8~9層は屋根に葺いた土で、焼失した際に一部が被熱した可能性を考えておきたい。さらに、炭化した部材が残っていること、赤化した土の量や範囲が限定的であること、床面に被熱面がほとんど見られないことから、建物が完全燃焼し屋根土まで激しく被熱するような状態ではなく、部分的に炭化する程度の燃焼であったとも推察できる。加えて、炭化材1~14の樹種同定を行ったところ、エゴノキ属やコナラ属、カエデ属、クスノキ科等、多種多様な部材であるという結果を得た。なお、床面直上から出土した炭化材5点の放射性炭素年代測定も行った（第IV章参照）。

建物を埋める埋土は、主に黒色及び黒褐色系の粘質土からなり、13層に分層できる。そのうち1~7層は、地形に沿って流れるように堆積していることから、建物廃絶後に自然堆積によって埋没したと考えられる。10~11層は中央土坑の埋土である。

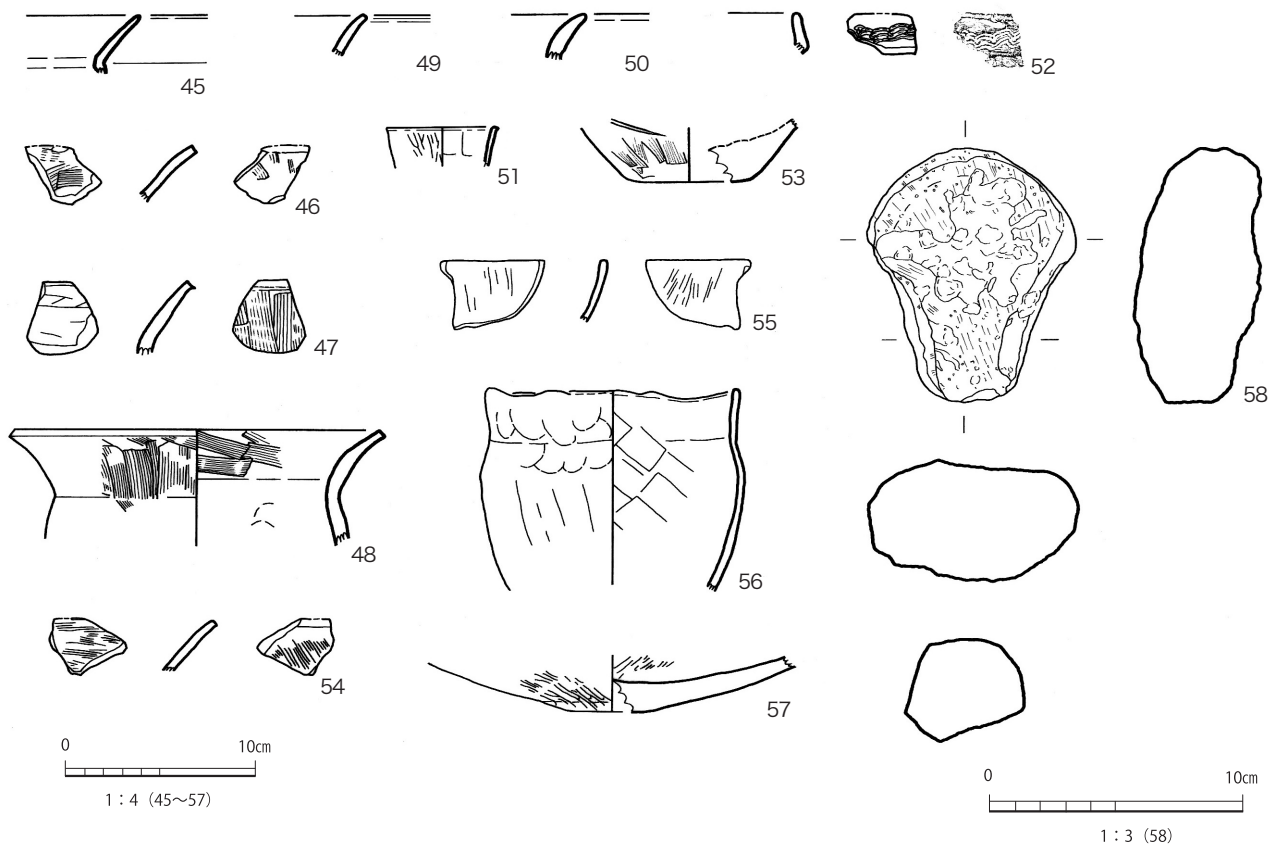
遺物は少なく、1~3層、5~8層に破片が混じる程度であり、床面と考えている直上からは出土していない。



第21図 SA 3 - a平面・断面図

### SA 3 - a

平面形は長軸4.7m、短軸3.9mの隅丸長方形を呈し、ベッド状遺構が東辺から南辺にかけてVI b層を整形して施されている。幅は東辺0.8~0.94m、南辺0.28~0.64mで、床面からの高さは約0.2mである。東辺のベッド状遺構には、中央付近にVI b層を掘り残すように間仕切りが設けられている。建て替え前



第22図 SA 3 出土遺物

の推定床面積はベッド状遺構も含めて約17.6㎡である。東辺の間仕切りから南東隅までは、幅0.21～0.39mのベッド状遺構が床面から0.28mの高さにVIb層を整形してもう一段設けられている。先述した北辺から西辺の壁際のベッド状遺構には壁溝が巡る。北側は北東隅のP18に落ち込む形で収束し、北西隅から約0.6m付近の西辺で途切れ、西辺中央付近から南西隅の0.5m手前まで施されている。規模は幅0.04～0.1m、深さ0.03m前後で、断面は椀状になる。それらの壁溝に沿ってP18～21が並ぶ。P22～26も壁面に沿っている。これらの小穴を平面形に見ると、各壁の四隅、中央付近に見られる。各小穴の径は約0.04～0.24m、深さ0.1～0.29mと幅があり、いずれも内部の壁面、床面が硬化している。壁の地山であるVIb層はしまりがなく、崩れやすいため、その崩落を防ぐために板が張られ、それを固定するための補助的な柱穴ではないかと考える。

建て替え後の貼床を除去したところで、19基の小穴を検出した。中央に並ぶP8・P9は支柱穴であると考え。規模はP8（径約0.25m、深さ約0.54m）、P9（径約0.25m、深さ約0.47m）である。支柱間距離は0.6mを測る。P10・P11はP9の補助的な柱穴であると考え。規模はP10（径約0.15m、深さ約0.28m）、P11（径約0.5m、深さ約0.18m）である。P12～14は床面上に掘削された土坑である。深さは0.05～0.15mと浅く、最大幅1.0mを測り、支柱穴をよけるように掘削されている。また、南辺のベッド状遺構上には、壁際にP15～P17の土坑が並んで設けられていた。規模はP15（径約0.42m、深さ約0.22m）、P16（径約0.6m、深さ約0.23m）、P17（径約0.65m、深さ約0.2m）である。

遺物は全て建て替え後の貼床より上位から出土した。45～48は甕である。45～47は口縁部で、45は

「く」の字状に屈曲し、端部は鋭くつくる。46・47は共に口縁端部に面をもち、46は内外面に斜方向のハケ、47は外面に縦方向のハケ、内面に横方向の工具ナデが残る。48は口縁部の屈曲は明瞭でないが、やや外反しながらのびるもので、外面は縦・斜方向、内面は横・斜方向にハケが施されている。49～53は壺形の土器と考えられる。49・50は緩やかに外反する口縁端部である。51は精製の小型の直口壺と考えられる。外面は斜方向のミガキ、内面は横方向のナデ、面をなす口縁端部にもミガキが施されている。52は複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描波状文が施されている。53は平底を呈する底部である。54は緩やかに外反する高坏あるいは鉢の口縁部である。内外面にミガキが丁寧に施されているが、ハケ調整が残る。55～57は鉢と考えられるものである。55は碗形の口縁部である。内外面に横方向のナデ後にミガキが施されている。56は頸部で緩やかに屈曲し、口縁部にかけてほぼまっすぐに立ち上がる。小形の甕の可能性もある。57は小さな平底の底部をもつもので、浅い碗形になるものか。内外面に斜方向のミガキが施されている。58は軽石製品で、男根形の可能性も考えておきたい。また、表面に火を受けた形跡があり、一部にススが付着する。

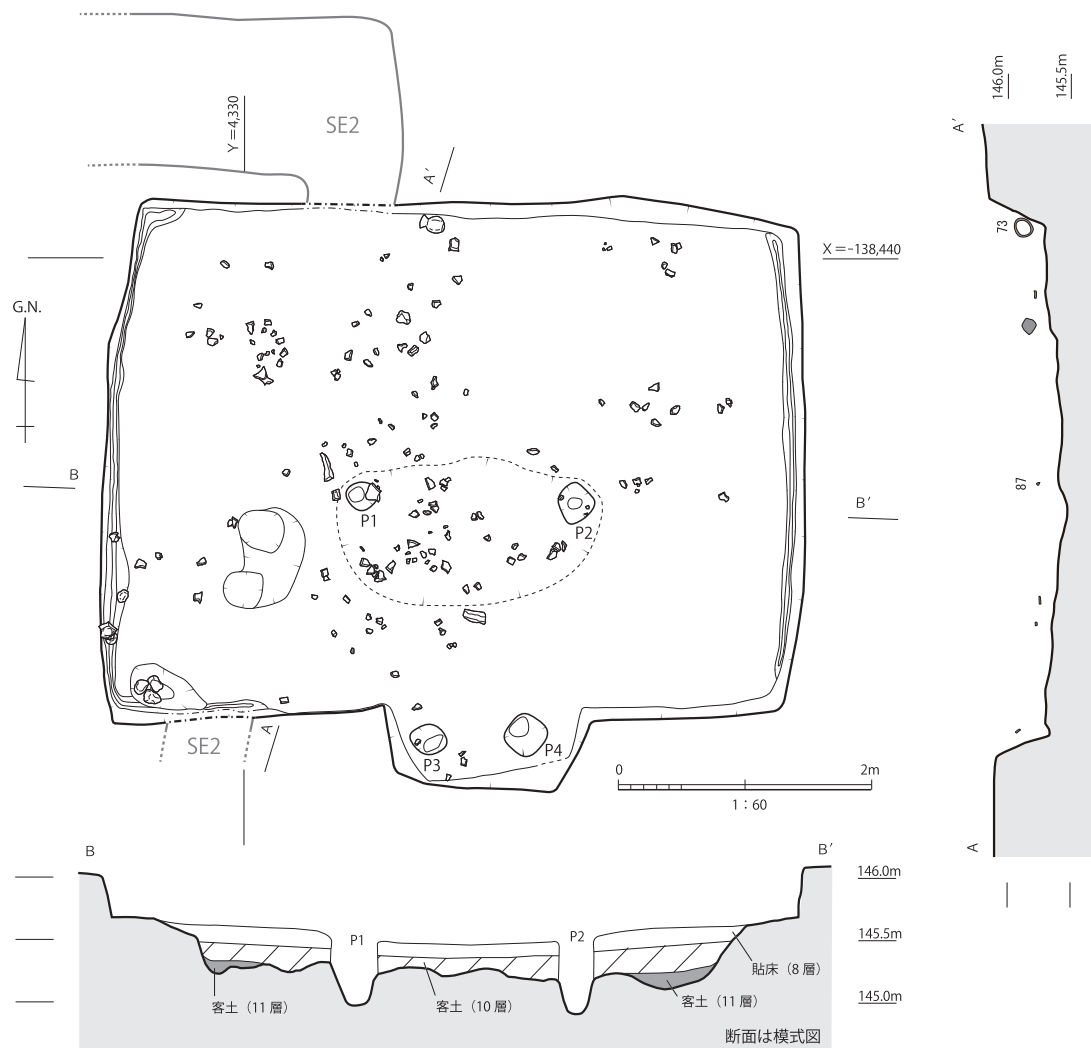
#### 4号竪穴建物（SA4）（第23～28図）

3M～4MグリッドのV a層上面で、長方形プランの黒色土の広がりを検出した。周囲には、南側約2mに古代の溝状遺構（SE1）が近接し、遺構の一部が近世の溝状遺構（SE2）によって攪乱を受けている。全体の掘削前に設定した2本のトレンチA-A'とB-B'の断面から2枚の床面、壁溝、小穴及び壁面の立ち上がりを確認したことから、竪穴建物と判断し調査を進めた。主軸はN-5°-Eで、ほぼ南北方向に向く。

竪穴の平面形の規模は、長軸5.6m、短軸4.1mを測る。検出面から0.46mの深さで硬化面の広がりが全域に確認でき、ここを第一床面とした。また、南辺の中央付近には、長さ1.7mに渡り、幅0.6m程の張り出しが施されている。総床面積は、約24.0㎡である。なお、第一床面上の東辺と西辺には壁溝が施されている。西辺の壁溝は南西隅を巡り、南辺約1.1mの長さで収束する。壁溝の規模は、幅4～20cm、深さ3～9cmで、断面は碗状をしている。さらに、先行トレンチで確認した第一床面である硬化面下のもう一枚の床面を検出すべく、硬化面（8層）を掘削していると、上位の平面形の二回り程小さい凸型の不整隅丸長方形の掘り込みを検出した。規模は長軸4.4m、短軸2.8mである。この掘り込み面を埋める埋土はしまりがなく、完掘後の底面に貼床や硬化面、さらに柱穴も無いことから、第一床面に先行する居住空間としての様子は認められなかった。

第一床面上では、小穴4基を検出した。中央付近に並ぶP1・P2を支柱穴とする。規模は、P1（径約0.25m、深さ約0.48m）、P2（径約0.3m、深さ約0.52m）で、柱間の距離は1.7mを測る。P3・P4は、張り出し部分の段上に設けられている。規模は、P3（径約0.28m、深さ約0.24m）、P4（径約0.25m、深さ約0.21m）、間距離は0.8mを測り、出入り口に関連する柱穴と推察される。

建物を埋める埋土は主に黒色及び黒褐色系の粘質土からなり、10層に分層できる。1～6層は一部樹根や南側に近接するSE1の影響は見られるものの、ほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と推察できる。貼床（8層）は、南側の張り出し付近以外の全面に施されている。10層は貼床下の層で、V層・VI層が混在している。VIb層ブロックが多く混じり、明確に分層できないことから、自然堆積ではなく、人工的に埋められた層と考える。一部に硬化している箇所も見られたが、広がりが無いことから、貼床等の意図的なものではないと推察される。11層は粘性のあるシルト質の黒色土で、IV層由来の土であ

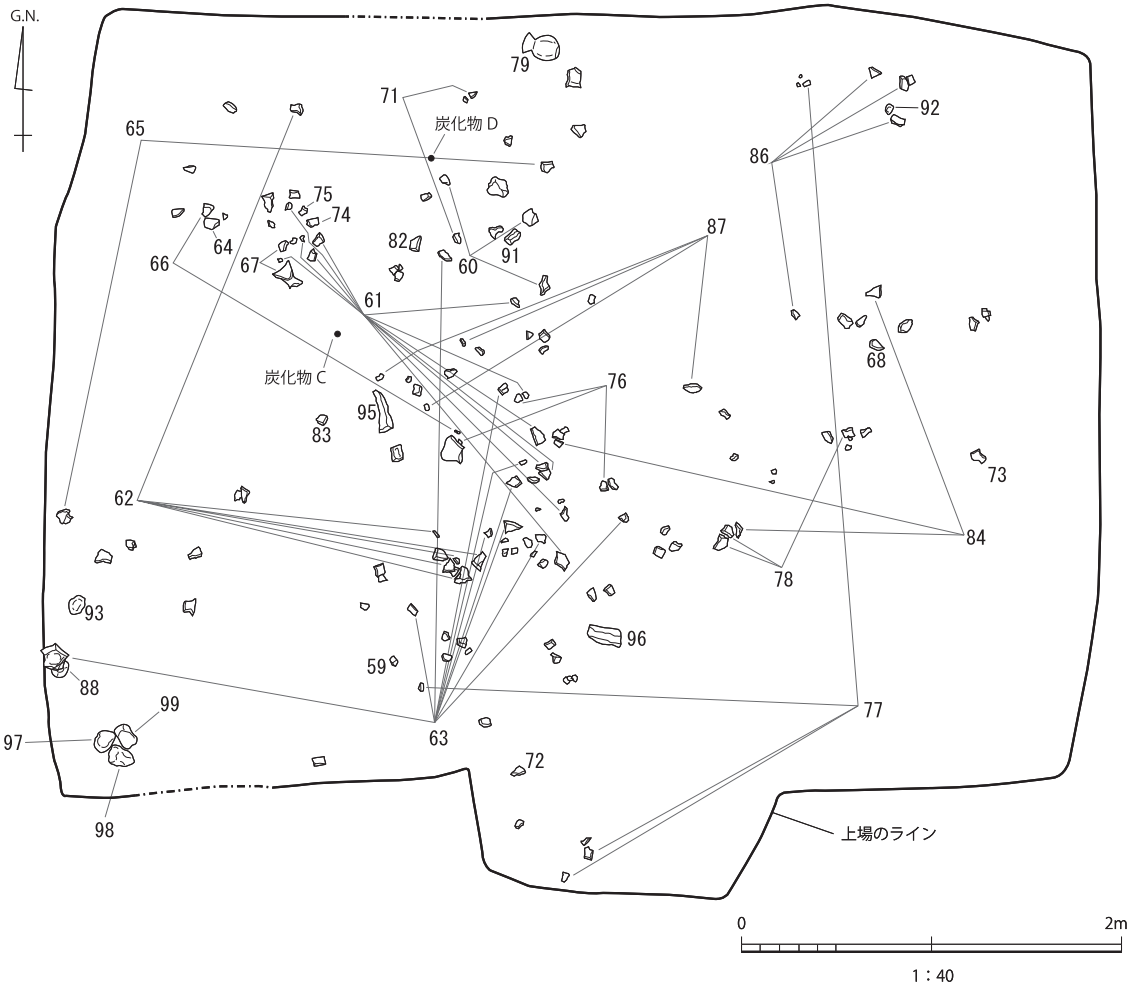


第23図 SA4平面・断面図

る。

遺物は主に1～6層に含まれ、特に貼床層である8層直上の5層に集中している。8～11層からは小破片を含めて遺物は出土していない。出土状況を見ると（第24図）、接合できた遺物は、近い位置のものもあったが、第24図に示す通り、多くは建物の床一面に広がっており、建物の廃絶時に遺物の多くが破碎され、破棄されたと推察される。南西隅の床面の浅い窪みからは、後述する97～99の石器が出土している。また、床面直上から出土した10cm程の炭化物2点の放射性炭素年代測定を行った（第IV章参照）。

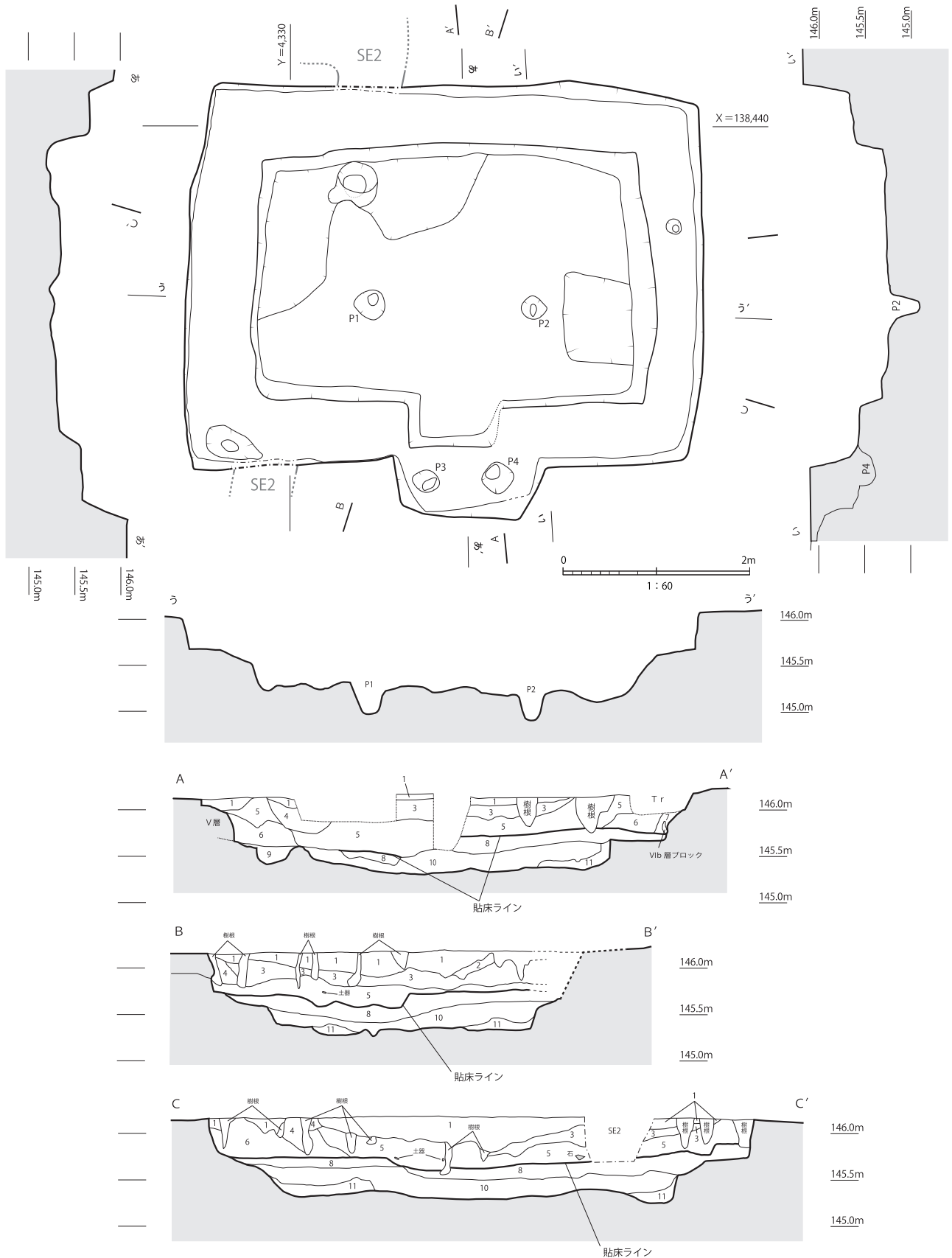
59～67は甕である。59は「く」の字に屈曲する口縁部で、外面はススに覆われる。内面は横方向の工具ナデが施されている。60～63は「く」の字に屈曲し、やや上方にのびる口縁部をもち、口唇部が最大径部位となる。62以外の口縁端部は面をもつ。60は外面に横方向の丁寧なナデ、内面に横方向のナデ、横・斜方向のハケが施されている。61は外面に縦・横・斜方向のハケ、内面に横・斜方向のハケが施されている。外面にススが広く付着する。62は外面にナデ、内面にハケが施されている。63の底部は上げ底で外方に広がり、付近に指頭痕が認められる。64～66は胴部で、64は頸部の屈曲部分より胴部が張る。



第24図 SA4土器出土状況図

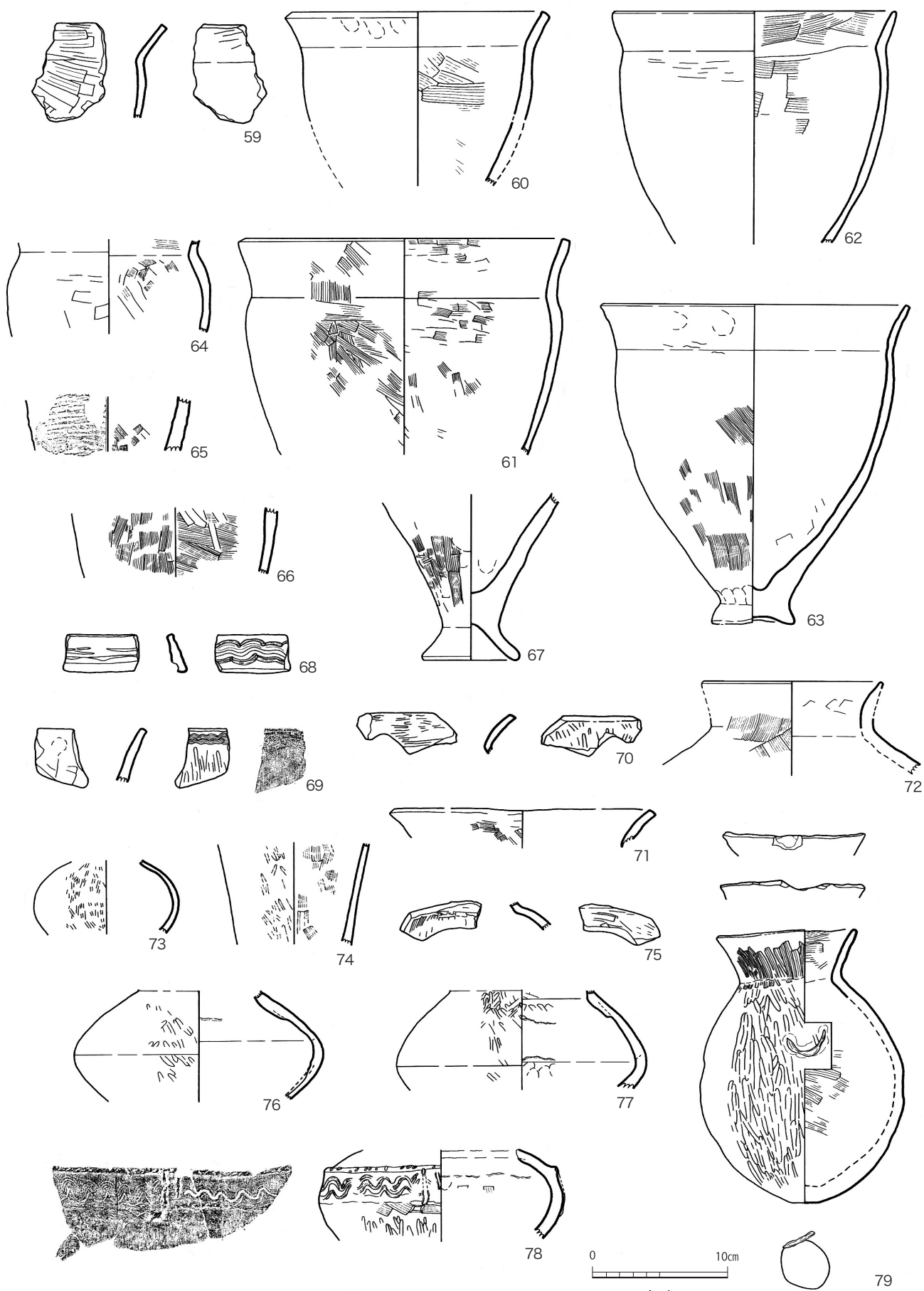
外面に工具ナデが施され、内面はハケが残る。65は外面に横方向の粗いタタキが認められる。193～195と同一個体の可能性がある。66は外面に斜方向のハケ、内面に斜方向のハケ後、一部に工具ナデが施されている。67は胴部と底部境に細いくびれをもつ。脚台状の底部は上げ底で外方に広がる。外面に縦方向のハケ後、丁寧な横方向のナデ、内面はナデが施されている。内面全体にススが附着する。68～79は壺形の土器と考えられる。68～72は口縁部である。68は複合口縁壺で、外面に櫛描波状文が施されている。粘土のつなぎ目で外れている。69は緩やかに外反し、口唇端部は面をなし、ナデが施されている。外面に櫛描波状文が施され、内面は丁寧な横方向の工具ナデで調整する。70～72は短く外反しながら立ち上がる口縁部である。70は内外面ともミガキが施されている。71は内外面をナデで仕上げている。72は内面が剥離している。外面に工具ナデが施されている口縁端部をやや丸くつくる。73は精製の小型丸底壺で、球形の胴部は薄く仕上げている。外面に縦方向のナデが施されている。74～77は長頸壺である。74は頸部、75は頸部付近で、ともに風化により調整は不明である。76・77は胴部中央が張り出すそばん玉形の胴部で、ともに外面はヘラミガキが施されている。78は瀬戸内系の長頸装飾壺の玉葱状を呈する胴部である。肩部に1条の刻目貼付突帯が巡り、その下部に櫛描波状文が施される。また、胴部中央に縦方向の突帯が2条施されており、突帯の左下に台形状の突起を設ける。刻目貼付突帯を境にし



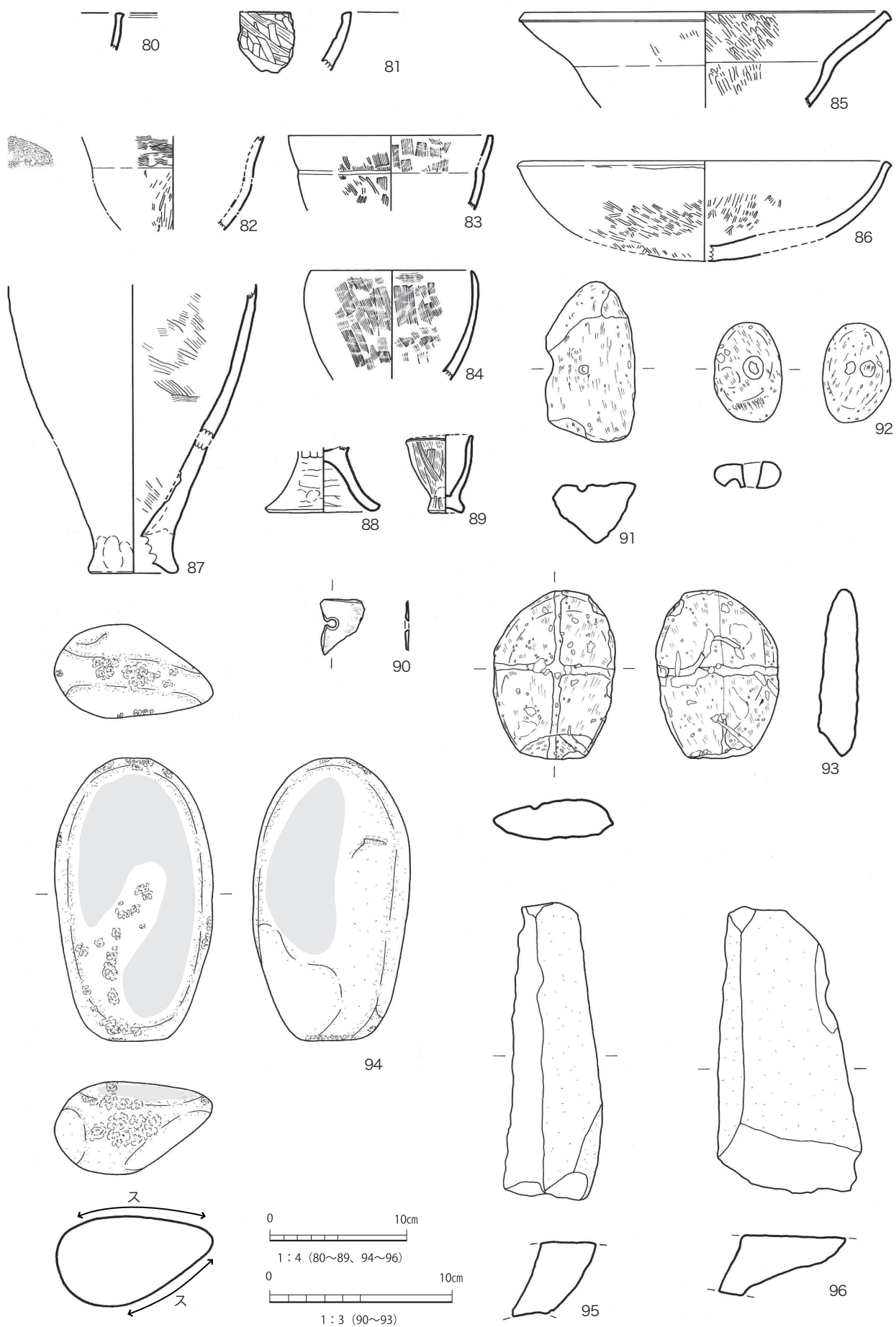


- |   |   |
|---|---|
| 1層：黒色土 しまりなし。粘性なし。シルト質。1～3mmのKr-Mをわずかに含む。 | 7層：暗褐色土 しまり強い。粘性なし。1～5mmのKr-Mを多量に含む。          |
| 2層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。1～2mmのKr-Mをわずかに含む。     | 8層：黒褐色土 しまりかなり強い。貼床か。1～5mmのKr-Mを多量に含む。        |
| 3層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。1～5mmのKr-Mを少量含む。       | 9層：黒色土 しまり強い。粘性なし。1～5mmのKr-Mを含む。ピット埋土。        |
| 4層：黒色土 しまりなし。粘性なし。1～3mmのKr-Mを含む。          | 10層：暗褐色土、にぶい黄褐色土 しまり弱い。粘性なし。V層とVI層を人工的に埋めている。 |
| 5層：黒褐色土 しまりやや強い。粘性なし。1～5mmのKr-Mを含む。       | 11層：黒色土 しまりなし。粘性なし。1～5mmのKr-Mを含む。             |
| 6層：黒褐色土 しまりやや強い。粘性なし。1～3mmのKr-Mを多量に含む。    |   |

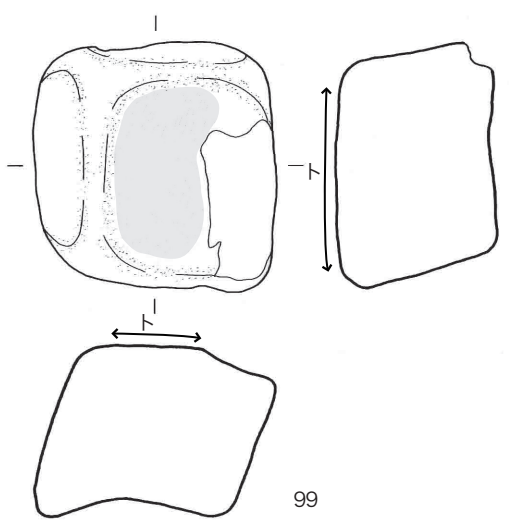
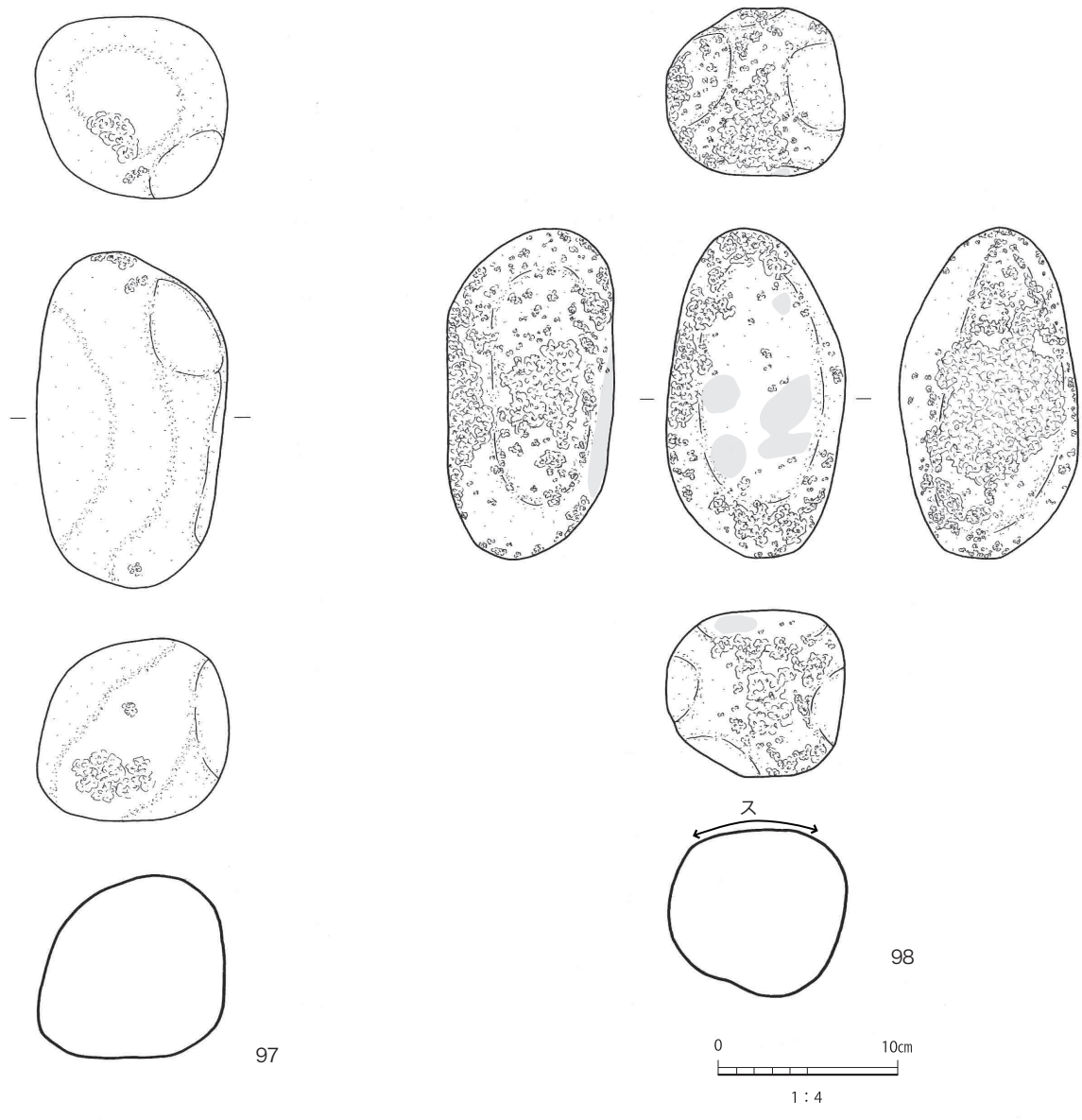
第25図 SA4 完掘平面・断面図



第26図 SA 4 出土遺物①



第27図 SA4 出土遺物②



第28図 S A 4 出土遺物③

て、胴部全体にススが付着している。79は完形の個体である。口縁部は「く」の字に屈曲する。口唇部において対角線上に外側からの打ち欠きが認められることから、吊り下げられていた可能性を考えておきたい。胴部は卵形で、「U」の字状の線刻が施されている。底部は小さな平底を呈し、広範囲に黒斑がみられる。外面に縦方向の丁寧なミガキが認められるが、口縁部まで及ばない。内面に横・斜方向のハケが施されている。80～88は鉢と考えられる。80・81は小形の塊形を呈する鉢の口縁部で、80はほぼまっすぐ立ち上がり、81の口唇部はやや内湾しており、内面は斜方向のハケ後、縦方向の工具ナデ痕が残る。82は胴部から緩やかに屈曲して口縁部に至るもので、口縁部に櫛描波状文が施されており、現状で2段が確認できる。83は外面の屈曲部分に、土器焼成後に施されたと思われる1条の筋が入る。84は緩やかに内湾してのびる塊状のもので、口唇部は鋭い。内外面にハケが残る。85は丸くつくる胴部から緩やかに屈曲しながら大きく外側に広がる口縁部をもつものである。口唇端部は面をなし、内外面ともにミガキが施されているが、外面は剥離が著しい。86は皿形の個体で、口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。内外面にミガキがかかる。87は砲弾形の胴部をもつもので、指押えにより整形された上げ底の底部が付く。88は鉢の脚台部である。上位に粘土のつなぎ目がみられ、スカート状に開き、緩やかに外反する。内外面に横方向の工具ナデが施されている。89は甕形のミニチュア土器である。外方に広がる底部をもち、上げ底をなす。外面にハケ、内面はナデで仕上げている。90は頁岩製の石包丁の破片である。91～93は軽石製品で、いずれも浮具と推定する。91は未貫の孔がみられ、紐を結んだ際に付いたと思われる摩擦痕も認められる。92は口径1.2cmを測る孔が貫通している。すぐ横には、未貫の孔もみられる。93は扁平に加工されており、その両面には、十字に結んだと思われる紐の摩擦痕が残る。94は磨敲石である。両面に縦方向の磨痕、上下部に敲打による潰れが認められる。95・96は安山岩の角礫片である。いずれも加工する際に割られた破片と推測するが、長さが揃うことから、五徳のように利用していた可能性もある。97～99は建物内の窪みからまとまって出土した砂岩製の石器である。97・98は敲石である。97は上下部に、98は表と左右面、上下部に敲打痕による潰れが認められる。99は砥石である。表面に磨痕がみられ、裏面は緩やかな窪みが認められる。

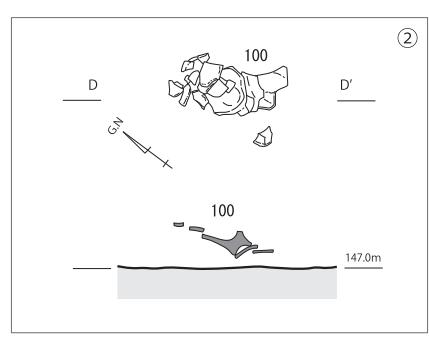
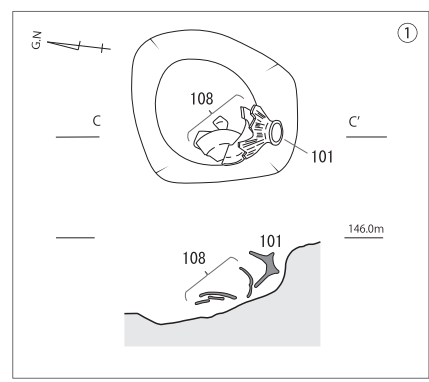
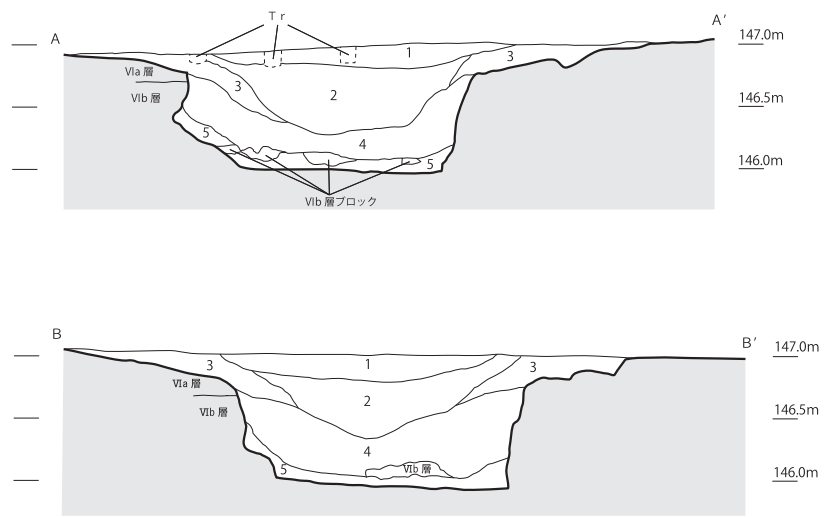
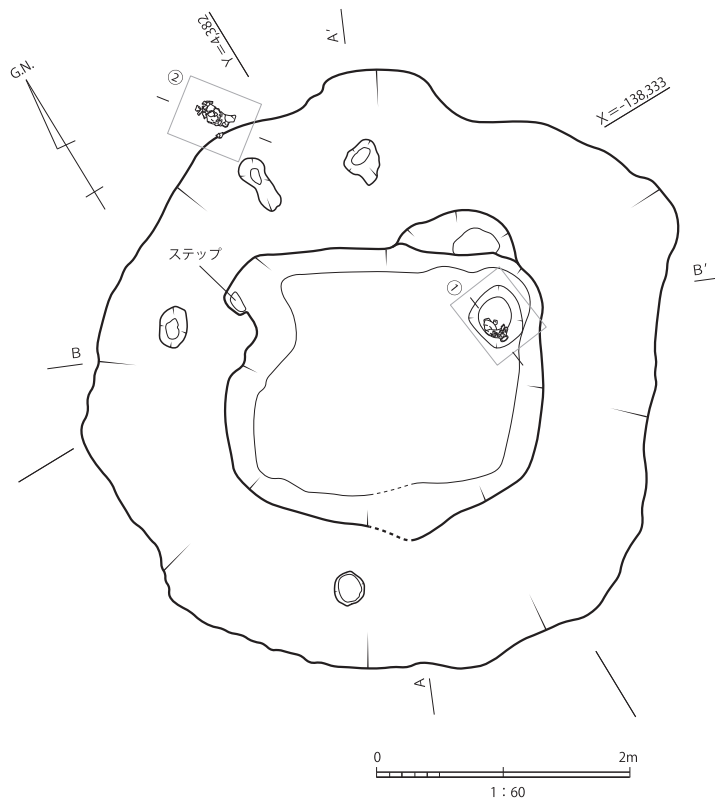
### (3) 土坑

#### 1号土坑 (SC1) (第29・30図)

9CグリッドのVIa層上面で、土器片を含む黒色土の広がりを検出した。SA3の東側7mに近接する。平面形は長軸4.6m、短軸4.4mの不整形を呈し、検出面からの深さは0.91～1.06mを測る。断面は方形の箱形を呈し、底面は平底を呈する。掘り込み面から肩部に向かって、約1.0～1.2mの長さで、緩やかに約0.3m深くなり、肩部から一気に深くなる。南辺の一部は袋状になっているが、これは地山のVIb層が崩落によるものと考えられる。北西隅の壁には、床面から約0.5mの高さに階段状のステップが施されている。この上面が硬化していることから、土坑の出入りの用途で設けられたことが考えられる。床面積は約3.5㎡である。

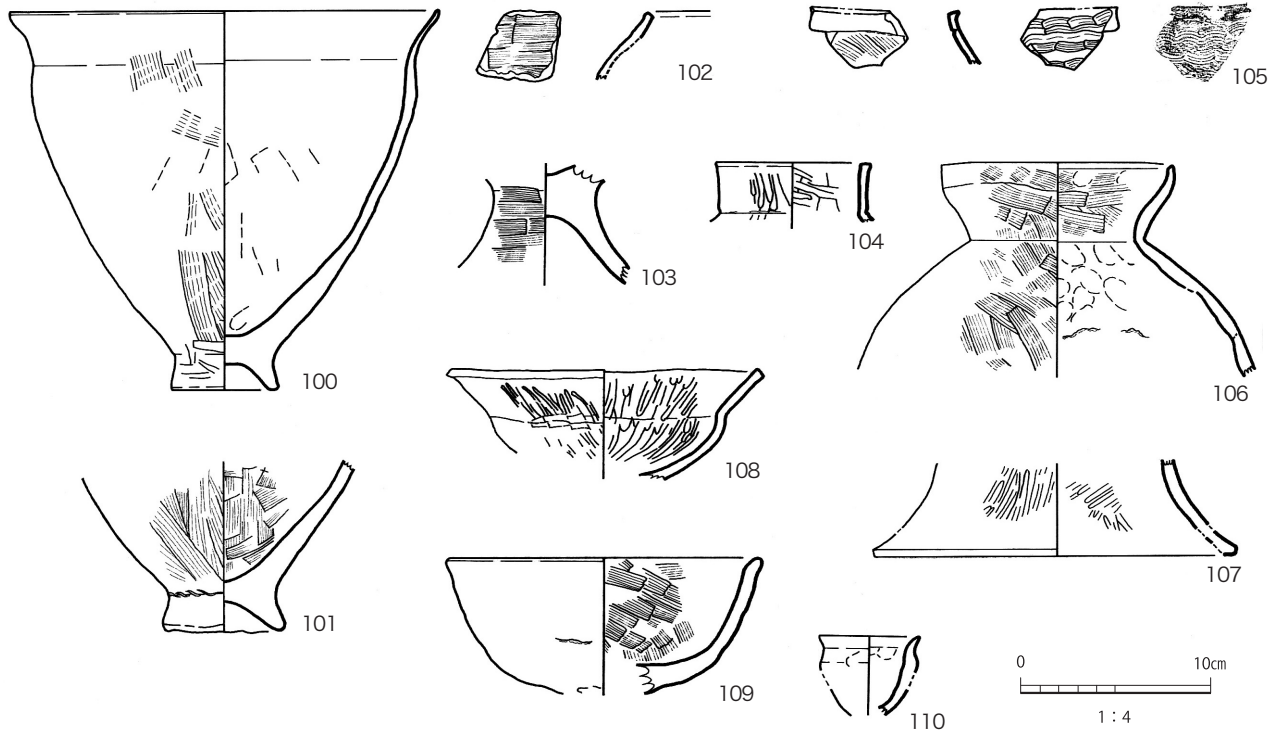
埋土は5層からなる。1～4層は、レンズ状堆積になっており自然堆積と考える。5層は固く硬化しており、人によって踏み固められた層と考えられる。

遺物は、土坑床面の東隅の径0.8m、深さ0.1m程の窪みから、伏せ置かれたほぼ完形の鉢と甕の底部が出土した。また、土坑の北肩部で、完形に近い甕が横倒しに出土している。その他、1～4層からも



- 1層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。5 mm以下程度のKr-Mを含む。
  - 2層：黒褐色土 しまり弱い。粘性なし。5 mm以下程度のKr-Mを多量に含む。
  - 3層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。5 mm以下程度のKr-Mを多量に含む。
  - 4層：黒褐色土 しまり強い。粘性なし。10 mm程度のKr-Mを多量に含む。
  - 5層：黒褐色土 しまり弱い。粘性なし。第Vib層に黒褐色土が混ざる。
- 中央付近にはKr-Mが多量に混じる。所々第Vib層ブロックが入る。

第29図 SC1平面・断面図

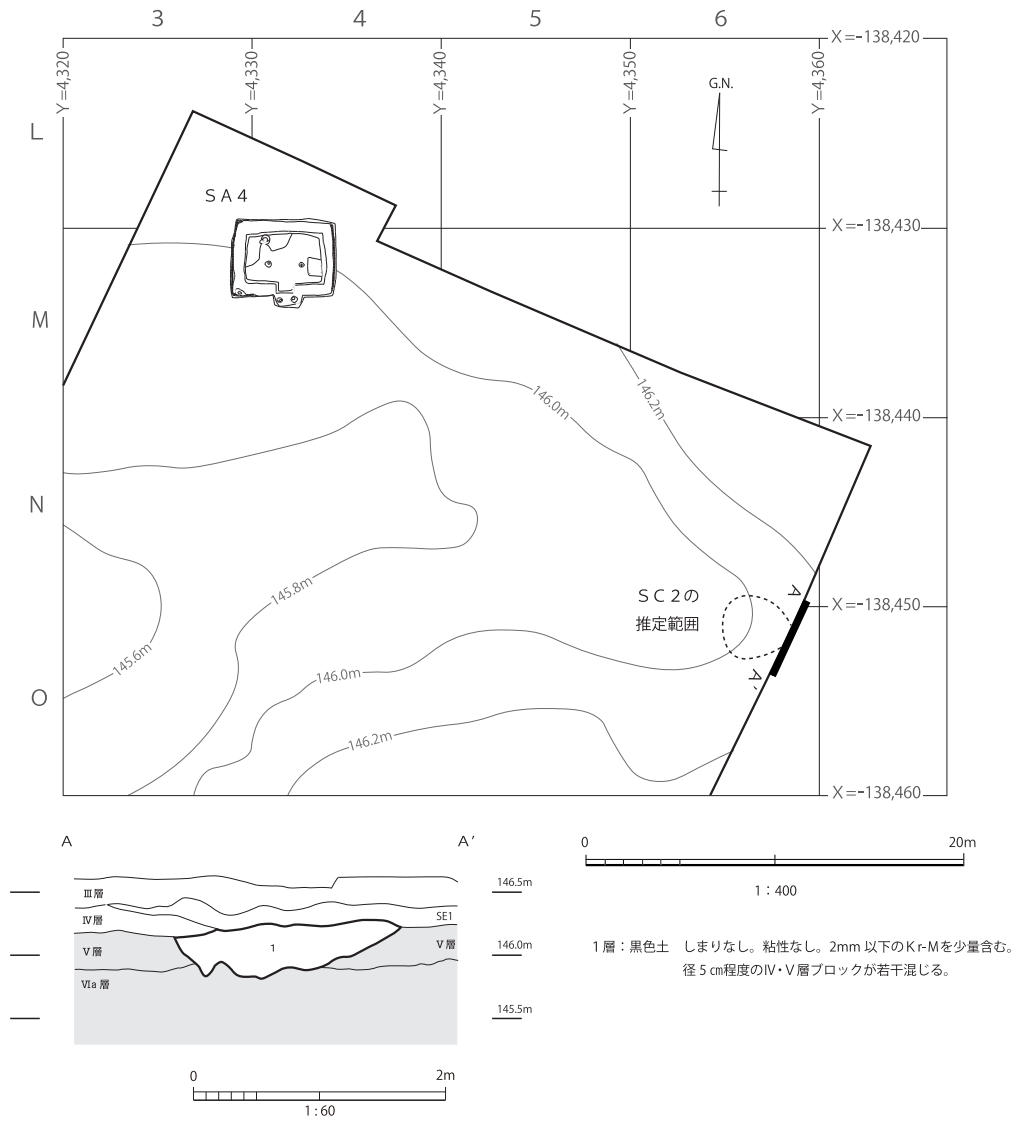


第30図 SC1 出土遺物

数点土器片が出土している。

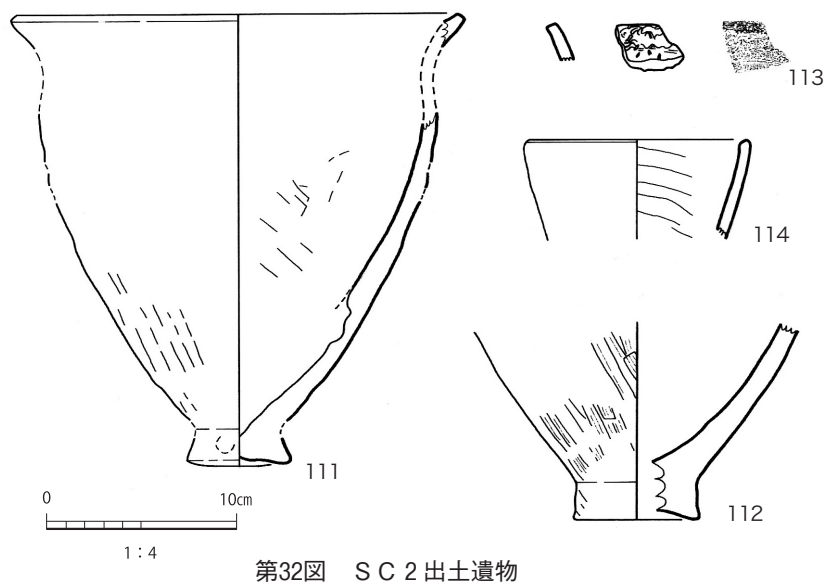
100～103は甕である。100はSC1の肩部近くから出土した。図上で完形に復元できるもので、胴部を外に開きながら、口縁部は緩やかに「く」の字に屈曲して短くつくり、口縁端部をやや上方につまみ上げる。底面は上げ底で、指ナデで調整される。口縁部から胴部にススが附着している。101も100と同様のものであるが、内面のハケ調整がよく残る。また、外面の底部と胴部の境目に調整の際に出た粘土が溜まる。102は内湾しながら立ち上がる口縁部である。103は底部で、スカート状に開き、底面は上げ底を呈する。102・103は内外面ともハケで調整されている。104～106は壺である。104は精製の小型直口壺の口縁部で、短く立ち上がる。内外面を丁寧なミガキで調整する。先述したSA3出土の51と同一の可能性が高い。105は内湾する複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描波状文が施されている。106はやや丸みをもつ胴部から頸部で、頸部で「く」の字に屈曲してのびる口縁部を有し、立ち上がりながら口唇端部は鋭くつくる。内外面をハケで調整する。107は高坏か器台と考えられる脚部で、スカート状に開く。脚端部の底面に面をもつ。内外面にハケが施されている。108～109は鉢である。108は浅い碗状の胴部から外へのびる口縁部をもち、端部は面をつくる。内外面に丁寧なミガキを施す。109は碗形を呈し、口唇端部は外方へ折り曲げるようにつくるが、粗雑に仕上げる。内面に斜方向のハケを施し、外面の調整はナデで仕上げるが、接合痕が残る。110はミニチュア土器である。甕形状をとるものか。

なお、床面直上の土をサンプリングして種実等の抽出作業を行ったが、種実等は確認されなかった(第IV章参照)。しかし、SA3と近接する大型の土坑で、階段状の施設や床に硬化面をもつことから、人の出入りが頻繁に行われていた貯蔵穴の可能性を考えておきたい。



### 2号土坑（SC2）（第31・32図）

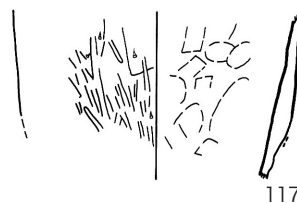
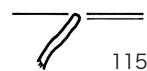
60グリッドのIV層掘削中に弥生土器が集中する範囲を確認した。平面においてはプランや掘り込み等は検出できなかったが、近接する調査区の西側壁の断面において、幅約2.0m、深さ最大約0.5mの落ち込みを確認した。このため、本来は土坑として検出すべきものを、平面的にはその底面に集積する土器群だけを検出したと考える。集中する





土器の範囲と西側断面の規模から、推定される土坑の範囲は径4.0m程度と考える。西側断面で確認できる埋土はIV層に相当するが、IV層と比べてK r - Mの量が若干多く粘性もある。

遺物は破片が多く、器種は甕、壺、鉢で構成される。111・112は甕である。111は図上復元により図化した。口縁部は緩やかに外反し、短くつくる。端部は面をなす。底部はやや上げ底を呈しており、外面に指頭痕が残る。112は底面からまっすぐ立ち上がる底部をもち、上げ底につくる。111・112とも内外面に工具ナデが施されており、特に112は丁寧な調整がみられる。113は内傾する複合口縁壺の口縁部で、かすかに櫛描波状文が残る。114は鉢と考える。胴部から口縁部にかけて緩やかに広がりながら立ち上がる。端部に面をもつ。外面に丁寧なナデ、外面に工具ナデがみられる。



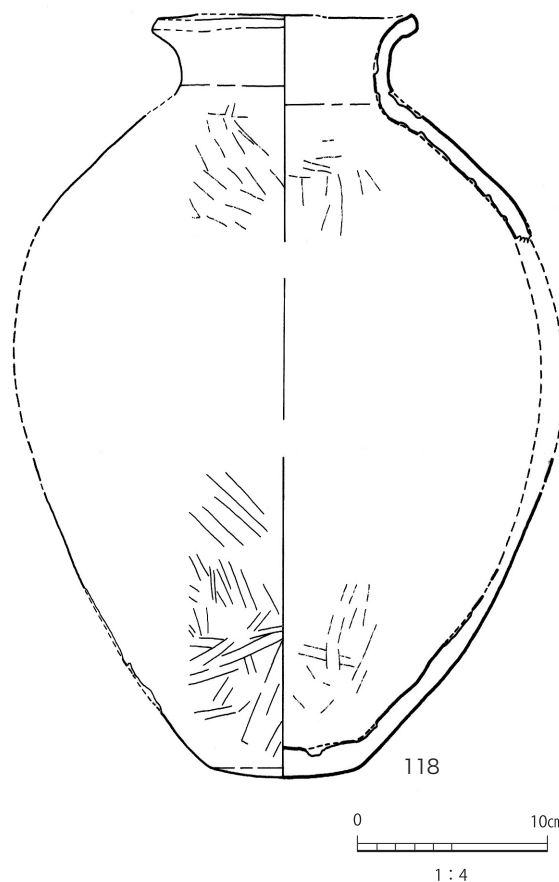
#### (4) 周溝状遺構

##### 1号周溝状遺構 (S L 1) (第33・34図)

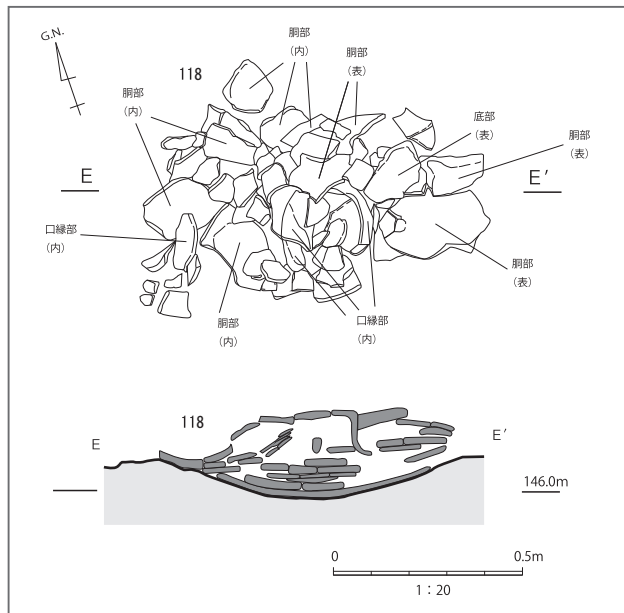
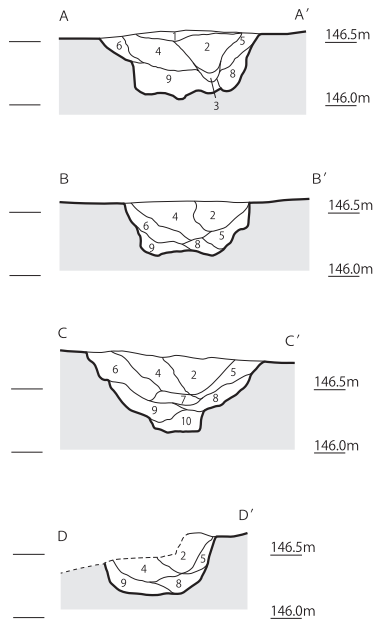
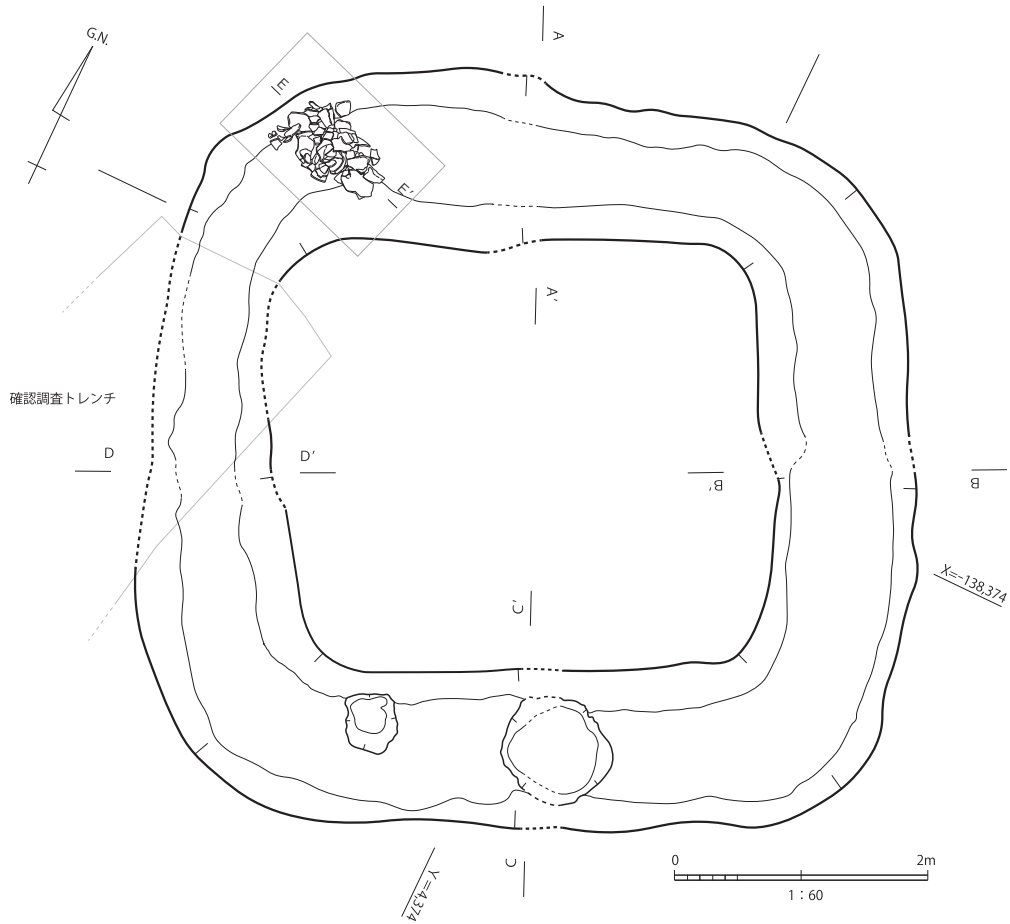
8 Gグリッドで検出した周溝状遺構である。VI a層上面で、環状に巡る黒色土の広がりを確認した。文化財課の確認調査のトレンチで一部壊されている。近接するS A 1の構築層がV a層上面であることから推測すると、S L 1の本来の遺構構築面もV a層であることが考えられる。検出時の平面形は、谷地形のため南側から北側にかけて0.3m程度低くなっていた。

S L 1の規模は、平面形が一辺約5.8mの隅丸方形を呈し、周溝は幅約1.2mで、検出面からの深さは約0.8~1.2mを測る。断面は、立ち上がりに差があるが概ね椀状になっている。埋土は10層に分層できる。断面を見るとレンズ状堆積になっているため、自然堆積による埋没であると考えられる。

遺物は全体としては少ないが、周溝北西隅の底面に壺1点が押しつぶされたような状態で出土した。しかしながら、口縁部と底部が横並びにあり、表裏面が不揃いあったことから、据え置かれた壺が土圧で押しつぶされたものではなく、人為的に割ったものをまとめて重ね置いたと考えられる。なお、横市川対岸の平田遺跡



第33図 S L 1 出土遺物



- |         |                                  |         |                                   |
|---------|----------------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1層：黒色土  | しまりなし。粘性なし。5mm以下程度のKr-Mをわずかに含む。  | 6層：黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下程度のKr-Mをごくわずかに含む。 |
| 2層：黒色土  | しまりなし。粘性弱い。10mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。 | 7層：褐灰色土 | しまり強い。粘性強い。15mm以下のKr-Mを含む。        |
| 3層：黒色土  | しまり弱い。粘性なし。10mm以下のKr-Mをわずかに含む。   | 8層：黒褐色土 | しまり強い。粘性なし。10mm以下のKr-Mを少量含む。      |
| 4層：褐灰色土 | しまりやや強い。粘性弱い。10mm以下のKr-Mをわずかに含む。 | 9層：黒褐色土 | しまり強い。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。        |
| 5層：黒褐色土 | しまり弱い。粘性弱い。10mm以下のKr-Mをわずかに含む。   | 10層：褐色土 | しまり強い。粘性なし。Vlb層に黒色土が少量混ざる。        |

第34図 S L 1 平面・断面図及び土器出土状況詳細図

では、周溝状遺構の埋土中から炭化米が検出されていることから、本遺構の土層観察用ベルト4か所の埋土を上層、中層、下層に分けて炭化物をサンプリングし、種実等の抽出作業を行ったが、検出には至らなかった(詳細は、第IV章参照)。また、遺構の性格を知るためにも周溝の内側の平坦面を精査したが、墓壙や柱穴となる小穴等は確認できなかった。

出土遺物は先述の据え置かれた壺**118**以外の多くは小破片が周溝埋土中から出土した。**115**は甕の口縁部である。端部に面をつくり、内外面に丁寧な横方向のナデを施す。**116**～**118**は壺である。**116**は直口壺の口縁部と考える。外面に横方向の丁寧なミガキ、内面に斜方向の工具ナデの後、丁寧なミガキが施されている。**117**は長頸壺の頸部と考えられ、外面に斜方向の強い工具ナデの後、斜方向のミガキ、内面に斜方向の工具ナデが施されている。**118**はまとまって出土した破片を接合したものであるが、小破片が多く完全には復元できなかった。直立する頸部から外反する口縁部をもつ。しっかりとつくる口縁端部は面をなす。最大径部位を胴部中位付近にもつと考えられる。平底の底部の全体に黒斑がみられる。内外面に横方向のナデ、横・斜方向の工具ナデがみられ、外面はミガキで仕上げている。全体的に内外表面の剥離が著しく、剥片の数も多いことから故意による破壊が考えられる。

#### (5) 第2次調査区南東部遺構群 (第35図)

弥生時代中期に帰属する遺構について、わずかながらではあるが第2次調査区の南東部にまとまって検出できたことから、一括してここで報告する。

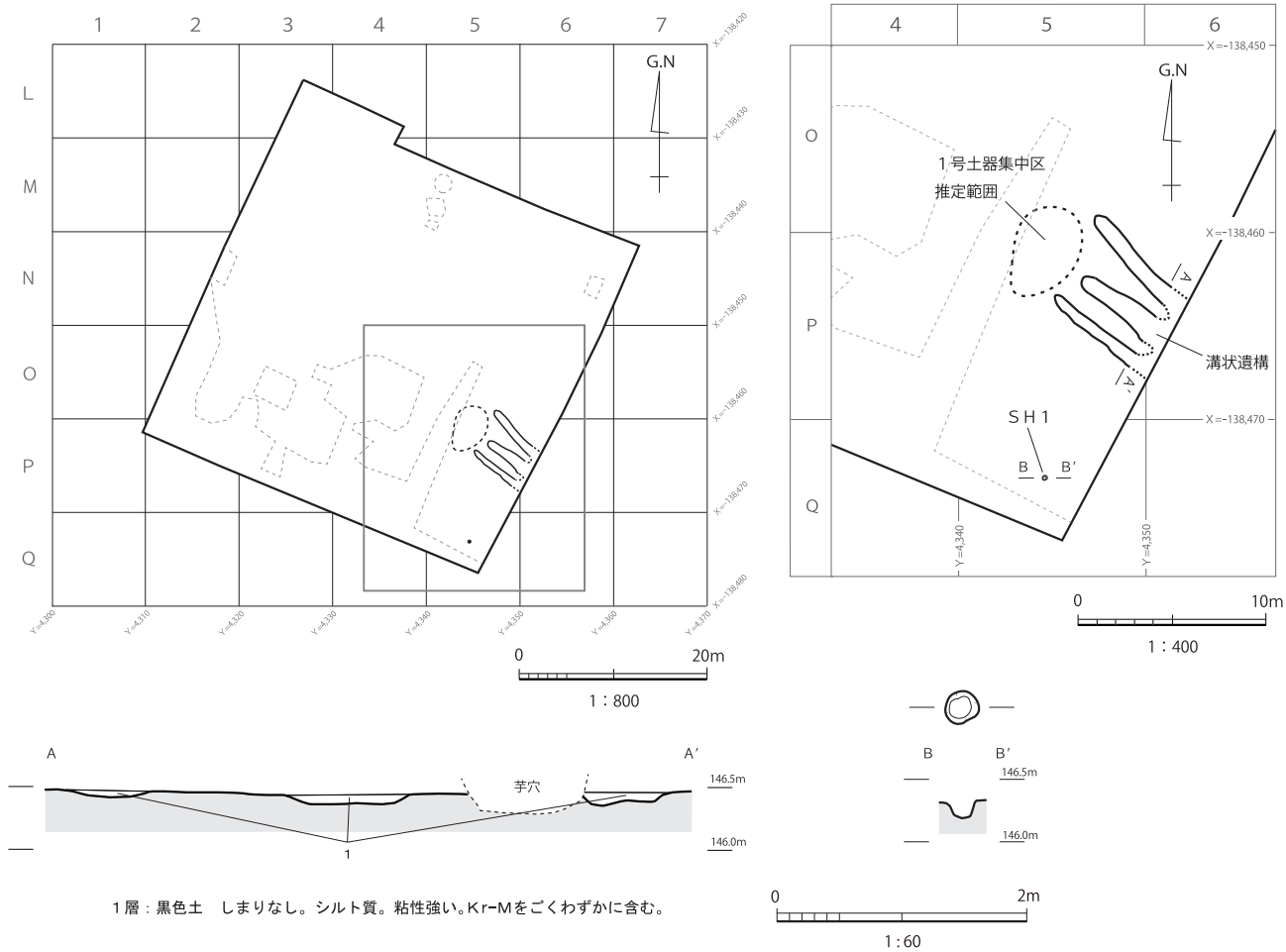
##### 1号土器集中区 (第35・36図)

5PグリッドにおいてVb層掘削中に弥生土器が集中しはじめたことから、遺構の可能性を考慮しながら調査を行ったが、平面及び断面観察用に入れたサブトレンチにおいて掘り込み等確認できなかった。しかし、本遺跡では出土数の少ない弥生時代中期にあたる土器群の集中がこの一面だけであったため、1号土器集中区とした。出土した土器群は、西側の一部に攪乱が入るが、長軸5.2m、短軸約3.6mの範囲に集中する。細片が多く集中していたことから、簡易的に掘られた廃棄土坑の可能性も考えておきたい。

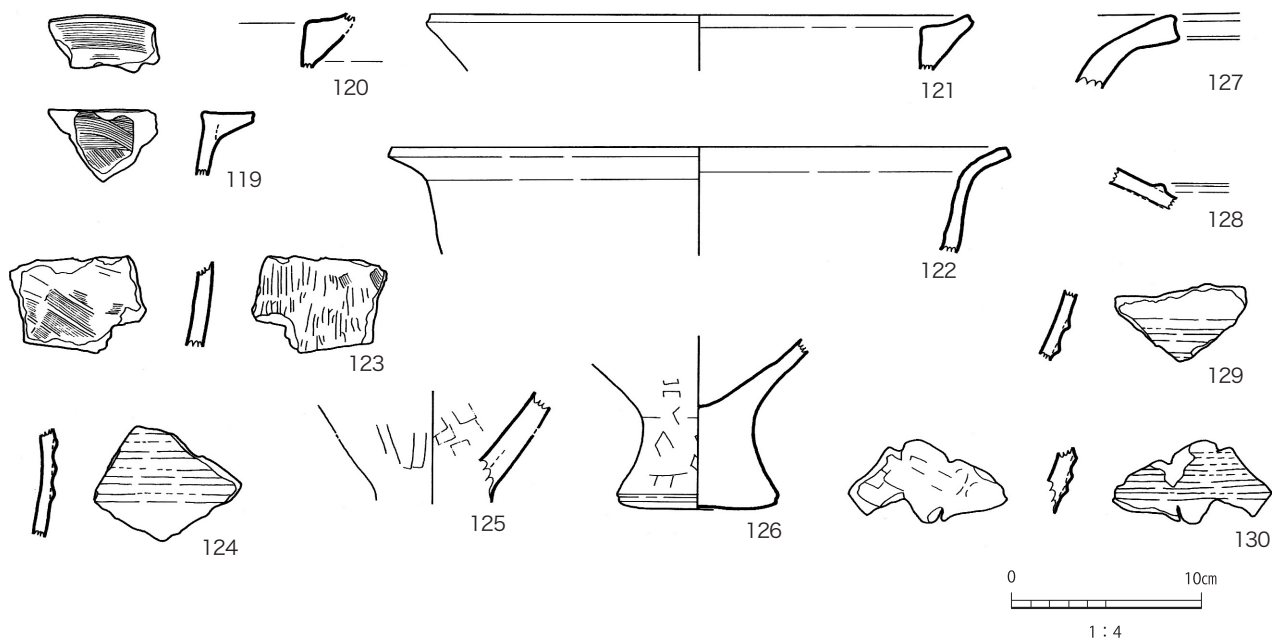
土器片が約120点出土したが、細片が多く平面図化はしなかったが、土器の出土範囲のみを示している。器種は甕と壺で構成される。

ここでは弥生時代中期に属するもののうち**119**～**130**を図化した。

**119**～**126**は甕である。**119**～**121**は逆「L」字形を呈する口縁部で、**119**はほぼ水平にのび、**120**・**121**はやや斜め上方へのびる。**119**と**121**の口縁端部は凹線状となる。**119**の内外面にハケ、**120**と**121**の内外面はナデで調整されている。**122**は緩やかに屈曲してつくる口縁部をもち、端部は面をなす。**123**～**125**は胴部である。**123**・**124**は胴部中央付近と考えられ、**124**には3条の突帯が巡る。**123**の内外面にハケ、**124**にナデが施されている。**125**は底部近くで、底部に向かって外方に屈曲していくとみられる。外面に工具ナデが薄く残る。**126**は中実の脚台状の底部である。平底で、台形状につくる脚台の端部には凹線状となる。外面に斜方向のナデが施されている。内面はススが広く付着している。**127**～**130**は壺と考えられる。**127**は広口壺の口縁部である。朝顔形に大きく開き、端部は凹線状となる。**128**～**130**は胴部である。**128**は肩部にあたり、1条の突帯、**128**・**129**は胴部中央から下位付近と考えられ、**129**には2条、**130**には3条の突帯が確認できる。**128**と**130**の外面に横方向のナデが認められる。



第35図 南東部遺構群平面・断面図



第36図 1号土器集中区出土遺物

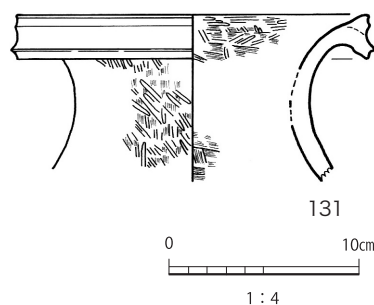
## 溝状遺構（第35図）

5 P～6 P グリッドのV a層で、調査区東側から1号土器集中区に向かって終息する3条の溝状遺構を検出した。東側は調査区外へ延びる。3条の溝状遺構はほぼ平行しており、それぞれの検出長は約5.6～6.8m、幅0.4～1.2mである。溝状遺構の間隔は約0.8m、深さは最大で約0.08mと浅い。また、調査区東側壁面からは、3条の溝状遺構の明確な掘込面が確認できず、幅約6mに渡って緩やかに下がるIV層相当埋土をもつ窪みを確認しただけである。このことから、3条の溝は、東側壁面付近から1条の溝に収束していくと推察される。

溝状遺構からは遺物は出土していない。

## 1号小穴（SH1）（第35・37図）

5 QグリッドV b層下面に遺物を伴う小穴を1基検出した。検出面での径は約0.28m、深さは0.13mを測る。底面が硬化しており、柱痕の可能性を考えておきたいが、周辺を精査したが、付随する小穴は検出できなかった。この周辺はV b層近くまで削平を受けているため、本来の遺構構築面はさらに上位層であったと推察する。SH1から出土した遺物は、壺1点のみである。



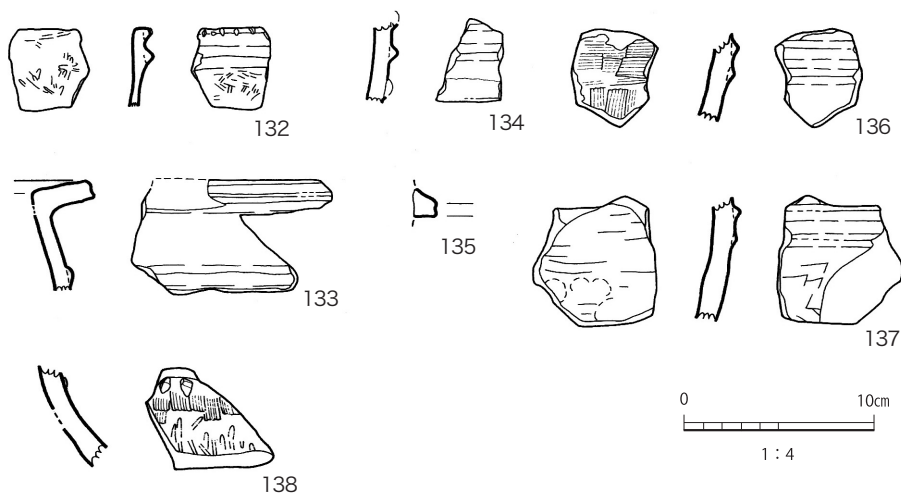
第37図 SH1出土遺物

131は山ノ口式系の壺の口縁部である。外方を向く口唇端部は二叉状になり、凹線状となる2条の突帯が巡る。断面に上位の突帯を取り付けたつなぎ目が認められる。内面にハケ、外面と口縁部の内面に丁寧なミガキが施されている。

## （6）遺構に伴わない遺物

### 第1・2次調査区出土の弥生時代中期の土器（第38図）

132はほぼまっすぐに立ち上がり、口唇部に2条の突帯が巡る。上位の突帯には、浅い刻目が縦に入る。突帯の間に炭化物が付着する。内外面に工具ナデとミガキが施されている。133～135は山ノ口式系の土器と考えられる。133は逆「L」の字形を呈する口縁部で、やや斜め上方へ短くのび、



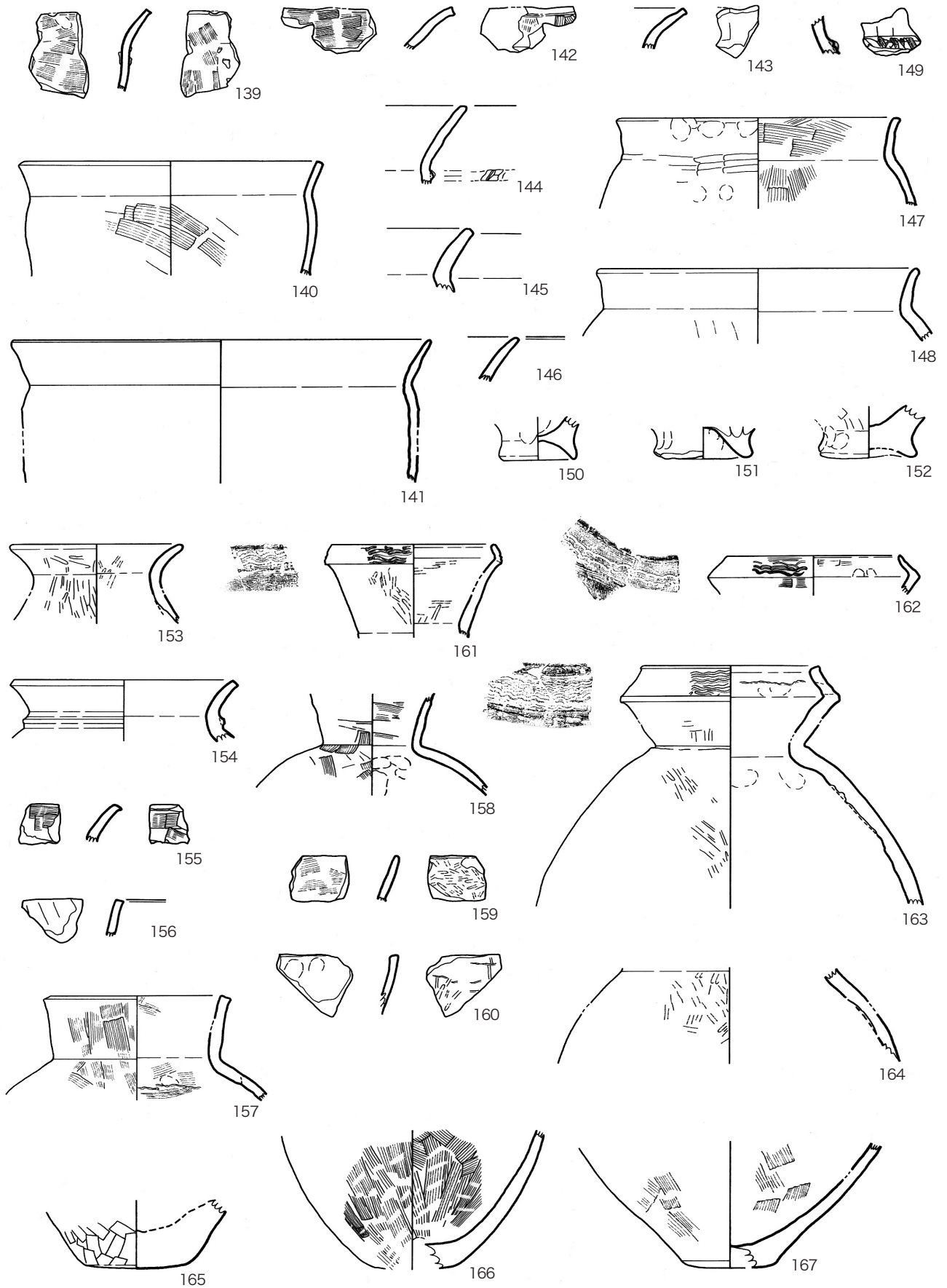
第38図 第1・2次調査区出土の弥生時代中期の遺物

口唇端部は凹線状となる。下位には1条の突帯が確認できる。134は胴部で、2条の突帯があり、下位にも突帯の剥離痕が認められる。135は台形状の突帯である。端部は凹線となる。外面にナデが施されているが、下面より上面の方が丁寧な調整である。136・137は2条の突帯が確認できる胴部で、136は外

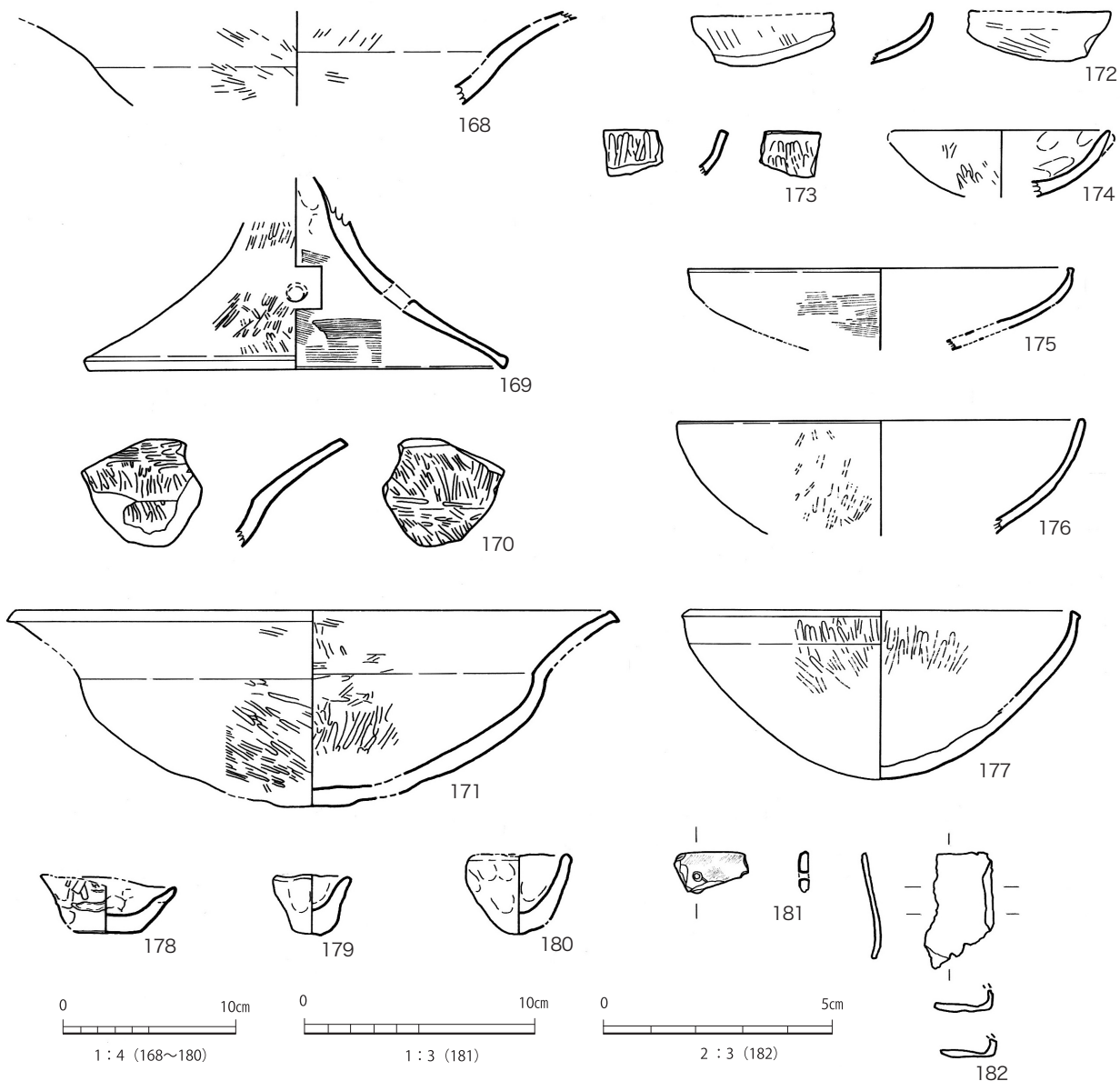
面に工具ナデ、内面にハケ、137は内外面に工具ナデ調整がみられる。138は頸部に向かって緩やかに反りながらのびるもので、頸部付近に「く」の字状の浮文が認められる。外面にハケ、ミガキが施されている。

#### 第1次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物（第39・40図）

139～152は甕である。139～141、144～146は緩やかに屈曲しながら外傾し、142・143は朝顔状に広がる。147・148は緩やかに外反しながら、短く立ち上がる。調整は、139・142は内外面にハケが施されている。140は内外面に横方向のナデとハケ、143・145・146は内外面に横方向のナデ、147は外面に斜方向のナデと頸部に工具ナデ、内面に縦・横方向のハケ、148は外面に工具ナデの調整が施されている。139の内外面には調整時に伴って余った粘土塊が付着している。144と149の頸部には、刻目を施した1条の突帯が貼り付く。150～152は底部である。底面は全て上げ底を呈するが、150・151は深い。脚部の端部は指押えが残る。153～167は壺である。153～162は口縁部で、163は口縁部から胴部である。153～155は胴部から緩やかに「く」の字形に屈曲し、外反しながら短く立ち上がる口縁部をもつ。なお、154の頸部には、1条の突帯が巡る。156～159は緩やかに外傾しながら直立する口縁部をもち、157・158は胴部から明確に「く」の字形に屈曲する。154～157の口縁端部は面をなす。160は緩やかに内湾しながら立ち上がる。161～163は複合口縁壺である。口縁部外面に櫛描波状文が施されている。153は内外面にミガキ、155・162は内外面にハケ、156は内外面にナデ、157は外面に縦・斜方向のハケとミガキ、内面にハケ、158は外面に横方向のナデ、縦・斜方向のハケ、内面に横方向のハケ、159は外面に横・斜方向のミガキ、内面に斜方向のハケ、160は斜方のミガキ、161は内外面に横方向のナデ、163は外面にハケ後ミガキ、内面にナデの調整が施されている。164は球形を呈する胴部の上位部である。外面にミガキを施す。165～167は平底になる底部である。165は外面にナデ、166は内外面にハケがみられる。168は高坏としたが、鉢の可能性もある。坏部から口縁部は緩やかに屈曲し、外反しながら大きく開く。内外面に横・斜方向のミガキが施される。169は高坏の脚部で、裾部は緩やかにスカート状に開く。円形の透かし孔を有し、裾端部は面をなす。外面に斜方向のミガキ、内面に横方向のハケが施されている。170～177は鉢である。170・171は浅い碗状の胴部から緩やかに外反しながら朝顔状に大きく開く。171には円盤状の底部が付く。ともに内外面に丁寧なミガキがみられる。172～177は口縁部が緩やかに内湾する碗状のものである。172と175は、口縁部に向かって薄くなりながら、口縁端部付近で立ち上がる形状である。173と177の口縁端部は面をなす。177は丸底を呈する。172は内面に横方向のナデ、縦方向のミガキ、173は内外面に縦方向のミガキ、174は内面に横方向のナデ、175は外面に横方向のハケ、176は外面に斜方向のミガキ、内面にナデ、177は内外面に縦・斜方向のミガキの調整が施されている。178～180はミニチュア土器である。178は底面をもつ鉢形で、179・180は碗形である。いずれも指頭の跡が明瞭に残る。181は頁岩製の石包丁の破片である。両側から穿孔された約4mmの孔が1か所だけ残る。裏面は剥離で失われている。182は最大長2.5cm、厚み2.0cmを測る鉄片である。一辺が内に曲がる。



第39図 第1次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物①

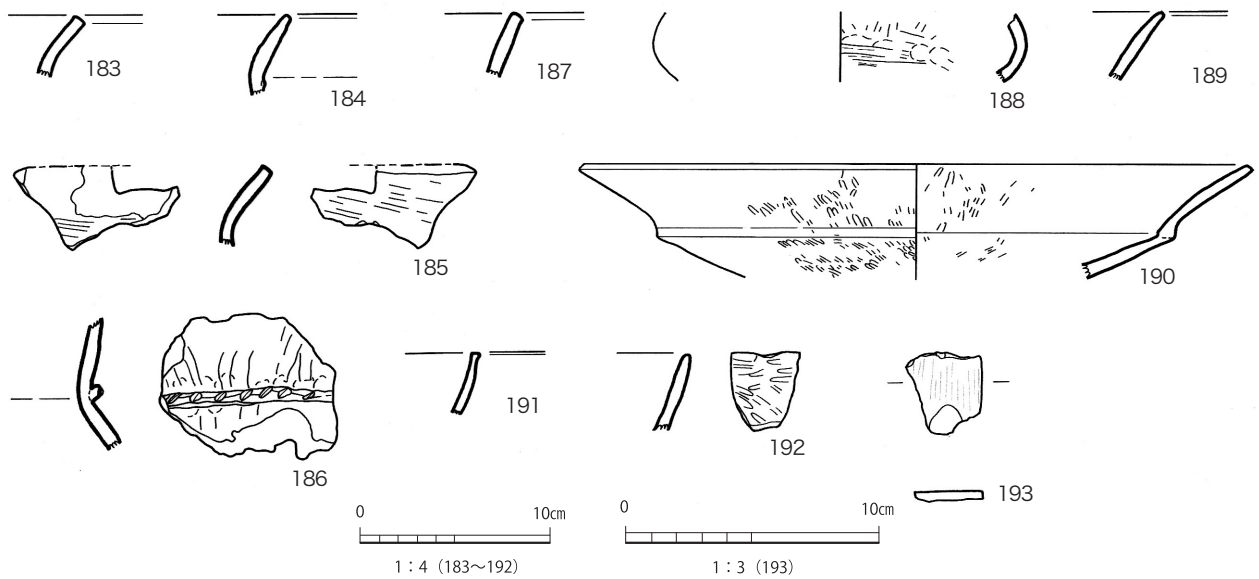


第40図 第1次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物②

第2次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物 (第41図)

183～186は甕である。183～185は緩やかに外反する口縁部で、端部は面をなす。185は外面にススが付着する。184は短く立ち上がり、端部は丸くつく。口縁端部付近にススが付着する。頸部に突帯の痕跡が残る。185は内外面に工具ナデが施されている。186は1条の刻目突帯が巡る頸部付近である。内外面に工具ナデ調整がみられる。187・188は壺である。187は緩やかに外傾し、口縁端部は面をなす。188は小型の壺で、胴部が丸く張り出す。外面に丁寧なナデ、内面にハケと工具ナデが施されている。191・192は鉢の口縁部である。緩やかに内湾し、口縁端部は、191は面をなし、192は尖る。風化が著しいが、191の内外面にナデ、192の外面に横・斜方向のミガキ、内面に横方向のナデ調整が認められる。189・190は高坏である。189は外傾する口縁部で、190は坏部から屈曲部で稜をつくり、口縁部が長く発達するものである。内外面にミガキが施されている。193は頁岩製の砥石の破片である。縦方向の砥痕が認められる。



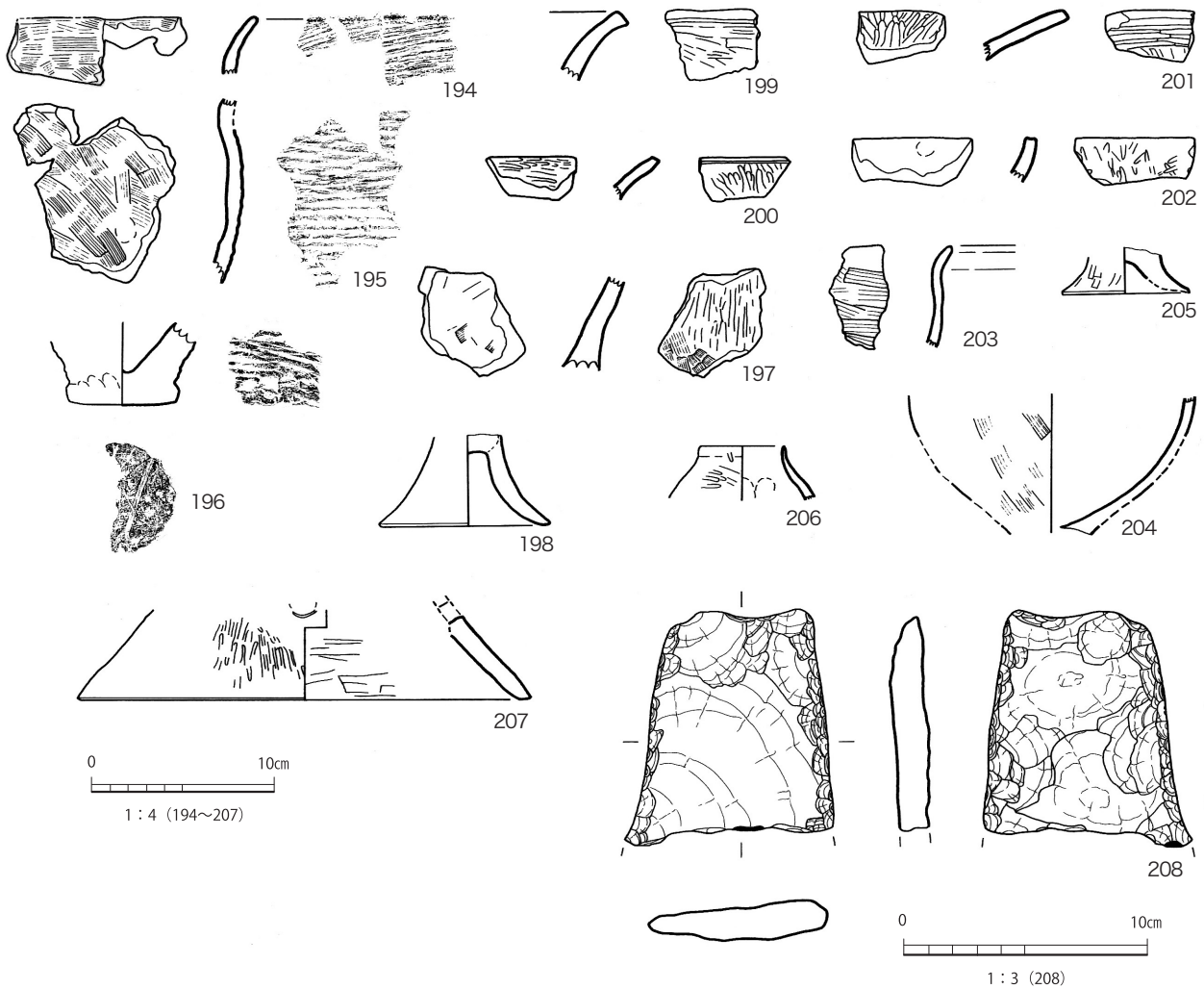


第41図 第2次調査区出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物

#### S E 1 出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物 (第42図)

次節で報告する古代の溝S E 1は、弥生～古墳時代の包含層以下を深く掘削することで構築されたことから、廃絶後の埋土中に多数の同時代の遺物を包含していた。細片が多かったが、S A 4と隣接することから関係が深いとも考えられるため、ここでは特徴的な遺物を抽出して報告する。

194～198は甕である。194～196は、胎土や調整の特徴から同一個体と考える。口縁部は緩やかに外反しながら短く立ち上がる。胴部は緩やかに膨らむ。底部は平底を呈し、指押えにより整形されている。外面に斜方向の強いタタキが施され、内面はハケで仕上げる。197は底部に近い胴部で、上位に向かって緩やかに膨らむ。外面にミガキとハケ、内面にハケの後、丁寧なナデが施されている。198は中空の脚部である。上部には胴部との粘土のつなぎ目が認められる。スカート状に開きながら、緩やかに外反し、端部は鋭く仕上げる。内外面にナデが施されている。199～200は壺である。199は緩やかに外反しながら大きく開く口縁部で、口唇端部は面をなす。200は外傾する口縁部で、端部に面をつくる。199は内外面に工具ナデ、200は内外面に丁寧なミガキが施されている。201～204は鉢である。201・202は口唇部の端部が面をなす口縁部で、201は緩やかに外反しながら、朝顔形に大きく開く。202は碗形で内湾しながら立ち上がる。203はやや丸みを帯びる胴部から緩やかに屈曲し、短く外傾する口縁部をもつ。204は碗形の胴部で、下部に脚台状の底部が取り付くと考えられ、粘土のつなぎ目が認められる。205は中空の脚台部で、外反しながらスカート状に開く。底面は上げ底を呈する。201は外面に丁寧な工具ナデ、内面にミガキ、202は内外面に横方向のナデの後、斜方向のミガキ、203は内外面に口縁部付近はナデ、頸部～胴部は斜・横方向のハケ、204は外面にハケ、内面にナデ、205は内外面にナデ調整が施されている。206は壺形のミニチュア土器である。207は器台の裾部である。スカート状に開き、裾端部はやや鋭く仕上げる。透かし孔が認められる。外面に縦方向のミガキ、内面に横方向の工具ナデ調整がみられる。208は石製土堀り具の基部と考える。石材は安山岩である。比較的大きな整形剥離の後に、側縁が入念に敲打され、扁平形に仕上げる。刃部は欠損している。裏面は黒化しており、被熱の痕跡と思われる。



第42図 SE 1 出土の弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物

## 第4節 古代の遺構と遺物

### (1) 遺構の分布 (第44図)

古代の遺構面は、第Ⅲ層除去後のⅣ層において、第2次調査区でのみ検出ができた。調査区北側において、断面形を逆台形状にする深い溝状遺構1条が、東西方向に一直線に掘削されている。古代に属する遺物は、溝状遺構を含めて調査区全体的に見ても多くないが、第2次調査区北側に集中する傾向にある。

### (2) 溝状遺構

#### 1号溝状遺構 (SE 1) (第43～46図)

3M～60グリッドのⅣ層上面で検出した。掘り直しが認められることから、正確な規模を知ることは難しいが、断面形状から鑑みて、当初掘削された規模と大差はないと思われる。東西の延長は調査区外に至り、検出長40.0m以上、幅約2.8mを測る。北西-南東方向にほぼ一直線に延びる溝である。北

西側より以西は、緩やかに北方向に向かう様子が見て取れる。

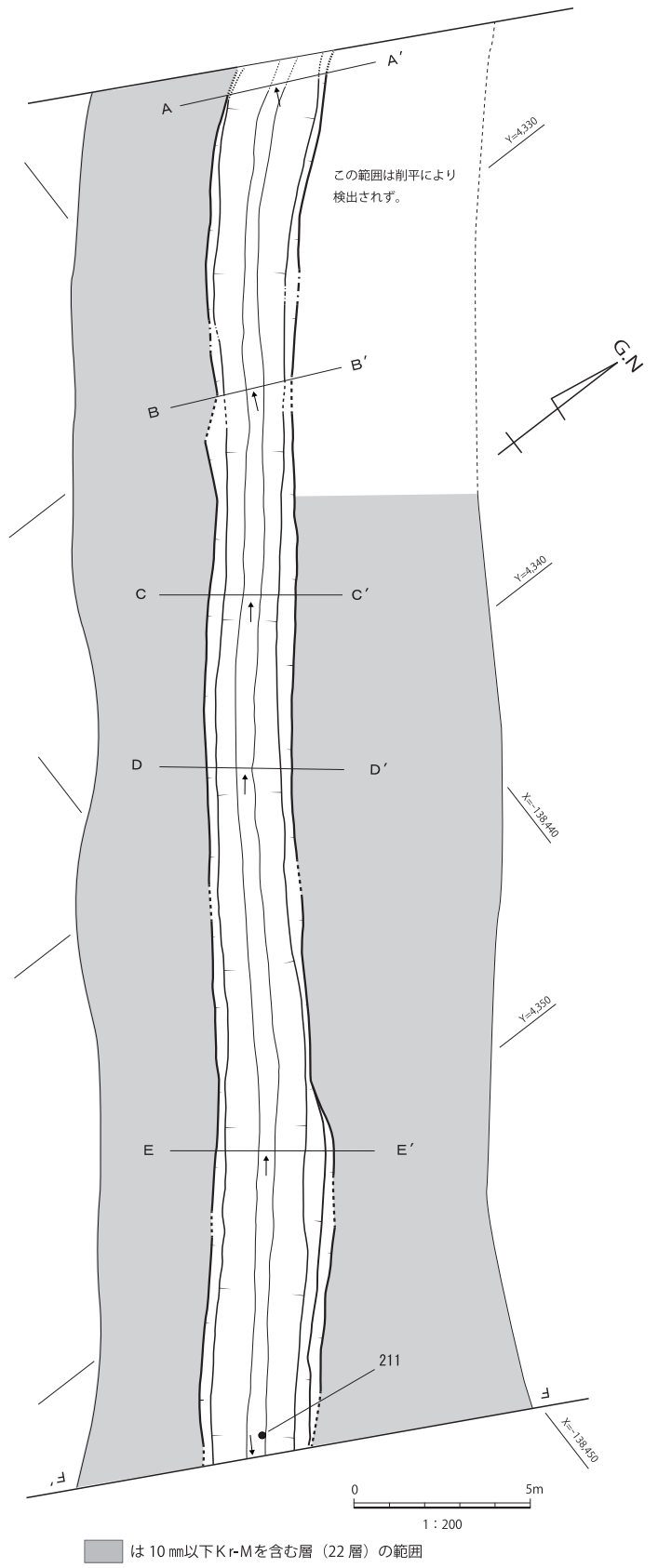
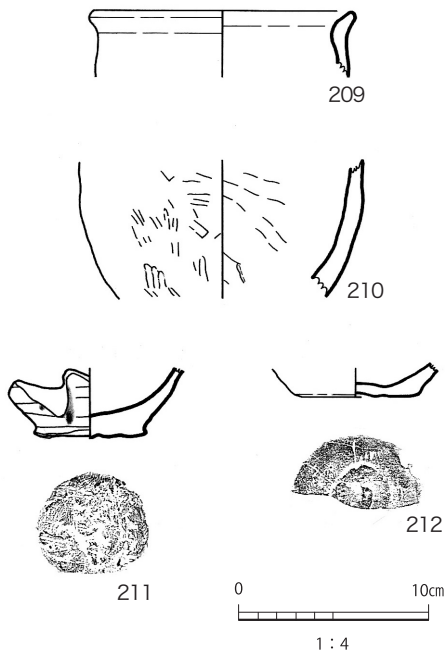
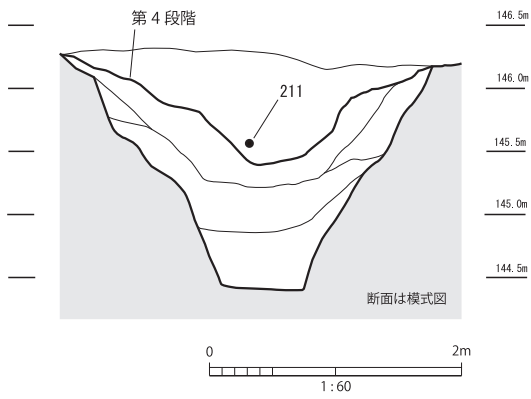
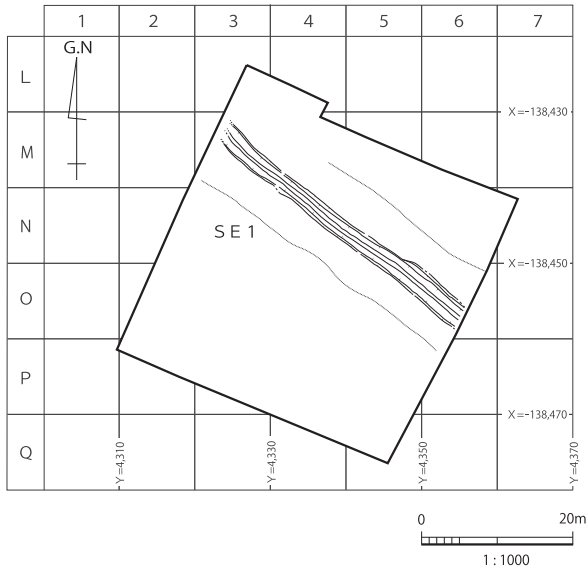
溝の両肩から外側には、径1cm程度の霧島御池降下軽石を含む黒色土層（22層）が帯状に延びている状況を確認した。径の大きい霧島御池降下軽石はVIb層下～中位に由来し、溝の上～中位付近の地層に対応することから、溝の掘削の当初段階で両側に置かれた土の残存と考えられる。また、溝の深さや断面形状から、SE1は防衛の目的があったとも考えられ、後述する大きな塊で構成される埋土の状況から、その一環として両側に土塁が設けられた可能性も考えておきたい。ただし、検出できた22層の層厚は0.06～0.2mと薄かったが、幅については溝の肩部から約3.0～5.6mで、南側よりも北側の方が最大で約1.5m広い所もあった。22層が残る明確な断面は、F-F'でのみ確認できたことから、これを含むように断面観察用のトレンチを設定した。

SE1は、桜島文明降下軽石層に当たるIII層下のIV層上面から掘り込まれており、溝の深さは約1.6～2.0mを測り、断面形状は全体として逆台形状を呈している。溝の南東側の北肩部から約0.4m下には、幅約0.5m、長さ約3mに渡って、テラス状の段が造られている。これは溝の掘削や溝さらいの際の足場としたものではないかと推察される。また、断面観察から、各断面において複数回の掘り直しが見て取れる。最初の掘り込みを第1段階として、最新を第5段階とした。以下で各段階について記載する。

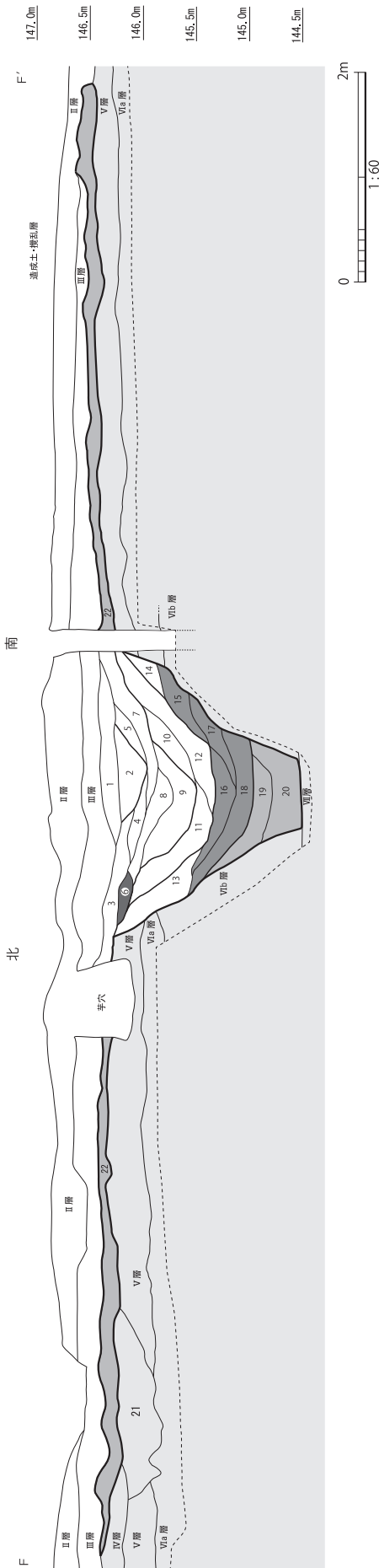
第1段階は、断面形状は逆台形を呈し、底面幅は南東側で最大約0.65mを測る。埋土はVIb層による自然崩落で、上位層の黒色系土の混じりがないため、溝が掘られて間もなく崩落したと考えられる。また、崩落を繰り返した際のVIb層の筋が数本認められる。遺物は含まれない。

第2段階は、深さ約1.2～1.7mを測り、第1段階の埋土を一部掘削して形成されている。溝の中心は第1段階とほぼ同じで、A-A'付近ではV字形の断面形状であったが、その他はほぼ逆台形状を呈している。埋土には霧島御池降下軽石が多量に含まれる。VIb層と上層の黒色系粘質土が混在していることから、VIb層の崩落に加えて土塁の崩落土が流入したと考えておきたい。全体としてしまりは強いが、霧島御池降下軽石層の割合が多い所はしまりがなく、水分も含まれている。底面に径1cmを超える霧島御池降下軽石が堆積している。

第3～5段階は、各断面の形状が異なり深さも浅くことから、掘り直しではなく、溝さらいの段階と推測される。中心は不揃いではあるが、全体的に南側に寄っている。断面形状は緩やかなV字形を呈し、北側の立ち上がりが南側と比べて緩やかである。検出面からの深さは、第3段階が約0.9～1.2m、第4段階が0.7～1.1m、第5段階が0.4～0.7mである。埋土は黒色系粘質土で、細かく分層ができる。北側からの流入が目立っており、特に霧島御池降下軽石の割合が高く、しまりのある層は北側からの流入が顕著に見て取れる。



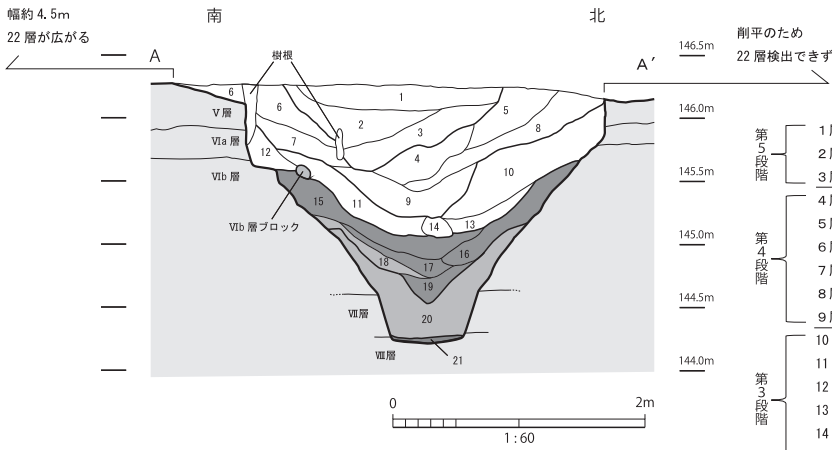
第43図 SE 1 平面・模式図及び出土遺物



- |          |   |   |
|----------|---|---|
| 第5<br>堆積 | 1層：黒色土<br>2層：黒色土<br>3層：黒色土<br>4層：黒色土<br>5層：黒色土<br>6層：黒褐色土<br>7層：黒色土<br>8層：黒色土<br>9層：黒色土 | しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。<br>しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。<br>しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。<br>しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。<br>しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。<br>しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。★<br>しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。<br>しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mをわずかに含む。<br>しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを少量含む。 |
| 第4<br>堆積 | 10層：黒色土<br>11層：黒色土<br>12層：黒色土<br>13層：黒色土<br>14層：黒色土                                     | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。<br>しまり弱い。粘性なし。7mm以下のKr-Mを含む。<br>しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。<br>しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。<br>しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mをわずかに含む。   |
| 第3<br>堆積 | 15層：黒褐色土<br>16層：黒褐色土<br>17層：暗褐色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量に含む。<br>しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量に含む。<br>しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量に含む。<br>Vib層由来の砂質Kr-Mが多量に混じる。   |
| 第2<br>堆積 | 18層：黒褐色土<br>19層：黒褐色土<br>20層：褐色土   | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量に含む。<br>黒色土が混在するVib層の流込堆積層。<br>しまりなし。粘性なし。Vib層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。●●   |
| 第1<br>堆積 | 21層：黒色土<br>22層：黒色土  | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。(SC2)<br>しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。●●●●●●  |
- 土層か？

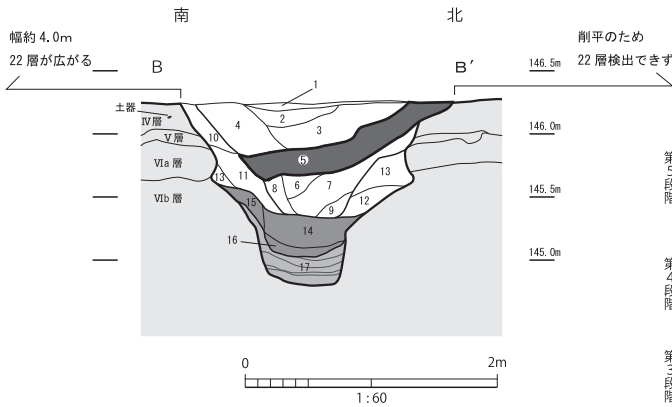
★●●●●各断面において共通する層

第44図 SE 1 断面図①及び概念図



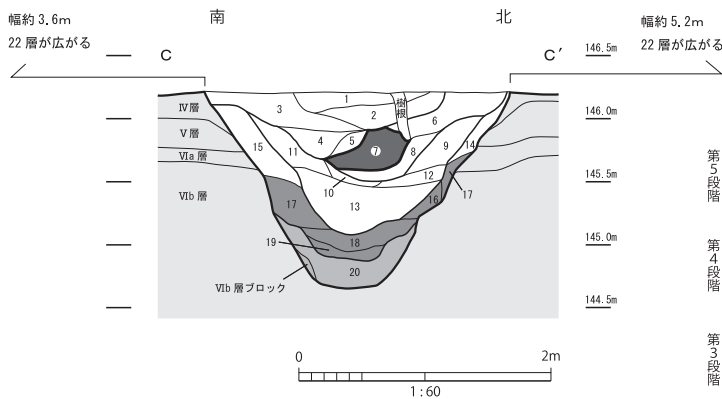
削平のため  
22層検出できず

- |      |           |   |
|------|-----------|---|
| 第5段階 | 1層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 2層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 3層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。                     |
|      | 4層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを含む。                     |
| 第4段階 | 5層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。                     |
|      | 6層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 7層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 8層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。5層より少ない。             |
|      | 9層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
| 第3段階 | 10層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを含む。                     |
|      | 11層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 12層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
|      | 13層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。                   |
| 第2段階 | 14層: 黒色土  | しまりなし。シルト質。粘性弱い。1mm以下のKr-Mをわずかに含み、ブロック状に堆積する。 |
|      | 15層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。                  |
| 第1段階 | 16層: 暗褐色土 | しまりなし。粘性なし。黒色土が混在するVIb層の流込堆積層。                |
|      | 17層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。15層より多い。          |
|      | 18層: 褐色土  | しまりなし。粘性なし。黒色土が混在するVIb層の流込堆積層。                |
| 第1段階 | 19層: 暗褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。                  |
|      | 20層: 褐色土  | しまりなし。粘性なし。VIb層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。●●●           |
|      | 21層: 暗褐色土 | VIb層崩落堆積層。                                    |
|      | 22層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壘か?.....◎          |



削平のため  
22層検出できず

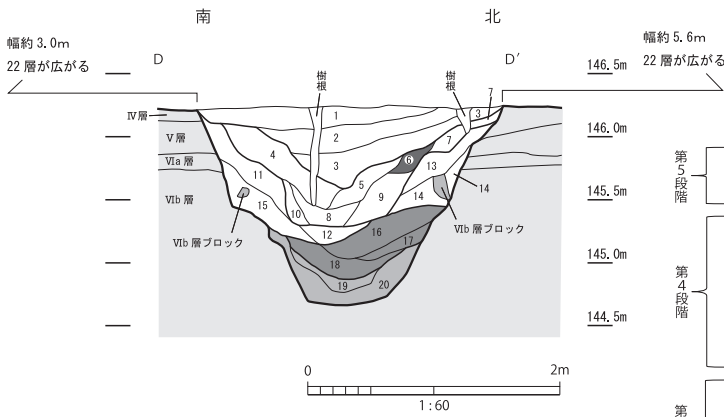
- |      |           |  |
|------|-----------|--|
| 第5段階 | 1層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
|      | 2層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
|      | 3層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。                              |
|      | 4層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを含む。                                |
|      | 5層: 黒褐色土  | しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。●★                              |
| 第4段階 | 6層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
|      | 7層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。                              |
|      | 8層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。7層より多い。                       |
|      | 9層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
| 第3段階 | 10層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
|      | 11層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。                            |
|      | 12層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。                              |
|      | 13層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。                          |
| 第2段階 | 14層: 黒褐色土 | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。                             |
|      | 15層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを含む。所々にしまりのないVIb層ブロック(径5~10cm)が混じる。 |
| 第1段階 | 16層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。                             |
|      | 17層: 褐色土  | しまりなし。粘性なし。VIb層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。●●●                      |
|      | 22層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壘か?.....◎                     |



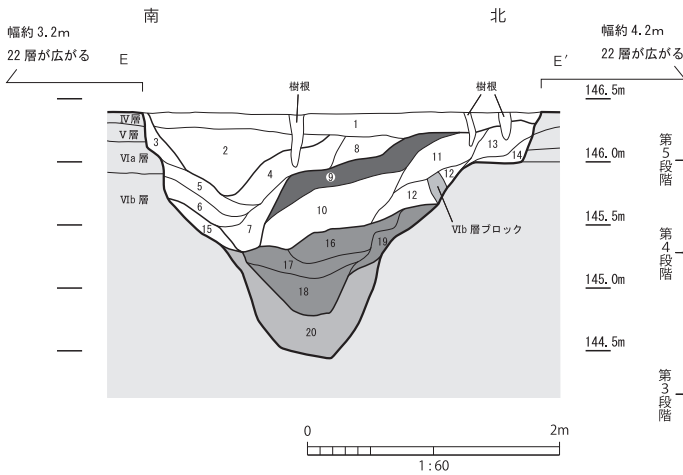
削平のため  
22層が広がる

- |      |           |                                      |
|------|-----------|--------------------------------------|
| 第5段階 | 1層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。        |
|      | 2層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。          |
|      | 3層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。        |
|      | 4層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。        |
|      | 5層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。          |
| 第4段階 | 6層: 黒色土   | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。          |
|      | 7層: 黒褐色土  | しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。●★          |
|      | 8層: 黒色土   | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを含む。            |
| 第3段階 | 9層: 黒色土   | しまりなし。シルト質。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。   |
|      | 10層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。      |
|      | 11層: 黒色土  | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。          |
|      | 12層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。          |
| 第2段階 | 13層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。        |
|      | 14層: 黒色土  | しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。            |
|      | 15層: 黒色土  | しまりなし。シルト質。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。 |
|      | 16層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを含む。            |
|      | 17層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを含む。            |
| 第1段階 | 18層: 黒褐色土 | しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mを含む。            |
|      | 19層: 黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。         |
|      | 20層: 褐色土  | しまりなし。粘性なし。VIb層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。●●●  |
|      | 22層: 黒色土  | しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壘か?.....◎ |

第45図 SE1断面図②



第5段階	1層：黒色土	しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	2層：黒色土	しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。
	3層：黒色土	しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
第4段階	4層：黒色土	しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	5層：黒色土	しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。4層より多い。
	6層：黒褐色土	しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。…★
	7層：黒色土	しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	8層：黒色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。
第3段階	9層：黒色土	しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。
	10層：黒色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。5mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。
	11層：黒色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
第2段階	12層：黒色土	しまり弱い。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	13層：黒色土	しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。
	14層：黒色土	しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。
第1段階	15層：黒褐色土	しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	16層：黒褐色土	しまり強い。粘性なし。2mm以下のKr-Mを含む。
第1段階	17層：黒褐色土	しまり強い。粘性なし。2mm以下のKr-Mを多量に含む。
	18層：黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを多量に含む。
	19層：暗褐色土	しまりなし。粘性なし。黒色土が混在するVib層の流込堆積層。
	20層：褐色土	しまりなし。粘性なし。Vib層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。…●
	21層：褐色土	しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壁か？……◎
	22層：黒色土	しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壁か？……◎

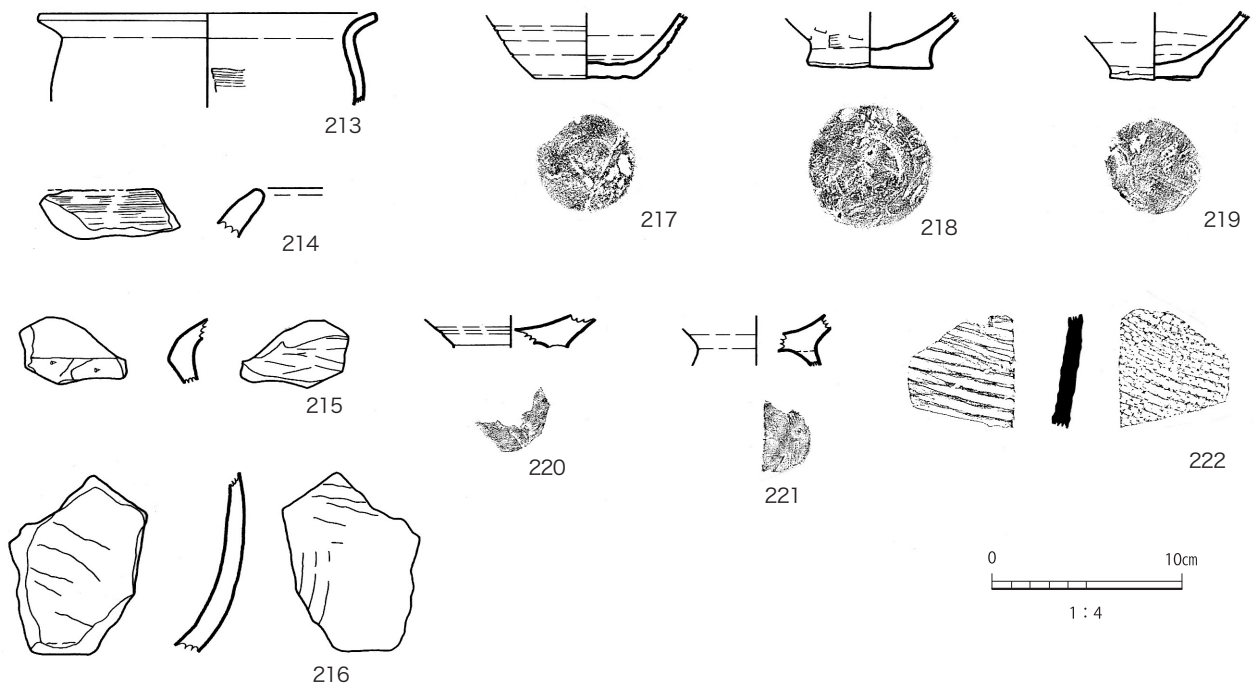


第5段階	1層：黒色土	しまり弱い。粘性なし。2mm以下のKr-Mを少量含む。
	2層：黒色土	しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを少量含む。
第4段階	3層：黒色土	しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。
	4層：黒色土	しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
	5層：黒色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
第3段階	6層：黒色土	しまりなし。粘性なし。1mm以下のKr-Mをわずかに含む。
	7層：黒色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。5層より多い。
	8層：黒色土	しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。
第2段階	9層：黒褐色土	しまり強い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。…★
	10層：黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
	11層：黒褐色土	しまりなし。シルト質。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。
第1段階	12層：黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。
	13層：黒褐色土	しまりなし。シルト質。粘性なし。1mm以下のKr-Mをごくわずかに含む。
	14層：黒褐色土	しまりなし。粘性なし。2mm以下のKr-Mをわずかに含む。V層由来。
第1段階	15層：暗褐色土	しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを少量含む。
	16層：黒褐色土	しまり弱い。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
	17層：暗褐色土	しまり強い。粘性なし。10mm以下のKr-Mを多量に含む。
	18層：暗褐色土	しまり弱い。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。
	19層：暗褐色土	しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
	20層：褐色土	しまりなし。粘性なし。Vib層の崩落層で、黒褐色土筋が数本入る。…●
	21層：褐色土	しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壁か？……◎
	22層：黒色土	しまりなし。粘性なし。10mm以下のKr-Mを含む。土壁か？……◎

第46図 S E 1 断面図③

遺物は上位層から破片が多く出土している。そのほとんどが周辺の包含層等から流れ込んだ弥生時代～古墳時代のものであった。ただし、第4段階の底面付近から古代の土師器環2点が出土しており、そのうち1点は墨書土器(211)であった。

209は甕の口縁部である。「く」の字に屈曲し、短く外傾する。210は鍋の底部付近で、上位に向かって緩やかに膨らむ。内外面を工具ナデで調整する。211・212は土師器の坏である。底部の形状は211は明瞭に厚みを持ち、212は不明瞭ながらも円盤状を呈する。底部の切り離しは共にへら切りによるものである。なお、211の坏部外面に墨書が認められるが、欠如している所が多く、判読はできなかった。



第47図 遺構に伴わない古代の遺物

### (3) 遺構に伴わない古代の遺物 (第47図)

213は第1次調査区出土で、その他は第2次調査区出土の土器である。

213～216は甕である。213は、大きく「く」の字に屈曲してつくる口縁部で、端部に面をつくる。214は、外傾する口縁部で、外面にナデ、内面にハケが施されている。口縁端部は丸く仕上げる。215は頸部にあたり、大きく反るように口縁部をつくり出すものである。内面はケズリによって、明瞭な稜線が入る。216は胴部の下半部である。外面全体にススが付着する。217～219は土師器の坏である。218、219の底部は厚く円盤状を呈する。底部の切り離しは、全てヘラ切りによるものである。220・221は高台付碗である。220は高台部との粘土のつなぎ目が認められる。222は須恵器の甕の胴部である。外面に疑格子目のタタキ、内面に平行のあて具痕が施されている。内断面の色調は灰色をなすが、外面の色調は赤色を呈する。

## 第5節 中世～近世の遺構と遺物

### (1) 遺構の分布 (第49図)

中世から近世の遺構面としては、第2次調査区の第II層において検出することができた。調査区の範囲で見ると、旧地形としては南側の横市川に向かって緩やかに傾斜していくが、第II層面では、主に耕作を目的として人為的に平滑面を作り出していることが伺える。

中世の遺構としては土坑1基と小溝状遺構群が検出できた。小溝状遺構群は、第2次調査区北半分に広がっており、方向を揃えた小溝がほぼ等間隔で並んでおり、3つの群にまとまっていた。調査区南半分は削平を受けていたため、検出には至らなかった。また、第1次調査区の壁面にも小溝状遺構群が確認できた。

近世の遺構としては、第2次調査区西側において、何らかの区画を示すと考えられる溝状遺構 S E 2



を1条検出した。近世の遺構はこの溝状遺構のみであり、調査区全体を見ても近世の遺物は少ない。

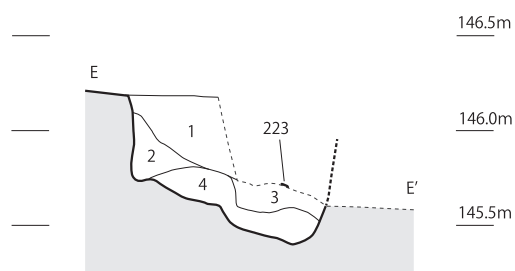
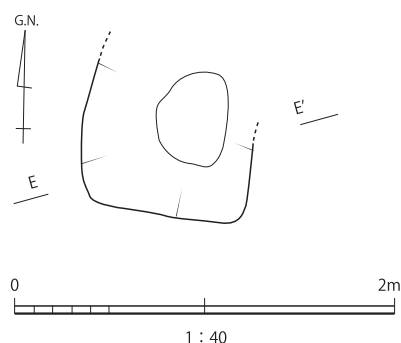
## (2) 土坑

### 3号土坑 (SC3) (第48・49図)

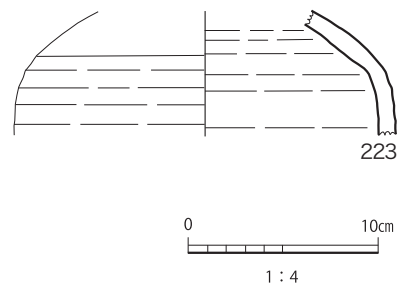
3MグリッドのVa層で検出した土坑である。当初、SE1の埋土との違いを認識できず、SE1の掘削中に備前系陶器甕が出土したことで、SE1を切る土坑の検出に至った。既にSE1の掘削作業によって約半分を削平していたため、平面形は、検出面で長軸約1.1m以上、短軸約0.9mを測り、不整隅丸長方形と推定する。残存する検出面からの深さは最大0.8mを測り、底面は南西から北東方向に約0.4mの差がある。埋土に桜島文明降下軽石層(Ⅲ層)は混在していないが、遺物の備前系陶器甕の時期から鑑みると、本来の構築面は、Ⅱ層であったことが考えられる。

埋土は4層からなる。底部に黒色土が集まっており、中～上位はV層に相当する黒褐色土で一気に埋まる。出土遺物は、先に述べた備前系陶器甕1点のみである。

223は備前系の陶器壺である。ややいかり肩につくる肩部で、外面上部には灰被りがみられる。内外面を回転ナデで整形している。備前市編年(備前市教育委員会2013)のVBに該当するものか。



- 1層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。
- 2層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mを含む。1層より少ない。
- 3層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。5mm以下のKr-Mを含む。1層より多い。
- 4層：黒色土 しまりなし。粘性なし。3mm以下のKr-Mをわずかに含む。3層より少ない。

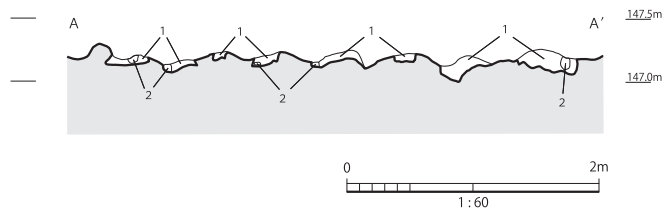
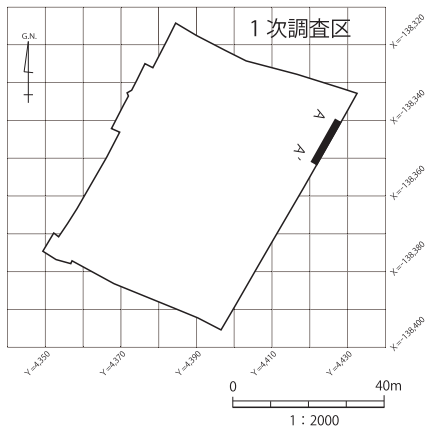


第48図 SC3平面・断面図及び出土遺物

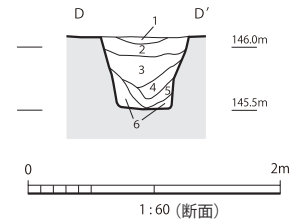
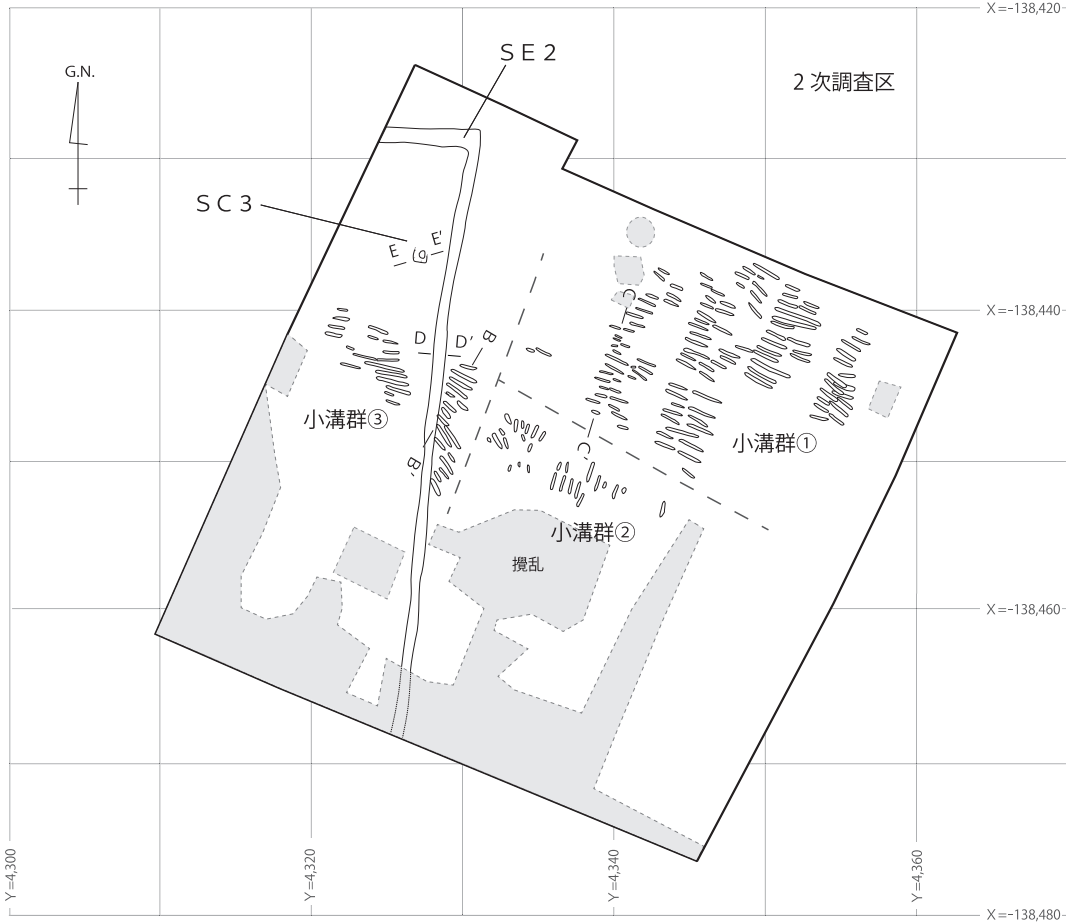
## (3) 溝状遺構

### 小溝状遺構群 (第49図)

3N～6NグリッドのIV層上面で検出した。形状から畝の畝間溝と判断した。畝間溝の方向を観察すると、大きく①～③の3群に分けられる。主軸は①群がN-約65°-W、②群がN-約20°-E、③群がN-約79°-Eをとる。溝の延長は0.5～2.6mと差が見られるが、幅は約0.2m、検出面からの深さは0.04～0.1mと一定であった。周辺の調査事例を見たときに、当時は調査区一面に畝が広がっていたと考えられるが、削平の影響で調査区南側半分は残存していない。埋土は、2層に分かれる。下層はIV層に相当する粘質系黒色土であったが、上層は桜島文明降下軽石の純層であったことから、小溝群の利用は桜島文明降下軽石降下以前であったことが分かる。なお、13D～12Fグリッドの東側壁面においても、IV層上面において桜島文明降下軽石(Ⅲ層)で埋まる不明瞭ながら連続する小溝の断面を確認した。IV層



1層：褐灰色土 しまりなし。粘性なし。5 mm以下の桜島文明降下軽石層  
 2層：黒色土 しまりなし。粘性なし。IV層ブロック層。



1層：褐灰色土 しまりなし。粘性なし。5 mm以下の桜島文明降下軽石層  
 2層：黒色土 しまりなし。粘性なし。1 mm以下の極小K r-Mをごくわずかに含む。

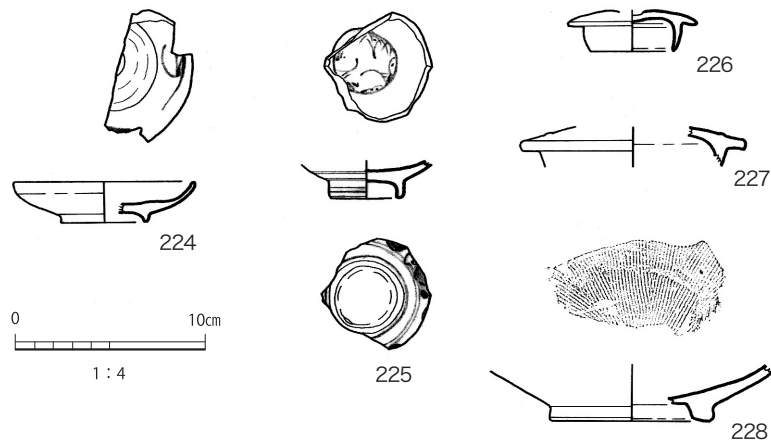
1層：黒褐色土 しまり弱い。粘性なし。3 mm以下の桜島文明降下軽石を多量に含む。  
 2層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。3 mm以下の桜島文明降下軽石を含む。  
 3層：灰褐色土 しまりなし。粘性なし。3 mm以下の桜島文明降下軽石を少量含む。  
 4層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。3 mm以下の桜島文明降下軽石をわずかに含む。  
 5層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。2 mm以下の桜島文明降下軽石をわずかに含む。  
 6層：黒褐色土 しまりなし。粘性なし。2 mm以下の桜島文明降下軽石をごくわずかに含む。

第49図 中世～近世の遺構分布図及び各断面図

上面をやや削り込む深度までが機械掘削の対象であったため、第1次調査区では平面的な検出には至らなかった。後世に耕作等による削平を受けていると考えられ、正確な畝跡の断面は確認できなかったが、畝間溝の幅は約0.18～0.46m、深さは約0.04～0.2mで、溝の埋土の一部にはIV層ブロックも確認できる。なお、他の断面観察において、6F～6Gグリッド付近の断面にも畝間溝が一部確認できた。このことから、全体的な範囲は不明だが、第1次調査区周辺にも当時は畝が広がっていたことが考えられる。

## 2号溝状遺構（SE2）（第40・50図）

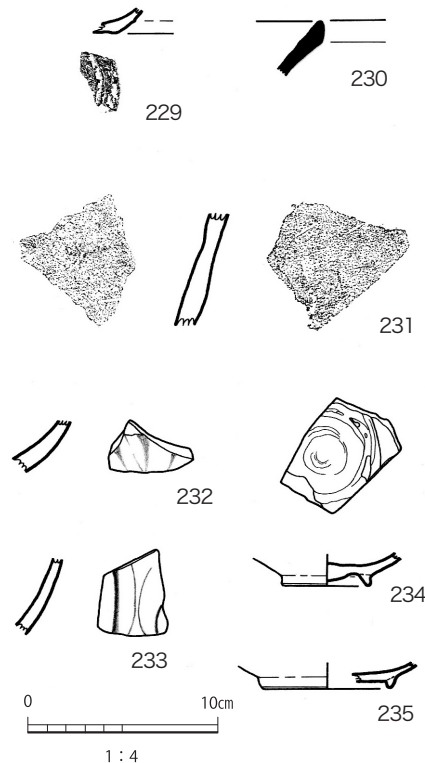
3L～3Pグリッドにかけて検出した溝である。ほぼ調査区南端から北へまっすぐ延び、4Bグリッド南西隅付近で西方向に約90°屈曲する。溝の両側ともに調査区外へと延びると推察される。検出長約40.0m（南北約35m、東西約5m）、幅約0.8mを測り、SA4の西側を切る。断面形状は逆台形状で、底面幅約0.4m、深さは検出面から約0.6mを測る。



第50図 SE2出土遺物

埋土は主に黒褐色系の粘質土からなり、6層に分けられる。いずれの層にも桜島文明降下軽石が含まれ、上層になるほど含有率が高くなる。各層レンズ状に自然堆積している。出土遺物は全て近世の陶磁器であった。

224は肥前系磁器皿である。内面に染付、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。畳付は無釉でハナレ砂が付く。225は肥前系磁器碗である。畳付は無釉である。体部と高台の外表面、見込みに染付が施されている。226・227は薩摩系の陶器蓋である。228は陶器の播鉢の底部である。体部外表面に鉄釉がかかる。



第51図 遺構に伴わない中世の遺物

## （4）遺構に伴わない中世の遺物（第51図）

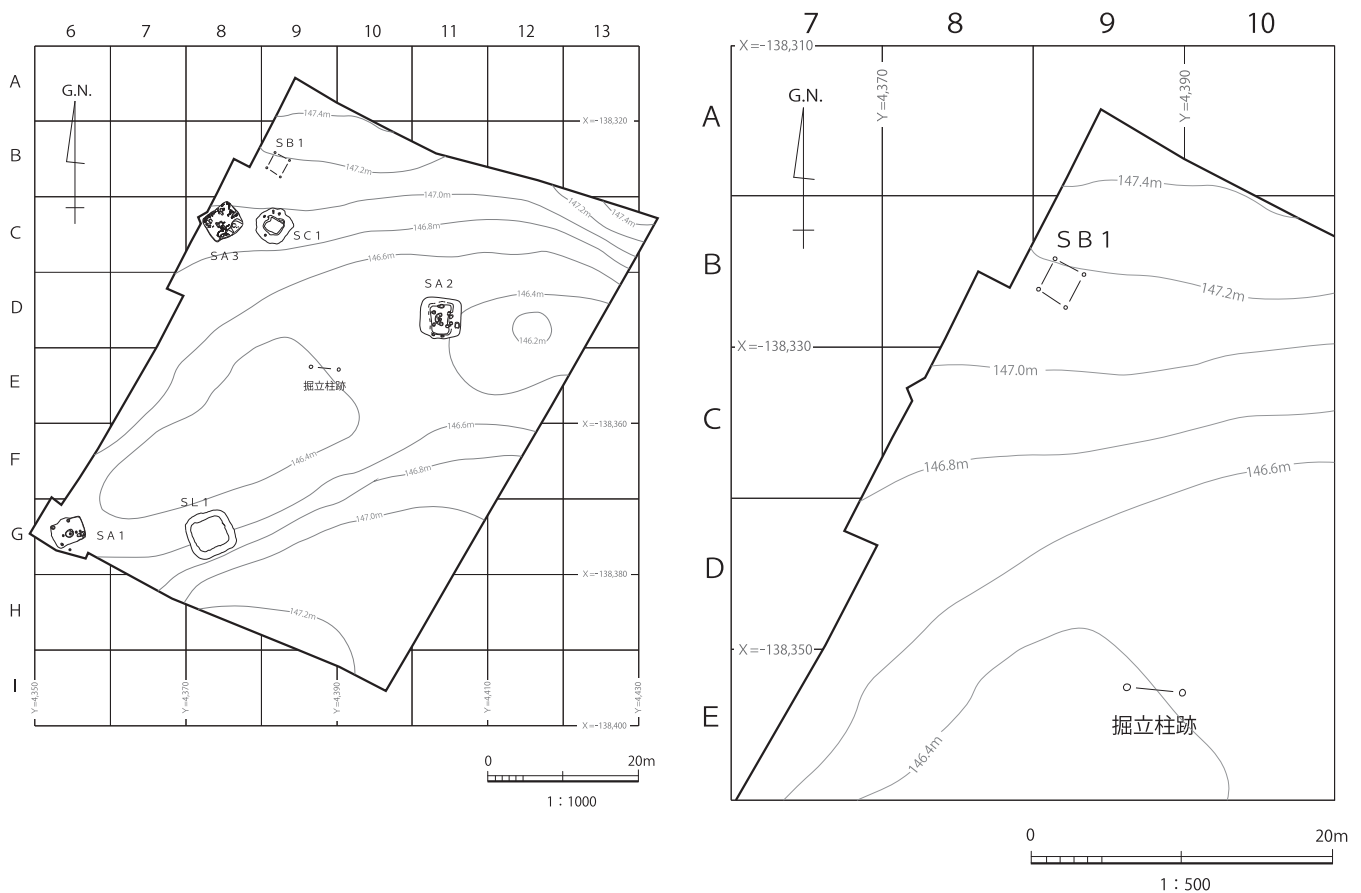
229は土師器皿である。底部の切り離しは、ヘラ切りによるものである。内外面に回転ナデが施されている。230は須恵器の片口鉢または捏鉢と考えられる口縁部である。口縁部を外傾させるもので、外側をやや肥厚させ、内側は上方につまみ上げる。森田稔氏の東播系中世須恵器の編年

(森田稔1995)による第Ⅱ期第2段階に該当するか。内外面に回転ナデが施されている。231は備前系陶器甕の胴部である。内外面にナデが施されているが、全体的に凹凸が残る。232・233は龍泉窯系の青磁碗である。外面に蓮弁文が施され、233については鎬をもつ。234・235は白磁である。234は皿か。小さな台形状の高台をもち、端部に向かって外傾する。高台内部と畳付は露胎し、高台外面の一部にも釉がかからない所がある。見込みの釉は輪状に剥ぎ取られている。森田勉氏の14～16世紀の白磁の編年(森田勉1982)によるE-2類か。235は白磁皿である。端部外面がやや内傾する三角状の小さな高台をもつ。畳付のみ露胎である。森田勉氏の編年によるE-1類にあたる。

### 第6節 時期不明の遺構

第1次調査区の第Ⅵa層において掘立柱建物跡と考えられるSB1と掘立柱跡を検出した。SB1周辺は旧地形が高くなっている場所で、第Ⅳ・Ⅴ層はほぼ削平されており、掘立柱跡は、浅い谷の中に位置し、包含層が明瞭に残存したが、柱穴埋土が第Ⅳ・Ⅴ層と酷似していたため、本来の構築面で捉えられず、第Ⅵa層での検出に至った。2つの遺構構築面は、本来は検出面よりも上層であったと考えられ、時期不明の遺構として報告する。

しかしながら、遺構埋土は周辺の弥生時代～古墳時代の遺構と同質であり、第2次調査区で検出される中近世以降の埋土とは区別できることから本遺構の時期も弥生時代～古墳時代の可能性を考えておく。



第52図 時期不明の遺構分布図

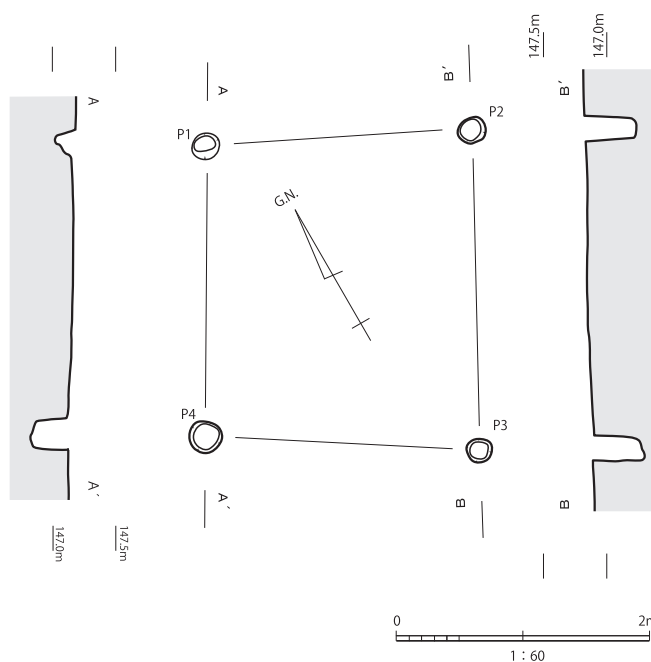
(1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物跡 (SB1) (第52図)

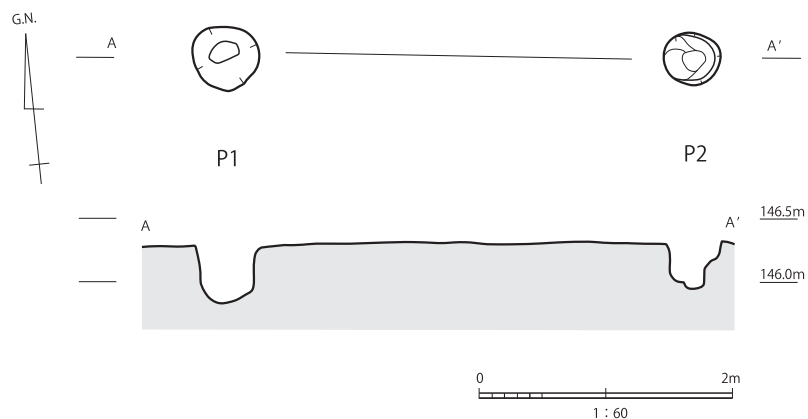
9BグリッドのVIa層上面で検出した1×1間で、SA3の北東側約10m、地形的には北側へとやや高くなる位置にある。柱間は2.1~2.3mで、平面形はほぼ正方形となる。主軸をN-30°-Eにとる。各柱穴の平面形は不整円形を呈し、柱穴の規模は径0.22~0.26mで、深さはP1のみが0.16mであったが、他は約0.4mである。

硬化面はP2、3、4に見られる。柱痕跡から推定される柱の径は0.1~0.16mである。P1とP2~4には、規模の差や柱痕跡の有無等に違いがあるが、対応する柱穴が他に無いこと、上位層が後世にかなり削り込まれていたので検出面が下がったこと等から、P1~4をSB

1として復元した。西側2mに調査区壁が近接するため、本来の形は調査区外へ続いていることも考えられる。図化し得なかったが、P2埋土中から弥生時代終末期~古墳時代前期前半の土器片が出土した。



第53図 SB1平面・断面図



第54図 掘立柱跡平面・断面図

(2) 掘立柱跡 (第53図)

9E~10EグリッドのVIa層上面で、東西に並ぶ2基の小穴を確認した。これらの小穴を検

出した当初、掘立柱建物跡の可能性を考えて周辺を精査したが、並走する小穴は確認できなかった。規模はP1(径約0.5m、深さ約0.47m)、P2(径約0.45m、深さ約0.38m)である。断面観察では確認できなかったが、いずれの小穴の底面にも柱のあたりと思われる硬化面が認められた。小穴間距離は3.7mを測る。遺物は出土していない。

第2表 松下遺跡 土器観察表①

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	深鉢	口縁部	SE1	-	-	-	-	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	褐灰	にぶい 黄橙	1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒、浅黄橙色粒、灰白色粒少量	
2	深鉢	口縁部	SA3	-	-	-	-	横方向ミガキ	横方向ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄	2mm以下灰白色粒、透明光沢粒、1mm以下黒色光沢粒わずか	圧痕有
3	深鉢	胴部	SA3	-	-	-	-	布目圧痕	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄	1mm以下褐灰色粒、灰白色粒、黒褐色粒、透明光沢粒わずか	
4	深鉢	胴部	SL1	-	-	-	-	ナデ後ミガキ?	ナデ	褐	黒褐	3mm以下褐色粒わずか、1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒、1mm以下黒褐色粒、灰褐色粒わずか	2条の沈線
6	甕	口縁部	SA1	-	-	-	-	縦方向ハケ	横方向工具痕	浅黄	にぶい 黄橙	2mm以下にぶい黄橙色、黄褐色粒わずか、微細透明光沢粒わずか	内外面 スス付着
7	甕	胴部	SA1	-	-	-	-	横方向ナデ 斜方向ハケ	横方向ナデ 斜方向ハケ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下橙色粒わずか、1mm以下黒色光沢粒と灰白色粒わずか、1mm以下透明光沢粒	刻目突帯 外面 スス付着 床面直上
8	壺	口縁部	SA1	-	-	-	-	横方向ナデ 縦・横・斜方向工具 痕 風化気味	横方向ナデ 指頭痕 縦方向工具痕	橙	橙	2mm以下無色透明ガラス質粒少量、2mm以下明褐色粒、灰褐色粒少量 2mm以下明褐色粒少量	
9	壺	口縁部 ～頸部	SA1	-	(18.85)	-	-	横方向ナデ 工具ナデ後ミガキ	斜方向工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下にぶい褐色粒、褐色色粒、3mm以下明褐色粒、にぶい黄橙色粒、2mm以下の黒褐色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒少量	床面直上
10	壺	口縁部	SA1	-	-	-	-	縦方向ハケ後 ミガキ	斜方向工具ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下にぶい赤褐色粒、にぶい褐色、灰白色粒わずか、2mm以下褐灰色粒、透明光沢粒わずか	
11	壺	口縁部	SA1	-	-	-	-	丁寧なミガキ後 横方向ナデ	丁寧なミガキ後 横方向ナデ	明黄褐	明黄褐	3mm以下灰白色粒少量、5mm以下にぶい褐色粒わずか、2mm以下乳白色光沢粒、黒褐色粒、赤褐色粒わずか	
12	壺	口縁部	SA1	-	(19.64)	-	-	粗いナデ ミガキ?	粗いナデ ミガキ?	にぶい 褐	にぶい 褐	4mm以下灰白色粒少量、2mm以下褐灰色粒わずか、1mm以下雲母多量、1mm以下黒色光沢粒	
13	壺	頸部	SA1	-	(7.1)	-	-	横方向ナデ 縦方向ハケ	全体的に剥離	橙	淡黄	4mm以下乳白色粒わずか、3mm以下褐色粒、2mm以下黒褐色粒、2mm以下光沢有り半透明粒わずか	刻目突帯 安国寺式系
14	壺	頸部～ 底部	SA1	-	-	(4.4)	-	斜方向ミガキ ヘラ描き	斜方向工具ナデ 指頭痕	橙	淡黄	3mm以下褐色粒とにぶい赤褐色粒、2mm以下黒色光沢粒と灰白色粒、褐色色粒、透明光沢粒	線刻 床面直上
15	高坏	坏部～ 底部	SA1	-	(38.98)	16.8	(22.1)	縦・横・斜方向ミガ キ 黒斑 風化著 しい	横・斜方向ミガキ 風化気味	橙 にぶい 黄橙	明黄褐 にぶい 黄橙	3mm以下褐灰色粒、2mm以下灰白色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒、橙色粒、黒褐色粒、1mm以下にぶい赤褐色粒わずか、にぶい褐色粒少量	内外面 スス付着 床面直上
16	高坏	坏部	SA1	-	(25.58)	-	-	縦・斜方向のミガ キ 風化気味	横・斜方向のミガ キ	浅黄橙	橙	2mm以下褐色粒少量、2mm以下角閃石少量、2mm以下透明光沢粒、1mm以下黒褐色粒わずか	
17	高坏	脚部	SA1	-	-	-	-	縦方向工具ナデ 風化気味	横・斜方向 工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下にぶい黄褐色粒、2mm以下にぶい赤褐色粒、透明光沢粒、褐灰色粒、1mm以下にぶい黄橙色粒、黒色光沢粒わずか	
18	鉢	口縁部	SA1	-	-	-	-	横方向ナデ 一部斜方向工具痕 斜方向ハケ	横方向ナデ 斜方向ハケ	にぶい 橙	にぶい 橙	3mm以下黒褐色粒、2mm以下透明光沢粒わずか	
19	ミニ チュア	頸部～ 底部	SA1	-	-	-	-	指押さえ		橙		2mm以下黒褐色粒、灰褐色粒わずか	
24	甕	頸部～ 底部	SA2	-	-	6.28	-	縦方向工具ナデ ミガキ?	斜方向工具ナデ	浅黄橙 にぶい 黄橙	浅黄橙 浅黄橙	3mm以下にぶい赤褐色粒、3mm以下黒褐色粒、3mm以下褐灰色粒、褐色粒少量黒色光沢粒、灰白色粒、2mm以下透明光沢粒少量	
25	甕	底部付近	SA2	-	-	-	-	斜方向ハケ	ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	4mm以下黒褐色粒、3mm以下にぶい黄橙色粒、2mm以下の透明光沢粒、灰白色粒、黒色光沢粒少量	内面 スス付着
26	壺	口縁部	SA2	-	-	-	-	横方向ナデ後 ミガキ	横方向ナデ後 ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1.5mm以下黒褐色粒少量、1.5mm以下暗褐色粒わずか	
27	壺or 鉢	胴部～ 底部	SA2	-	-	1.6	-	斜方向工具ナデ後 丁寧なナデ	斜方向工具ナデ後 丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下黒褐色粒、明褐色粒少量、2mm以下透明光沢粒少量	
28	壺	底部	SA2	-	-	(6.7)	-	斜方向ハケ後 ミガキ	調整不明	にぶい 黄橙		3mm以下褐灰色粒多量、2mm以下黒褐色粒、にぶい黄褐色粒、透明光沢粒わずか	
29	壺	底部	SA2	-	-	5.6	-	斜方向工具ナデ	斜方向工具ナデ 指頭痕	浅黄橙	淡黄	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒少量、2mm以下灰白色粒、黄褐色粒、にぶい黄褐色粒わずか	
30	壺	底部	SA2	-	-	(6.1)	-	工具ナデ後ミガキ 風化気味	斜方向工具ナデ 黒斑	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下黒褐色粒、4mm以下暗褐色粒、3mm以下灰白色粒、1mm以下透明光沢粒わずか	外面 スス付着
31	鉢	口縁部	SA2	-	-	-	-	横方向ナデ 櫛描波状文 ミガキ?	横方向ナデ	浅黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下黒褐色粒、3mm以下暗褐色粒、3mm以下褐色粒わずか	外面 スス付着
32	鉢	口縁部	SA2	-	-	-	-	ハケ 黒斑	横方向工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下灰白色粒、褐色粒、にぶい赤褐色粒、2mm以下透明光沢粒、1mm以下黒褐色粒わずか	
33	鉢	口縁部 ～底部	SA2	-	(12.2)	(4.7)	-	横方向ナデ後ミガ キ?斜方向ミガ キ?ナデ	横方向ナデ 斜方向工具ナデ 剥離・指頭痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒、灰白色粒、2mm以下白色光沢粒わずか、3mm以下暗褐色粒少量	
34	鉢	口縁部	SA2	-	(19.8)	-	-	横方向ナデ 横・斜方向ハケ 剥離面多い	横方向ナデ 横方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下黒褐色粒少量、2mm以下暗褐色粒わずか、2mm以下褐色粒わずか	外面 スス付着
35	鉢	口縁部 ～底部	SA2	-	-	-	-	横・斜方向ハケ 丁寧なミガキ	横方向ナデ 横・斜方向ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下灰褐色粒多量、2mm以下黒褐色粒、赤褐色粒、1mm以下明黄褐色光沢粒わずか	内面 スス付着

第2表 松下遺跡 土器観察表②

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
36	鉢	胴部～底部	SA 2	-	-	(4.7)	-	斜方向指ナテ指頭痕	縦・斜方向工具ナテ	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下にふい赤褐色粒、3mm以下褐灰色粒、2mm以下透明光沢粒わずか、2mm以下黒褐色粒少量	
37	器台	口縁部	SA 2	-	-	-	-	斜方向ミガキ風化気味	斜方向ミガキ風化気味	にふい黄橙	にふい黄橙	2mm以下黒褐色粒、褐色粒、黒色光沢粒、褐灰色粒わずか	
38	ミニチュア	口縁部～胴部	SA 2	-	-	-	-	ナテ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	2mm以下褐灰色粒、透明光沢粒、1mm以下の黒褐色粒	
39	ミニチュア	口縁部～底部	SA 2	-	(7.95)	(3.3)	7.2	ナテ黒斑	斜方向工具ナテ黒斑	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下黒褐色粒、1mm以下にふい褐色粒、透明光沢粒、灰白色粒少量	
40	ミニチュア	底部	SA 2	-	-	3.8	-	ナテ指頭痕	斜方向工具ナテ指頭痕	にふい黄橙	にふい黄橙	6mm以下褐灰色粒、2mm以下灰白色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒わずか、3mm以下にふい赤褐色粒少量	
45	甕	口縁部	SA 3	-	-	-	-	ナテ風化気味	ナテ風化気味	にふい黄橙	にふい黄橙	5mm以下にふい褐色粒、2mm以下黒褐色粒、1mm以下明赤褐色粒、褐灰色粒わずか	
46	甕	口縁部	SA 3	-	-	-	-	斜方向ハケ	斜方向ハケ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下にふい赤褐色粒、灰白色粒、1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒わずか	
47	甕	口縁部	SA 3	-	-	-	-	縦方向ハケ	横方向工具ナテ	浅黄	浅黄	3mm以下暗褐色粒、2mm以下透明光沢粒、明褐色粒、1mm以下黒褐色粒わずか	
48	甕	口縁部	SA 3	-	(19.4)	-	-	縦・斜方向ハケ	横・斜方向ハケ指頭痕	赤橙 浅黄橙	赤橙 にふい黄橙	4mm以下褐色粒、3mm以下にふい黄褐色粒わずか、2mm以下灰褐色粒	
49	小型壺	口縁部	SA 3	-	-	-	-	横方向ナテ	横方向ナテ	浅黄橙	にふい黄橙	3mm以下褐灰色粒、褐色粒、2mm以下黒色光沢粒、黒褐色粒、1mm以下灰白色粒、透明光沢粒わずか	
50	壺	口縁部	SA 3	-	-	-	-	ナテ風化気味	ナテ風化気味	淡黄	淡黄	4mm以下にふい橙色粒、2mm以下褐灰色粒、明褐色粒、1mm以下透明光沢粒、黒色光沢粒わずか	
51	小型壺	口縁部	SA 3	-	(5.8)	-	-	斜方向ミガキ	横方向ナテ	橙	橙	1mm以下黒褐色粒、透明光沢粒、褐色粒わずか	
52	壺	口縁部	SA 3	-	-	-	-	櫛描波状文	横ナテ	にふい橙	にふい橙	4mm以下褐色粒多量、3mm以下灰褐色粒多量、2mm以下灰褐色光沢粒わずか	櫛描波状文二重口縁
53	壺	底部	SA 3	-	-	(6.5)	-	斜方向ハケ	調整不明	にふい黄橙		5mm以下灰褐色粒わずか、3mm以下白色光沢粒、黒褐色粒、褐色粒わずか、2mm以下灰白色粒少量	
54	高坏or鉢	口縁部	SA 3	-	-	-	-	横方向ナテ縦斜方向ミガキ	横斜方向ミガキ	にふい黄橙	にふい黄橙	1mm以下黒褐色粒、暗褐色粒、白色光沢粒わずか	
55	鉢or甕	口縁部	SA 3	-	-	-	-	横方向ナテ後斜方向ミガキ黒斑	横方向ナテ後縦方向ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下褐灰色粒、黒褐色粒、1mm以下にふい黄褐色粒、透明光沢粒わずか	
56	鉢	口縁部～胴部	SA 3	-	13.1	-	-	指頭痕斜方向工具ナテ風化著しい	斜方向工具ナテ黒斑 風化気味	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下灰白色粒、褐色粒、3mm以下黒褐色粒、灰褐色粒、2mm以下白色光沢粒、黒色光沢粒わずか	外面スス付着
57	鉢	胴部～底部	SA 3	-	-	(4.8)	-	斜方向ミガキ	斜方向ミガキ	にふい黄橙	にふい黄橙	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒、白色光沢粒、2mm以下黒色光沢粒わずか、3mm以下暗褐色粒少量	
59	甕	口縁部	SA 4	-	-	-	-	横方向工具ナテ全体的にスス付着	横方向工具ナテ全体的に黒斑	暗褐	黄灰	4mm以下褐色粒、明褐色粒、褐灰色粒、2mm以下灰白色粒、1mm以下透明光沢粒	床面直上
60	甕	口縁部～胴部	SA 4	-	(23.6)	-	-	横方向丁寧なナテ	横方向ナテ横・斜方向ハケ	にふい黄橙	にふい黄橙	4mm以下褐色粒、灰色粒、白色粒、微細な光沢粒、2mm以下石英わずか	床面直上
61	甕	口縁部～胴部	SA 4	-	(18.7)	-	-	縦・横・斜方向のハケ	横方向ナテ横・斜方向ハケ	にふい黄橙	にふい黄橙	5mm以下暗赤褐色粒、透明光沢粒(石英)、灰白色粒、黒褐色粒(輝石)、軟質赤色粒子	外面スス付着床面直上
62	甕	口縁部～胴部	SA 4	-	(20.4)	-	-	ナテ	斜・横方向ハケ指頭痕後ハケ	にふい黄橙	にふい黄橙 浅黄	5mm以下褐色粒、2mm以下灰白色粒少量、2mm以下透明光沢粒、1mm以下黒褐色粒わずか	外面スス付着床面直上
63	甕	口縁部～底部	SA 4	-	(22.4)	3.1	23.9	縦・横方向ハケ指頭痕 横ナテ	指頭痕ナテ	浅黄橙 黄橙	浅黄橙 褐灰	3mm以下褐灰色粒、にふい褐色粒、2mm以下白色粒(石英)わずか	外面スス付着床面直上
64	甕	頸部～胴部	SA 4	-	-	-	-	工具ナテ	ハケ	にふい黄橙	明黄褐	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒わずか、3mm以下褐灰色粒わずか、1mm以下透明光沢粒わずか	外面スス付着床面直上
65	甕	底部付近胴部	SA 4	-	-	-	-	横方向粗いたタキ	縦・斜方向ハケ	浅黄	にふい黄橙	にふい橙色粒、石英、にふい褐色粒わずか	床面直上
66	甕	胴部	SA 4	-	-	-	-	斜方向ハケ	斜方向ハケ一部工具ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	2mm以下黒褐色粒、1mm以下灰白色粒わずか	外面スス付着床面直上
67	甕	胴部～底部	SA 4	-	-	(7.0)	-	縦方向ハケ後丁寧な横方向ナテ	縦・横方向ナテ	にふい褐	にふい褐 黒褐	3mm以下明赤褐色粒わずか、2mm以下乳白色粒、石英わずか、微細光沢粒少量	内外面スス付着床面直上
68	壺	口縁部	SA 4	-	-	-	-	縦方向ナテ後一部工具ナテ	横方向ナテ後一部工具ナテ	にふい黄橙	浅黄	4mm以下にふい黄褐色粒、2mm以下黒褐色粒、にふい黄色粒わずか	櫛描波状文床面直上
69	壺	口縁部	SA 4	-	-	-	-	縦方向ナテ後ミガキ	横方向ナテ一部工具ナテ指頭痕	にふい黄橙 灰黄褐	にふい黄橙	1mm以下灰白色粒、透明光沢粒わずか	櫛描波状文
70	壺	口縁部	SA 4	-	-	-	-	縦・斜方向ミガキ	横方向ミガ	にふい黄橙 にふい橙	にふい黄橙	3mm以下褐色粒少量、2mm以下褐灰色粒わずか、1mm以下黒褐色粒、透明光沢粒わずか	

第2表 松下遺跡 土器観察表③

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
71	壺	口縁部	SA 4	-	(19.0)	-	-	横方向ナテ 縦・横方向ハケ	横方向ナテ	にぶい 橙	橙	3mm以下透明光沢粒(石英)、黒褐色粒(輝石)、明赤褐色粒、褐灰色粒、軟質赤色粒子	床面直上
72	壺	口縁部 ~胴部	SA 4	-	(16.8)	-	-	縦・斜方向工具ナテ	横・斜方向工具ナテ	橙	浅黄橙	5mm以下褐色粒、2mm以下にぶい褐色粒、灰白色粒、透明光沢粒わずか、1mm以下黒色光沢粒わずか	床面直上
73	小型丸底壺	頸部~胴部	SA 4	-	-	-	-	縦方向ミガキ	ナテ 横方向ナテ	橙	橙	2mm以下透明光沢粒(石英)、黒褐色粒(輝石)、褐灰色粒、灰白色粒、軟質赤色粒子	床面直上
74	壺	頸部	SA 4	-	-	-	-	調整不明	調整不明	浅黄橙	にぶい 橙	3mm以下灰白色粒わずか、2mm以下黒褐色粒、黒色光沢粒、明赤褐色粒少量	外面 スス付着 床面直上
75	壺	頸部~胴部	SA 4	-	-	-	-	調整不明	調整不明	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下透明光沢粒(石英)、黒褐色粒(輝石)、暗赤褐色粒、灰白色粒、褐灰色粒子	床面直上
76	壺	頸部~胴部	SA 4	-	-	-	-	ヘラミガキ	ナテ 指頭痕	灰黄褐	にぶい 黄橙	石英 最大2mm以下わずか、2mm以下赤褐色粒わずか、微細な光沢粒	床面直上
77	壺	頸部~胴部	SA 4	-	-	-	-	斜・縦方向ヘラミガキ	工具ナテ 指頭痕	にぶい 黄橙	にぶい 橙	1mm大石英、褐色粒、灰色粒少量	床面直上
78	裝飾壺	胴部	SA 4	-	-	-	-	横ナテ 縦方向ミガキ	縦方向工具ナテ	橙	橙	2mm以下石英粒少量、1mm以下白色粒わずか	胴部にスス 付着 床面直上 瀬戸内系
79	壺	完形	SA 4	-	10.05	2.3	20.5	横方向ナテ 縦方向ハケ ミガキ	横・斜方向ハケ 丁寧ナテ 指ナテ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	7mm程度黒褐色粒子わずか、5mm以下褐色粒、褐灰色粒、灰白色粒、3mm以下透明光沢粒(石英)少量	線刻 黒斑 床面直上
80	鉢	口縁部	SA 4	-	-	-	-	横方向ナテ 風化著しい	横方向ナテ 風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下黒褐色粒、にぶい褐色粒、黒色光沢粒、灰白色粒、褐灰色粒わずか	
81	鉢	口縁部	SA 4	-	-	-	-	丁寧ナテ	斜方向ハケ後 縦方向工具ナテ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下明赤褐色粒、灰褐色粒、黒褐色粒、軟質赤色粒子	
82	鉢	頸部~胴部	SA 4	-	-	-	-	櫛描波状文 斜方向ミガキ	調整不明	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下黄褐色粒わずか、2mm以下黒褐色粒、褐灰色粒、明赤褐色粒、1mm以下透明光沢粒少量	床面直上
83	鉢	口縁部 ~胴部	SA 4	-	(15.0)	-	-	横方向ナテ、ミガキ 斜方向ハケ後 ミガキ	縦・斜方向ハケ ナテ	灰黄褐	にぶい 黄橙	2mm以下明褐色粒少量、2mm以下灰白色粒、褐灰色粒、黒褐色粒わずか	床面直上
84	鉢	口縁部 ~胴部	SA 4	-	(11.9)	-	-	縦・斜方向ハケ 一部風化気味 黒斑	縦・斜方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下褐灰、3mm以下にぶい黄褐、2mm以下透明光沢粒少量、2mm以下黒色光沢粒、黒褐色粒	床面直上
85	鉢	口縁部 ~頸部	SA 4	-	(26.6)	-	-	斜方向ミガキ?	斜・縦・斜方向ミガキ	橙	浅黄橙	3mm以下褐色粒、灰色粒、2mm以下石英、輝石わずか	
86	鉢	口縁部 ~底部	SA 4	-	(26.8)	-	-	横方向ナテ 斜方向ミガキ	横方向ナテ 斜方向ミガキ	淡黄	淡黄	3mm以下褐色粒、黒褐色粒、3mm以下にぶい褐色粒少量、2mm以下透明光沢粒、1mm以下灰白色粒わずか	床面直上
87	鉢	胴部~底部	SA 4	-	-	-	-	ナテ 横ナテ 指頭痕	斜・横方向ハケ	浅黄	にぶい 黄 浅黄	3mm以下にぶい赤褐色粒、黒褐色粒少量、石英わずか	床面直上
88	鉢	脚部	SA 4	-	-	7.9	-	縦方向工具痕 横方向工具ナテ 指頭痕	横方向工具ナテ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下石英少量、微細な光沢粒	床面直上
89	ミニチュア	口縁部 ~底部	SA 4	-	4.58	2.44	5.82	縦方向ハケ 指頭痕	ナテ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下にぶい褐色粒、2mm以下黒褐色粒、2mm以下褐灰色粒わずか、1mm以下透明光沢粒	
100	甕	口縁部 ~底部	SC 1	-	(22.8)	(5.76)	20.1	斜方向ハケ 縦・横方向工具ナテ	斜方向工具ナテ 指頭痕 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下にぶい褐色粒、2mm以下灰白色粒、褐灰色粒、黒色光沢粒、黄褐色粒、透明光沢粒、淡黄粒少量	内外面 スス付着
101	甕	底部	SC 1	-	-	6.55	-	斜方向ハケ	斜方向ハケ 黒斑	にぶい 黄橙	浅黄	3mm以下褐色粒少量、2mm以下暗褐色粒、灰白色粒、1mm以下白色光沢粒、黒色光沢粒わずか	外面 スス付着
102	甕	口縁部	SC 1	-	-	-	-	横方向ハケ	横方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下褐色粒、3mm以下褐灰色粒わずか、1mm以下黒褐色粒、灰白色粒わずか	
103	甕	底部	SC 1	-	-	-	-	横方向ハケ 風化気味	横方向ハケ 風化気味	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm以下黒褐色粒、黒色光沢粒、灰白色粒、透明光沢粒	外面に圧痕?
104	直口壺	口縁部 ~頸部	SC 1	-	(69.4)	-	-	斜方向ミガキ	工具ナテ後ミガキ	橙	橙	1mm以下黒褐色粒、灰褐色粒わずか、2mm以下暗褐色粒、白色光沢粒粒わずか	
105	壺	口縁部	SC 1	-	-	-	-	横方向ナテ 櫛描波状文	横方向ナテ 斜方向ハケ	橙	橙	1mm以下褐色粒、褐灰色粒、黒褐色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒粒わずか	外面 スス付着
106	壺	口縁部 ~胴部	SC 1	-	(6.15)	-	-	斜方向ハケ	横方向ハケ ナテ 指頭痕	浅黄橙	淡黄	2mm以下褐灰色粒、黒褐色粒、2mm以下にぶい黄褐色粒、にぶい褐色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒少量	
107	高坏or器台	脚部	SC 1	-	(19.1)	-	-	横方向ハケ 縦方向ハケ	横方向ハケ 斜方向ハケ	橙	橙	2mm以下褐色粒、2mm以下褐灰色粒、灰白色粒、1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒粒わずか	
108	鉢	口縁部 ~底部	SC 1	-	16	-	-	工具ナテ後ミガキ 黒斑	ナテ後ミガキ	にぶい 黄橙	橙	3mm以下黒褐の粒わずか、2mm以下褐、白色光沢粒粒わずか	
109	鉢	口縁部 ~底部	SC 1	-	(16.8)	-	-	丁寧ナテ 指頭痕	斜方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下灰黄褐色粒、にぶい赤褐色粒、2mm以下黒褐色粒、褐灰色粒、褐色粒、にぶい褐色粒、灰白色粒少量	
110	ミニチュア	口縁部 ~底部	SC 1	-	(5.1)	-	-	ナテ	ナテ	灰黄	灰白	5mm以下灰白色粒、4mm以下にぶい黄褐色粒、3mm以下黄褐色粒、2mm以下透明光沢粒、にぶい黄褐色粒、1mm以下褐灰色粒、黒褐色粒粒わずか	



第2表 松下遺跡 土器観察表④

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
111	甕	口縁部～底部	SC 2	-	-	(5.5)	-	縦方向工具ナデ 指頭痕 スス付着	斜方向工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下褐色粒多量、4mm以下灰白色粒、3mm以下暗褐色粒少量、2mm以下黒褐色粒、1mm以下透明光沢粒わずか	
112	甕	胴部～底部	SC 2	-	-	(6.5)	-	斜方向板ナデ 斜方向工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下褐色粒、褐色色粒、灰白色粒、黒褐色粒、透明光沢粒多量	
113	壺	口縁部	SC 2	-	-	-	-	丁寧なナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下石英、赤褐色粒わずか	柳描 波状文
114	鉢	口縁部	SC 2	-	(11.6)	-	-	ナデ 丁寧なナデ	斜方向工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下輝石、赤褐色粒わずか、2mm以下石英わずか	
115	甕	口縁部	SL 1	-	-	-	-	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい 褐	橙	3mm以下褐色粒少量、2mm以下黒褐色粒多量、2mm以下灰白色粒、微細な黒色光沢粒、透明光沢粒	外面 スス付着
116	壺	口縁部	SL 1	-	(17.2)	-	-	横方向丁寧な ミガキ	斜方向工具ナデ 横・斜方向 ミガキ	橙	にぶい 黄橙	2mm以下黒色光沢粒、褐色粒、灰白色粒、褐色色粒わずか	外面 スス付着
117	壺	口縁付近	SL 1	-	-	-	-	斜方向強い工具ナ デ後斜方向ミガキ	斜方向工具ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	灰白	2mm以下にぶい黄褐色粒、褐色色粒、灰白色粒、黒褐色色粒、黒色光沢粒わずか、1mm以下透明光沢粒少量	
118	壺	口縁部～底部	SL 1	-	13.5	-	(7.5)	横方向ナデ 斜方向工具ナデ後 ミガキ	横方向ナデ 斜方向工具ナ デ	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	4mm以下にぶい褐色粒、4mm以下にぶい赤褐色粒、3mm以下明赤褐色粒、褐色色粒、透明光沢粒、黒褐色色粒、黒色光沢粒、にぶい褐色色粒、灰白色粒少量	
119	甕	口縁部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	横方向ハケ ナデ	横・斜方向ハケ	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	1mm以下赤褐色粒(まれに5mm大)、白色粒、黒色粒、微細～1mm雲母多量	
120	甕	口縁部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	横ナデ	ナデ	にぶい 褐	にぶい 黄橙	2mm以下雲母わずか、1mm以下石英少量、最大5mm乳白色粒わずか	
121	甕	口縁部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	横ナデ	丁寧な横ナデ	褐	明褐	最大3mm以下雲母わずか、2mm以下石英わずか、微細な光沢粒	
122	甕	口縁部	5 P 土器 集中区	V b	(32.6)	-	-	調整不明	調整不明	橙	橙	2mm以下灰白色粒、褐色色粒、黒褐色色粒、赤褐色色粒、透明光沢粒、軟質赤色粒子多量	
123	甕	胴部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	縦方向ハケ後 ミガキ	斜方向ハケ	褐	褐灰	3mm以下灰白色粒、黒褐色色粒、赤褐色色粒、褐色色粒、軟質赤色粒、雲母多量	山ノ口式系
124	壺	胴部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	横方向ナデ	丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	3mm以下灰白色粒、透明光沢粒、赤褐色色粒、褐色色粒、雲母多量	貼付突帯 山ノ口式系
125	甕	胴部～底部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	斜方向工具ナデ 後ミガキ？ 横方向ナデ	斜方向工具ナデ 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下褐色色粒少量、3mm以下黒褐色色粒、透明光沢粒、にぶい黄褐色色粒、2mm以下灰白色粒、にぶい褐色粒少量	外面 スス付着
126	甕	胴部～底部	5 P 土器 集中区	V b	-	-	-	斜方向ナデ	風化著しい ナデ？	にぶい 橙 明赤褐	黒褐	3mm以下雲母粒多量、3mm以下灰白色粒少量、2mm以下黒褐色色粒少量	山ノ口式系
127	壺	口縁部	5 P 土器 集中区	-	-	-	-	風化気味 ナデ	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下石英、1mm以下灰褐色色粒、赤褐色色粒、褐色色粒、微細な光沢粒少量	
128	壺	胴部	5 P 土器 集中区	-	-	-	-	横方向ナデ	丁寧なナデ	橙	明赤褐	3mm以下黒褐色色粒、灰白色粒、赤褐色色粒、透明光沢粒、雲母多量	貼付突帯
129	壺	胴部	5 P 土器 集中区	-	-	-	-	調整不明	調整不明	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下黒色光沢粒、1mm以下透明光沢粒、褐色色粒わずか	貼付突帯 山ノ口式系
130	壺	胴部	5 P 土器 集中区	-	-	-	-	横方向ナデ	斜方向工具ナデ 指頭痕	にぶい 褐	にぶい 黄褐	3mm以下灰白色粒、明赤褐色色粒、黒褐色色粒、1mm以下透明光沢粒わずか、1mm以下浅黄褐色色粒少量	貼付突帯 山ノ口式系
131	壺	口縁部～頸部	SH 1	-	-	-	-	横方向ナデ後ミガ キ 縦方向ハケ後 ミガキ	斜方向ハケ後横・ 斜方向ミガキ 斜方向ハケ	にぶい 褐	にぶい 褐	4mm以下褐色色粒、3mm以下明赤褐色色粒少量、2mm以下黒褐色色粒、1mm以下浅黄褐色色粒、灰白色粒 2mm以下雲母多量	口縁部 2条の突帯 山ノ口式系
132	甕	口縁部	5・6 N	IV	-	-	-	横方向工具ナデ 斜方向ミガキ	横方向工具ナデ ミガキ？	黒	にぶい 赤褐 黒	1mm以下石英わずか、微細な光沢粒	刻目貼付 突帯下 スス付着
133	甕	口縁部～胴部	8 D	IV	-	-	-	横方向ナデ 風化気味	横方向ナデ 風化気味	明褐	にぶい 褐	4mm以下灰白色粒、1mm以下赤褐色色粒、黒褐色色粒、褐色色粒、黒色光沢粒わずか、2mm以下雲母、1mm以下浅黄褐色色粒多量	貼付突帯 山ノ口式系
134	甕	胴部	8 D	IV	-	-	-	横方向ナデ	斜方向ナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	4mm以下透明光沢粒少量、3mm以下浅黄褐色色粒少量、1mm以下灰白色粒、黒色光沢粒、褐色色粒わずか	貼付突帯 山ノ口式系
135	甕	突帯	9 D	IV	-	-	-	横方向ナデ		褐		3mm以下雲母、2mm以下灰白色粒、1mm以下赤褐色色粒わずか	貼付突帯 山ノ口式系
136	甕	胴部	3・4 O	IV	-	-	-	横方向工具ナデ	横 縦方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下明赤褐色色粒、2mm以下黒褐色色粒、1mm以下透明光沢粒わずか	貼付突帯 外面 スス付着
137	甕	胴部	3・4 O	IV	-	-	-	横方向工具ナデ	横方向工具ナデ 指頭痕	浅黄橙	灰黄	2mm以下黒褐色色粒、黒色光沢粒、褐色色粒、透明光沢粒少量	貼付突帯 外面 スス付着
138	壺	頸部	SE 1	-	-	-	-	縦方向ハケ 縦・斜方向ミガキ	ナデ 風化著しい	にぶい 橙	にぶい 橙	3mm以下灰白色粒少量、2mm以下透明光沢粒、1mm以下黒色光沢粒わずか、1mm以下明赤褐色色粒	勾玉状浮文
139	甕	口縁部	9 D	IV	-	-	-	横・斜方向ハケ	斜方向ハケ 指頭痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下灰褐色色粒、3mm以下褐色色粒、1mm以下黒褐色色粒、透明光沢粒、褐色色粒わずか	
140	甕	口縁部	10H	II	(21.0)	-	-	横方向ナデ 斜方向ハケ	横方向ナデ 斜方向ハケ	にぶい 褐 にぶい 黄橙	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	5mm以下褐色色粒多量、3mm以下褐色色粒多量、2mm以下灰白色粒わずか	外面 スス付着

第2表 松下遺跡 土器観察表⑤

遺物 番号	器種	部位	出土 地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
141	甕	口縁部 ～胴部	8 D	IV	(30.4)	-	-	調整不明	調整不明	浅黄橙 橙	浅黄橙	4mm以下灰色粒多量、3mm以下褐色粒多量、2mm以下灰白色粒	
142	甕	口縁部	9 C	IV	-	-	-	縦方向ハケ 剥離面多い	横方向ハケ 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下にぶい褐色粒、2mm以下褐色粒少量、1mm以下黒褐色粒、褐灰色粒、透明光沢粒わずか	
143	甕	口縁部	第1次 手穴	II	-	-	-	縦・横方向ナデ	横方向ナデ 風化著しい	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下褐色粒多量、3mm以下黒褐色粒、2mm以下灰白色粒少量、2mm以下透明光沢粒わずか	
144	甕	口縁部	8 D	IV	-	-	-	ナデ?	ナデ?	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下灰白色粒、4mm以下褐色粒、2mm以下黒褐色粒、透明光沢粒わずか	刻目 貼付突帯
145	甕	口縁部	9 D	IV	-	-	-	横方向ナデ スス付着	横方向ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下褐色粒、2mm以下にぶい赤褐色粒、1mm以下透明光沢粒わずか	
146	甕	口縁部	8 D	IV	-	-	-	横方向ナデ 風化気味	横方向ナデ 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下黒褐色粒わずか、3mm以下褐色粒、3mm以下灰白色粒わずか、3mm以下透明光沢粒少量	内外面 スス付着
147	甕	口縁部	9 D	IV	(20.5)	-	-	斜方向ナデ 工具ナデ 指頭痕	横・斜方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒わずか、灰白色粒、透明光沢粒わずか、2mm以下黒色光沢粒わずか	外面 スス付着
148	甕	口縁部	9 D	IV	(23.4)	-	-	工具ナデ 風化著しい	調整不明	橙	橙	6mm以下褐色粒多量、5mm以下褐色粒、2mm以下灰白色粒、透明光沢粒、黒褐色粒わずか	外面 スス付着
149	甕	頸部	8 D	IV	-	-	-	縦・斜方向ナデ	斜方向ナデ	浅黄	にぶい 黄橙	5mm以下黒褐色粒少量、3mm以下褐色粒、透明光沢粒わずか	刻目 貼付突帯
150	甕	底部	9 C	IV	-	(5.25)	-	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	浅黄橙	3mm以下灰白色粒、2mm以下黒褐色粒少量、2mm以下にぶい黄褐色粒わずか、1mm以下透明光沢粒、黒色光沢粒わずか	
151	甕	底部	8 D	IV	-	7.2	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下にぶい黄褐色粒、4mm以下灰白色粒、褐色粒多量、3mm以下透明光沢粒わずか	
152	甕	底部	10 H・I	II	-	6.7	-	斜方向工具ナデ 指頭痕 横方向ナデ	ナデ 風化気味	にぶい 黄橙	黄灰	4mm以下黒褐色粒多量、灰白色粒わずか、2mm以下にぶい黄褐色粒、灰黄色粒わずか、1mm以下透明光沢粒わずか	
153	壺	口縁部	10 I	II	(12.3)	-	-	横・斜方向ミガキ スス付着	斜方向ミガキ 剥離面多い	にぶい 橙	橙	2mm以下褐色粒、透明光沢粒、褐灰色粒、黒褐色粒、赤褐色粒、灰白色粒少量	
154	壺	口縁部	10 I	II	(15.98)	-	-	調整不明	調整不明	浅黄橙	淡黄	7mm以下橙色粒、3mm以下褐色粒、灰白色粒、2mm以下透明光沢粒、角閃石、褐色粒少量	貼付突帯
155	壺	口縁部	8 D	IV	-	-	-	横・斜方向ハケ	横方向ハケ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下褐色粒多量、3mm以下暗褐色粒	
156	壺	口縁部	9 C	IV	-	-	-	ナデ 風化気味	斜方向工具ナデ 風化気味	浅黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下にぶい褐色粒、にぶい赤褐色粒、灰白色粒、黒色光沢粒わずか	
157	壺	口縁部 ～胴部	9 D	IV	(13.6)	-	-	縦・斜方向ハケ ミガキ 黒斑	斜方向ハケ 指頭痕 黒斑 剥離面多い	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5mm以下にぶい黄褐色粒、2mm以下赤褐色粒、黒色光沢粒、灰白色粒、透明光沢粒、にぶい黄褐色粒、3mm以下黒褐色粒わずか	
158	壺	口縁部 ～胴部	8・9 D	IV	-	-	-	横方向ナデ 縦方向工具痕 縦・斜方向ハケ	横方向ハケ 工具ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	3mm以下灰白色粒、3mm以下にぶい黄褐色粒、2mm以下黒色粒、1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒わずか、灰白色粒わずか	
159	壺	口縁部	12 D	IV	-	-	-	横・斜方向ミガキ	斜方向ハケ 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 橙	3mm以下にぶい褐色粒、2mm以下赤褐色粒、1mm以下透明光沢粒、黒褐粒わずか	
160	壺	口縁部	8 D	IV	-	-	-	斜方向ミガキ 風化気味	ナデ 指頭痕 風化気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下黄褐色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒、灰黄褐色粒わずか	外面 スス付着
161	壺	口縁部 ～頸部	8 D	IV	(11.9)	-	-	横方向ナデ 斜方向ミガキ	横方向ナデ 横・斜方向ミガキ 剥離面多い	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下にぶい黄褐色粒、角閃石、褐灰色粒、透明光沢粒、にぶい褐色粒わずか	文様 櫛描 波状文
162	壺	口縁部	8 D	IV	(12.7)	-	-	横方向ハケ ミガキ?	横方向ハケ 指頭痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下褐色粒、3mm以下褐色粒わずか、2mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒少量	櫛描 波状文
163	壺	口縁部 ～胴部	10 H	II	(12.6)	-	-	ハケ後ミガキ 風化気味	粘土紐 指頭痕 ナデ 風化著しい	橙	にぶい 橙	5mm以下褐色粒多量、3mm以下黒褐色粒少量、5mm以下にぶい黄褐色粒少量、3mm以下灰白色粒、3mm以下透明光沢粒、2mm以下黒色光沢粒わずか	櫛描 波状文
164	壺	頸部 ～胴部	8 D	IV	-	-	-	斜方向ミガキ 風化気味	ナデ? 剥離面多い	にぶい 橙	黄灰	3mm以下黒褐色粒、2mm以下透明光沢粒、黒色光沢粒、灰白色粒、赤褐色粒、にぶい赤褐色粒わずか	
165	壺	底部	8 D	IV	-	(7.4)	-	縦・斜方向工具ナデ	調整不明	にぶい 褐		5mm以下褐色粒、褐色粒、3mm以下灰白色粒、2mm以下透明光沢粒わずか	
166	壺	胴部 ～底部	9 C	IV	-	-	-	斜方向ハケ	斜方向ハケ	にぶい 黄橙	褐灰	3mm以下褐色粒、透明光沢粒、2mm以下灰白色粒、黒色光沢粒、褐灰色粒わずか	内外面 スス付着
167	壺	底部	8 D	IV	-	(6.6)	-	風化著しい ハケ?	風化著しい ハケ?	にぶい 黄橙	灰黄褐	4mm以下褐色粒、3mm以下黒褐色粒少量、2mm以下灰白色粒、1mm以下明褐色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒わずか	外面 スス付着
168	高坏or 鉢	坏部or 胴部	8 D	IV	-	-	-	横・斜方向ミガキ 剥離面多い	横・斜方向ミガキ 剥離面多い	橙	にぶい 橙	3mm以下褐色粒、2mm以下角閃石、黒褐色粒、透明光沢粒、にぶい褐色粒	
169	高坏	脚部 ～裾部	8 D	IV	-	(24.3)	-	斜方向ミガキ 風化気味	横方向ハケ ナデ 指頭痕 風化気味	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下黒色光沢粒、2mm以下褐色粒、透明光沢粒、にぶい褐色粒少量、2mm以下黒褐色粒、褐色粒、灰白色粒わずか	透かし孔
170	鉢	口縁部 ～頸部	8 C・D	IV	-	-	-	工具ナデ後 ミガキ	ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下褐色粒少量、2mm以下透明光沢粒わずか、1mm以下黒褐色粒、1mm以下黒色光沢粒わずか	

第2表 松下遺跡 土器観察表⑥

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
171	鉢	胴部～底部	10 H・I	II	-	5.0	-	斜方向ミガキ	縦・横・斜方向ミガキ	灰白 橙 浅黄橙	7mm以下橙色粒、3mm以下明褐色粒、褐色粒、暗褐色粒、明褐色灰色粒、褐色灰色粒多量、2mm以下透明光沢粒わずか	外面 スス附着	
172	鉢	口縁部	10 I	II	-	-	-	ミガキ 風化著しい	横方向ナデ 縦方向ミガキ	にぶい 黄橙	3mm以下黒褐色粒多量、2mm以下褐色粒、透明光沢粒、灰白色粒わずか、2mm以下黒色光沢粒		
173	鉢	口縁部	10 C	IV	-	-	-	横方向ナデ後 縦方向ミガキ	縦方向ミガキ	にぶい 黄橙	3mm以下にぶい橙色粒、2mm以下黒褐色粒、1mm以下黒色光沢粒わずか		
174	鉢	口縁部	8 D	IV	-	-	-	ミガキ?	横方向ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	5mm以下暗褐色粒少量、3mm以下褐色粒少量、2mm以下褐色灰色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒わずか		
175	鉢	口縁部～胴部	10 H	II	(22.4)	-	-	横方向ハケ 風化著しい	調整不明	にぶい 黄橙	3mm以下角閃石、2mm以下褐色粒少量、1mm以下透明光沢粒、明黄褐色粒、灰白色粒わずか	内外面 スス附着	
176	鉢	口縁部～胴部	8 D	IV	(23.7)	-	-	斜方向ミガキ 風化気味 黒斑	ナデ 風化著しい	灰黄 浅黄橙	2mm以下にぶい褐色粒少量、2mm以下明褐色粒、灰白色粒、褐色灰色粒、褐色粒、黒色光沢粒、黒褐色粒わずか		
177	鉢	口縁部～底部	9 D	IV	(22.2)	-	(9.85)	縦・斜方向ミガキ 風化気味	縦方向ミガキ 風化気味	橙 にぶい 黄橙	4mm以下褐色灰色粒、3mm以下にぶい褐色粒、2mm以下黒褐色粒、2mm以下透明光沢粒、灰白色粒、黒色光沢粒、にぶい赤褐色粒わずか、にぶい褐色粒わずか		
178	ミニチュア鉢	口縁部～底部	9 C	IV	(7.85)	(4.0)	3.4	斜方向工具ナデ ミガキ	ナデ 指頭痕 黒斑	にぶい 黄橙	2mm以下褐色灰色粒、黒褐色粒、黒色光沢粒、褐色粒、にぶい黄褐色粒、灰白色粒わずか	内面黒斑	
179	ミニチュア	口縁部～底部	9 D	IV	4.6	-	3.45	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	5mm以下褐色粒、2mm以下褐色粒少量、3mm以下透明光沢粒、2mm以下黒色光沢粒わずか		
180	ミニチュア	口縁部～底部	9 D	IV	6.2	-	4.7	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい 黄橙	5mm以下褐色粒多量、2mm以下黒褐色粒、褐色灰色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒わずか		
183	甕	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	調整不明	調整不明	浅黄橙 淡黄	3mm以下褐色粒、灰色粒、石英多量、微細な光沢粒わずか		
184	壺	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	横ナデ 斜方向ナデ	斜方向ナデ	にぶい 黄橙	3mm以下赤褐色粒少量、3mm以下黒色粒わずか、2mm以下石英わずか	外面 スス附着	
185	甕	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	横方向工具ナデ	横方向工具ナデ	にぶい 黄橙	5mm以下黒色粒、3mm以下赤褐色粒、2mm以下石英わずか	外面 スス附着	
186	甕	頸部	3・4 O	IV	-	-	-	縦方向工具ナデ 指頭痕	工具ナデ	にぶい 黄橙	5mm以下赤褐色粒、褐色灰色粒、黒色粒、石英多量	刻目貼付 突帯	
187	壺	口縁部	7 N	IV	-	-	-	調整不明	調整不明	浅黄橙 にぶい 黄橙	3mm以下にぶい橙色粒、褐色粒、2mm以下透明光沢粒、褐色灰色粒、黒色光沢粒、灰白色粒、黒褐色粒少量		
188	壺	胴部	3・4 O	IV	-	-	-	丁寧なナデ	縦・横方向工具ナデ 指頭痕 横方向ハケ	浅黄橙 灰	1mm以下灰白色粒、黒褐色粒少量		
189	高坏	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	風化著しい 横方向ナデ?	風化著しい 横方向ナデ?	浅黄橙 にぶい 黄橙	3mm以下灰褐色粒少量、2mm以下褐色粒、透明光沢粒、2mm以下灰白色粒少量、2mm以下黒褐色粒わずか		
190	高坏	坏部	5・6 N	IV	(35.0)	-	-	縦方向ミガキ 横方向ミガキ?	縦・斜方向ミガキ 風化気味	にぶい 黄橙	5mm以下にぶい黄褐色粒、褐色灰色粒、灰白色粒、赤褐色粒、黒褐色粒、透明光沢粒多量		
191	鉢	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	ナデ	風化気味 ナデ	にぶい 黄橙	2mm以下角閃石わずか、1mm以下石英、褐色粒、灰色粒、黒色粒他多量		
192	鉢	口縁部	3・4 O	IV	-	-	-	横・斜方向ミガキ 風化気味	横方向ナデ 風化気味	にぶい 黄橙	2mm以下褐色粒、黒褐色粒少量、2mm以下灰白色粒わずか、1mm以下黒色光沢粒、透明光沢粒わずか		
194		口縁部								にぶい 黄橙			
195	甕	胴部	S E 1	-	-	(6.0)	-	斜方向強いタタキ	横・斜方向ハケ	にぶい 黄橙	石英、礫石わずか、にぶい褐色粒、灰黄褐色粒少量、微細な光沢粒	同一個体	
196		底部								にぶい 黄橙 褐灰			
197	甕	胴部～底部	S E 1	-	-	-	-	縦方向ミガキ 縦方向ハケ	斜方向ハケ後 丁寧なナデ	明赤褐	4mm以下灰白色粒、褐色粒、褐色灰色粒、黒褐色粒、軟質赤色粒多量、微細な光沢粒多量		
198	甕	脚部	S E 1	-	-	(9.0)	-	横方向ナデ 丁寧なナデ ナデ	横方向ナデ 指頭痕	橙	2mm以下石英、2mm以下角閃石わずか、1mm以下黒色粒わずか		
199	広口壺	口縁部	S E 1	-	-	-	-	横方向工具ナデ	工具ナデ後ナデ	灰黄褐 にぶい 黄橙	微細な光沢粒多量、5mm以下軽石、3mm以下赤褐色粒、灰褐色粒、灰白色粒		
200	壺	口縁部	S E 1	-	-	-	-	縦・斜方向ミガキ	縦・斜方向ミガキ	にぶい 黄橙	2mm以下褐色粒、灰色粒、石英、微細な光沢粒		
201	鉢	口縁部	S E 1	-	-	-	-	縦・横方向 工具ナデ	縦・斜方向ミガキ 風化気味	灰白 灰黄	2mm以下石英、黒色粒、灰色粒、赤褐色粒 微細な光沢粒わずか		
202	鉢	口縁部	S E 1	-	-	-	-	横方向ナデ後 斜方向ミガキ 風化気味 黒斑	横方向ナデ後 斜方向ミガキ 風化気味	灰白 灰白	3mm以下褐色粒、3mm以下灰白色粒少量、2mm以下透明光沢粒わずか		
203	鉢	口縁部～胴部	S E 1	-	-	-	-	ナデ 斜・横方向ハケ	ナデ 斜・横方向ハケ	灰黄褐 にぶい 黄橙	2mm以下石英、褐色粒、灰褐色粒、黒色粒、微細な光沢粒少量		
204	鉢	胴部	S E 1	-	-	-	-	縦方向ハケ 風化著しい 黒斑	横方向ナデ 風化著しい	にぶい 黄橙	3mm以下褐色粒少量、2mm以下黒褐色粒わずか、灰白色粒少量、1mm以下透明光沢粒わずか		
205	鉢	脚部	S E 1	-	-	(7.0)	-	縦方向ナデ	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	2mm以下石英、赤褐色粒、黒褐色粒、微細な光沢粒		

第2表 松下遺跡 土器観察表⑦

遺物番号	器種	部位	出土地点	層位	法量			手法・調整ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
206	ミニチュア壺	口縁部～胴部	SE1	-	(4.6)	-	-	斜方向ミガキ	ナデ 指頭痕	橙	にぶい黄橙	3mm以下褐灰色粒、2mm以下にぶい赤褐色粒、にぶい橙色粒、黒色光沢粒、1mm以下透明光沢粒わずか	
207	器台	脚部	SE1	-	(25.0)	-	-	縦方向ミガキ	横方向工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい橙	3mm以下灰白色粒、褐色粒、2mm以下石英、輝石多量	透かし孔
209	甕	口縁部	SE1	-	(13.7)	-	-	横方向ナデ？ 調整不明	横方向ナデ？ 調整不明	明黄褐	にぶい黄橙	3mm以下黒褐色粒、にぶい褐色粒、2mm以下灰白色粒、1mm以下透明光沢粒わずか	
210	鍋	胴部	SE1	-	-	-	-	多方向工具ナデ後 縦・斜方向ミガキ	指ナデ 風化気味	明赤褐	にぶい橙	2mm以下褐色粒、灰白色粒、灰褐色粒、黒褐色粒少量、微細な光沢粒多量	外面 スス付着
211	坏	胴部～底部	SE1	-	-	-	-	回転ナデ 墨書	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下黒褐色粒わずか、微細な光沢粒	外面に墨書
212	坏	胴部～底部	SE1	-	(5.6)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下白色粒わずか、微細な光沢粒	
213	甕	口縁部	8D	IV	(17.8)	-	-	横方向ナデ？ 風化著しい	横方向ナデ？ 横方向ハケ 風化著しい	橙	橙	3mm以下色粒橙、黒色光沢粒、2mm以下灰白色粒、透明光沢粒、褐色粒、褐灰色粒、にぶい褐色粒わずか	
214	甕	口縁部	7N	IV	-	-	-	横方向ナデ	横方向ハケ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	5mm程度灰白色粒、黒褐色粒、灰褐色粒、透明光沢粒、微細な光沢粒	
215	甕	頸部	7N	IV	-	-	-	横方向工具ナデ	横方向ナデ 横方向ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下黒褐色粒、透明光沢粒わずか、微細な透明光沢粒多量	内外面 スス付着
216	甕	胴部～底部	7N	IV	-	-	-	丁寧なナデ	粗いケズリ	明褐	にぶい褐	4mm以下灰色粒わずか、1mm以下石英粒わずか、微細な光沢粒少量	外面 スス付着
217	坏	胴部～底部	7N	IV	(5.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下赤褐色粒わずか、微細な光沢粒わずか	
218	坏	胴部～底部	7N	IV	(6.6)	-	-	回転ナデ 工具痕？	回転ナデ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な光沢粒	
219	坏	胴部～底部	第2次 試掘	-	-	4.65	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下輝石まれに、微細な光沢粒	
220	高台付 壺	底部	7N	IV	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下黒褐色粒、1mm以下灰白色粒、透明光沢粒、橙色粒少量	
221	高台付 壺	底部	7N	IV	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下にぶい黄褐色粒、1mm以下黒色光沢粒わずか、微細な透明光沢粒	
222	須恵器 甕	胴部	5・6 N	IV	-	-	-	格子目タタキ	斜方向工具痕	にぶい赤褐	黄灰	1mm以下石英、黒色粒、白色粒少量	
223	陶器 壺	肩部	SC3	-	-	-	-	回転ナデ 自然釉	ケズリ 回転ナデ	暗褐 オリーブ 黄	褐	精良 焼成：堅緻	備前焼
224	陶磁器 皿	口縁部 ～底部	SE2	-	-	-	-	施釉 回転ナデ	回転ナデ			精良	見込みに蛇 ノ目釉剥ぎ
225	陶磁器 壺	胴部～ 底部	SE2	-	-	3.6	-	施釉		灰白	灰白	精良 焼成：堅緻	
226	陶磁器 蓋		SE2	-	(3.6)	-	-	施釉		にぶい黄褐 にぶい黄褐	にぶい赤褐	1mm以下白色粒少量、微細な光沢粒わずか	
227	陶磁器 蓋		SE2	-	-	-	-	回転ナデ 施釉	回転ナデ	黒褐	暗褐	精良 焼成：堅緻	
228	陶磁器 掃鉢	底部	SE2	-	(8.78)	-	-	回転ナデ 釉施	回転ナデ	黒褐	にぶい黄褐	精良 焼成：堅緻	
229	土師器 皿	胴部～ 底部	9D	IV	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下明褐色粒、黒褐色粒わずか	
230	須恵器 鉢	口縁部	5・6 P	IV	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	黄灰	精良 焼成：堅緻	
231	甕	胴部	9D	IV	-	-	-	ナデ	ナデ	灰褐	黄灰	精良 焼成：堅緻	
232	青磁 壺	胴部	第2次 芋穴	II	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ 灰	灰白	精良 焼成：堅緻	鎗蓮弁文
233	青磁 碗	体部	第2次 一括	IV	-	-	-	施釉貫入	施釉貫入	オリーブ 黄	灰	精良 焼成：堅緻	鎗蓮弁文
234	白磁 碗	底部	9C	IV	(4.8)	-	-	施釉貫入 釉剥ぎ	施釉貫入 露胎	灰白	にぶい黄橙	精良 焼成：堅緻	見込みに蛇 ノ目釉剥ぎ
235	白磁 皿	底部	8D	IV	(6.7)	-	-	施釉 露胎	施釉 砂目	灰白	灰白	精良 焼成：堅緻	見込及び高 台内側に砂 目

第3表 松下遺跡 石器計測表

遺物番号	器種	出土地点	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
5	石鏃	S C 1	-	ガラス質 安山岩	1.21	1.16	0.29	0.41	
20	石庖丁	S A 1	-	頁岩	8.1	4.2	0.7	35.0	
21	軽石製品	S A 1	-	軽石	4.83	3.88	2.53	9.74	岩偶か
22	磨石	S A 1	-	砂岩	12.9	8.9	3.9	719	
23	砥石	S A 1	-	砂岩	21.1	9.2	3.75	1074	床面直上
41	砥石	S A 2	-	砂岩	17.55	7.75	6.05	1403.9	
58	軽石製品	S A 3	-	軽石	10.15	8.3	4.9	127.3	スス付着
90	石庖丁片	S A 4	-	頁岩	3.1	2.5	0.2	1.9	刺孔有(孔径0.7cm)
91	軽石製品	S A 4	-	軽石	9.9	4.9	3.3	39.7	孔径5mm 床面直上
92	軽石製品	S A 4	-	軽石	5.5	3.7	1.45	9.5	孔径約1.1cm 床面直上
93	軽石製品	S A 4	-	軽石	92.5	61.5	19.0	51.0	表裏面に十字の磨痕 床面直上
94	磨敲石	S A 4	-	砂岩	20.97	11.6	6.88	2046.4	
95	角礫片	S A 4	-	安山岩	22	7.3	5.55	1017.3	床面直上
96	角礫片	S A 4	-	安山岩	21.2	10.53	4.5	1081.9	床面直上
97	敲石	S A 4	-	砂岩	18.9	10.5	10.2	2995.2	床面直上
98	敲石	S A 4	-	砂岩	18.5	10	9.3	2375.0	床面直上
99	砥石	S A 4	-	砂岩	13.32	12.93	9.02	2522.5	床面直上
181	石庖丁片	8 B	II	頁岩	2.3	3.23	0.4	3.78	
193	砥石	5 P	IV	頁岩	3.3	3.05	0.4	5.6	
208	石製土掘具	S E 1	-	安山岩	9.79	8.6	1.68	179.6	

第4表 松下遺跡 鉄器計測表

遺物番号	器種	出土地点	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
42	鉈か?	S A 2	-	鉄	3.3	1.0	0.3	2.52	
43	三角鉄片か?	S A 2	-	鉄	2.1	1.4	0.5	1.29	
44	鉄片	S A 2	-	鉄	2.0	1.5	0.3	1.54	
182	鉄片	9 D	IV	鉄	2.5	1.4	2.0	0.79	

## 第IV章 自然科学分析の結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 第1節 はじめに

松下遺跡は、宮崎県都城市志比田町に所在し、横市川左岸の一部に位置する。本遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴建物跡や周溝状遺構、土器や石器などの遺構、遺物が確認されている。

本報告では、竪穴建物跡から検出された炭化材と土器付着炭化物を対象に、年代観や用材選択に関する情報を得るため、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施する。また、遺構内に設定されたベルトより採取された試料を対象に、植物利用に関する情報を得るため、種実同定を実施する。

### 第2節 試料

放射性炭素年代測定に用いる試料は、S A 1 から出土した炭化物2点と、S A 3 から出土した炭化材5点とS A 4 から出土した炭化物2点と土器付着炭化物3点、S A 2 から出土した土器付着炭化物2点、S C 1 より出土した土器付着炭化物1点の、計15点である。各試料の形状、年輪数等の観察結果と、測定試料採取状況等を第5表に示す。

樹種同定に用いる試料は、S A 3 から出土した炭化材14点である。試料の詳細は、結果と併せて表に示す。

種実同定に用いる試料は、S L 1 のSベルトより1点、S L 1 のNベルトより3点(①～③)、Eベルトより3点(①～③)、S C 1 の中央床直より3点(①～③)の、計10点である。試料は、全て乾燥した状態で容器に入っている。試料の詳細は、結果と併せて表に示す。

第5表 放射性炭素年代測定試料観察結果

遺構名	試料名	状態	形状	樹皮	年輪数	種類	測定試料	重量	備考
S A 1	S A 1 炭化物A	炭化材	破片	—	—	タケ亜科	全量	0.20 g	
S A 1	S A 1 炭化物B	炭化材	破片	無	2-3年	クスノキ科	全量	1.40 g	
S A 3	S A 3 炭化材1	炭化材	ミカン割状	無	21年	ミツバウツギ	外10年	0.60 g	
S A 3	S A 3 炭化材13	炭化材	柎目状	無	3-4年	コナラ節	全量	0.09 g	
S A 3	S A 3 炭化材15	炭化材	板目状	無	6年	クスノキ科	全量	0.36 g	
S A 3	S A 3 炭化材16	炭化材	ミカン割状	無	3年	アカガシ亜属	全量	0.29 g	
S A 3	S A 3 炭化材12	炭化材	節部分の破片	無	5-6年	カエデ属	全量	0.71 g	

### 第3節 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れをメス、ピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸処理:AAA)。なお、通常は水酸化ナトリウム水溶液の濃度を上げていき、最終的に1M溶液で処理を実施するが、試料が脆弱で必要な炭素を得られなくなる可能性がある場合、水酸化ナトリウム溶液の濃度が薄い段階で処理を停止する。濃度が1Mに達したと時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と記載する。その後、試料を燃焼させてCO<sub>2</sub>を発生させる。

真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO<sub>2</sub>を精製する。これを鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、測定試

料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置（NEC社製）を用いて、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）、 $^{14}\text{C}$ 濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料、バックグラウンド試料の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach, 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアはOxcal4.3 (Bronk, 2009)、較正曲線はIntcal13 (Reimer *et al.*, 2013) を用いる。

## （2）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

## （3）種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。結果は一覧表で示す。炭化種実以外の分析残渣は、確認される種類を一覧表に併記する。分析後は、分析残渣を容器に戻して返却する。

# 第4節 結果

## （1）放射性炭素年代測定

結果を第6表、第55図に示す。試料番号No.1～No.9までの炭化材は定法での処理が可能であった。土器付着炭化物のうち、No.10、No.11、No.14、No.15の4点はアルカリの濃度を薄くして処理を行った。No.12、No.13の2点は、付着炭化物が薄く、炭化物が少ない。そのためAAA処理を行っていない。No.12、No.13を除く13点は、年代測定に必要な炭素量が回収できた。No.12、No.13はやや少なかったため、全量を測定に用いている（通常はバックアップとして一部グラフィットを残す）。

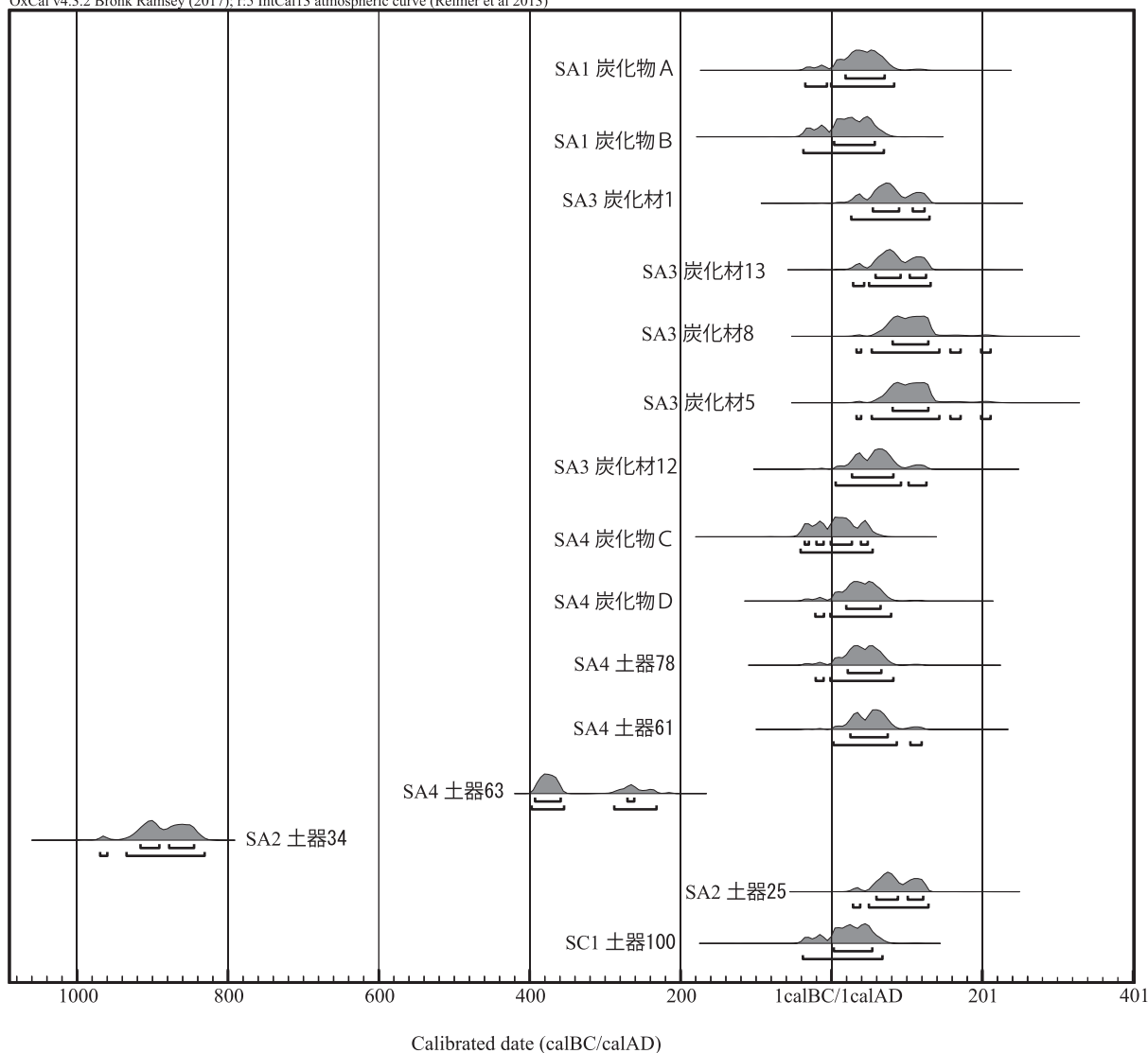
測定年代（補正年代）は、S A 1 炭化物 A（No.1）が $1960 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 1 炭化物 B（No.2）が $1980 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 3 炭化材 1（No.3）が $1930 \pm 20\text{yrBP}$ 、炭化材13（No.4）が $1920 \pm 20\text{yrBP}$ 、炭化材15（No.5）が $1900 \pm 20\text{yrBP}$ 、炭化材16（No.6）が $1900 \pm 20\text{yrBP}$ 、炭化材12（No.7）が $1950 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 4 炭化物 C（No.8）が $1990 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 4 炭化物 D（No.9）が $1965 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 4 土器78（No.10）が $1960 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 4 土器61（No.11）が $1950 \pm 20\text{yrBP}$ 、S A 4 土器63（No.12）が $2270 \pm 20\text{yrBP}$ 、S

第6表 放射性炭素年代測定結果

番号	試料名	性状	分析方法	補正年代 (暦年較正用) yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							Code No				
						年代値								確率			
						$\sigma$	cal AD	17	—	cal AD	68	1933			—	1882	calBP
No1	SA1 炭化物A	炭化材 タケ垂科	AAA	1960±20 (1964±23)	-27.44 ± 0.42	$\sigma$	cal BC	38	—	cal BC	9	1987	—	1958	calBP	68.2	IAAA- 180143
						$2\sigma$	cal BC	4	—	cal AD	81	1953	—	1869	calBP		
No2	SA1 炭化物B	炭化材 クスノキ科	AaA	1980±20 (1981±22)	-27.51 ± 0.24	$\sigma$	cal AD	2	—	cal AD	55	1948	—	1895	calBP	68.2	IAAA- 180144
						$2\sigma$	cal BC	40	—	cal AD	67	1989	—	1883	calBP		
No3	SA 炭化材1	炭化材 ミツバウツギ	AAA	1930±20 (1929±23)	-30.41 ± 0.36	$\sigma$	cal AD	53	—	cal AD	87	1897	—	1863	calBP	53.0	IAAA- 180145
						$2\sigma$	cal AD	105	—	cal AD	121	1845	—	1829	calBP		
No4	SA3 炭化材13	炭化材 コナラ節	AaA	1920±20 (1923±22)	-28.49 ± 0.44	$\sigma$	cal AD	24	—	cal AD	127	1926	—	1823	calBP	45.7	IAAA- 180146
						$2\sigma$	cal AD	56	—	cal AD	89	1894	—	1861	calBP		
No5	SA3 炭化材15	炭化材 クスノキ科	AAA	1900±20 (1901±23)	-29.11 ± 0.31	$\sigma$	cal AD	101	—	cal AD	123	1849	—	1827	calBP	6.3	IAAA- 180147
						$2\sigma$	cal AD	27	—	cal AD	41	1923	—	1909	calBP		
No6	SA3 炭化材16	炭化材 アカガシ垂属	AAA	1900±20 (1901±23)	-30.21 ± 0.40	$\sigma$	cal AD	48	—	cal AD	129	1902	—	1821	calBP	68.2	IAAA- 180148
						$2\sigma$	cal AD	79	—	cal AD	126	1871	—	1824	calBP		
No7	SA3 炭化材12	炭化材 カエデ属	AaA	1950±20 (1945±22)	-28.34 ± 0.27	$\sigma$	cal AD	51	—	cal AD	140	1899	—	1810	calBP	92.4	IAAA- 180149
						$2\sigma$	cal AD	31	—	cal AD	37	1919	—	1913	calBP		
No8	SA4 炭化物C	炭化材 カエデ属	AAA (1M)	1990±20 (1992±20)	-24.99 ± 0.41	$\sigma$	cal AD	195	—	cal AD	208	1755	—	1742	calBP	1.2	YU- 9778
						$2\sigma$	cal AD	79	—	cal AD	126	1871	—	1824	calBP		
No9	SA4 炭化物D	炭化材 カエデ属	AAA (1M)	1965±20 (1964±20)	-27.45 ± 0.44	$\sigma$	cal AD	42	—	cal AD	55	1991	—	1895	calBP	68.2	YU- 9779
						$2\sigma$	cal AD	25	—	cal AD	80	1925	—	1870	calBP		
No10	SA4 土器78	土器付着 炭化物	AaA (0.05M)	1960±20 (1961±20)	-23.96 ± 0.45	$\sigma$	cal AD	100	—	cal AD	123	1850	—	1827	calBP	7.9	YU- 9780
						$2\sigma$	cal BC	36	—	cal BC	31	1985	—	1980	calBP		
No11	SA4 土器61	土器付着 炭化物	AAA (1M)	1990±20 (1992±20)	-24.99 ± 0.41	$\sigma$	cal AD	51	—	cal AD	140	1899	—	1810	calBP	92.4	YU- 9781
						$2\sigma$	cal AD	155	—	cal AD	168	1795	—	1782	calBP		
No12	SA4 土器63	土器付着 炭化物	無処理	2270±20 (2272±21)	-24.10 ± 0.59	$\sigma$	cal AD	195	—	cal AD	208	1755	—	1742	calBP	1.2	YU- 9782
						$2\sigma$	cal AD	79	—	cal AD	126	1871	—	1824	calBP		
No13	SA2 土器34	土器付着 炭化物	無処理	2750±20 (2752±21)	-22.92 ± 0.43	$\sigma$	cal AD	22	—	cal BC	11	1971	—	1960	calBP	2.9	YU- 9783
						$2\sigma$	cal BC	2	—	cal AD	80	1951	—	1871	calBP		
No14	SA4 土器25	土器付着 炭化物	AaA (0.01M)	1920±20 (1920±20)	-21.39 ± 0.59	$\sigma$	cal AD	22	—	cal AD	67	1928	—	1884	calBP	68.2	YU- 9784
						$2\sigma$	cal BC	22	—	cal BC	11	1971	—	1960	calBP		
No15	SC1 土器100	土器付着 炭化物	AaA (0.05M)	1980±20 (1978±20)	-28.67 ± 0.44	$\sigma$	cal BC	2	—	cal AD	83	1951	—	1868	calBP	93.3	YU- 9785
						$2\sigma$	cal AD	26	—	cal AD	75	1925	—	1875	calBP		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。
- 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である。





第55図 暦年較正結果

A 2 土器**34** (No.13) が $2750 \pm 20$ yrBP、S A 2 土器**25** (No.14) が $1920 \pm 20$ yrBP、S C 1 土器**100** (No.15) が $1980 \pm 20$ yrBPである。

暦年較正は、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差  $2\sigma$  の暦年代は、S A 1 炭化物 A (No. 1) がcalBC38~calAD81、S A 1 炭化物 B (No. 2) がcalBC40~calAD67、S A 3 炭化材 1 (No. 3) がcalAD24~127、炭化材13 (No. 4) がcalAD27~129、炭化材15 (No. 5) がcalAD31~208、炭化材16 (No. 6) がcalAD31~208、炭化材12 (No. 7) がcalAD 4 ~123、S A 4 炭化物 C (No. 8) がcalBC42~calAD55、炭化物 D (No. 9) がcalBC22~calAD80、土器**78** (No.10) がcalBC22~calAD83、土器**61** (No.11) がcalAD 3 ~120、土器**63** (No.12) がcalBC398~233、S A 2 の土器**34** (No.13) がcalBC970~832、土器**25** (No.14) がcalAD29~129、S C 1 土器**100** (No.15) がcalBC39~calAD68である。No.12とNo.13を除く13試料は1世紀前半を中心としており、年代値が類似する。No.12とNo.13はこれらよりやや古い。

## (2) 樹種同定

第7表 樹種同定結果

結果を第7表に示す。炭化材は、広葉樹10分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ科、モッコク、サカキ、カエデ属、ムクロジ、モチノキ属、ミツバウツギ、エゴノキ属）に同定された。なお、炭化材8は、微細な広葉樹の微

遺構名	試料名	形状	種類	備考
SA3	炭化材1	ミカン割状	ミツバウツギ	
SA3	炭化材2	芯持材	エゴノキ属	
SA3	炭化材3	半裁状	コナラ属アカガシ亜属	
SA3	炭化材4	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
SA3	炭化材5	破片	サカキ	
SA3	炭化材6	芯持材	ムクロジ	
SA3	炭化材7	—	炭質物	広葉樹の微細片含む
SA3	炭化材8	半裁状	クスノキ科	
SA3	炭化材9	破片	ムクロジ	
SA3	炭化材10	ミカン割状	モチノキ属	
SA3	炭化材11	芯持材	コナラ属アカガシ亜属	
SA3	炭化材12	節部分の破片	カエデ属	
SA3	炭化材13	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
SA3	炭化材14	ミカン割状	モッコク	

細片を含む炭質物が塊状に固結したものである。微細片の広葉樹については、微小で観察範囲が狭いため種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

### ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

### ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

### ・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

### ・モッコク (*Ternstroemia gymnanthera* (Wright et Arn.) Bedd.) ツバキ科モッコク属

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-80細胞高。

### ・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2-3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1-20細胞高。

### ・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

### ・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帯状およびターミナ

ル状。

・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、道管は単独または2-6個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・ミツバウツギ (*Staphylea bumalda* (Thunb.) DC) ミツバウツギ科ミツバウツギ属

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状~対列状に配列する。放射組織は、異性、単列で1-20細胞高前後の組織と、5-10細胞幅、20-60細胞高の組織とがある。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

### (3) 種実同定

種実同定結果を第8表に示す。分析に供された10試料からは、同定が可能な炭化種実が確認されなかった。SC1の中央床直①より、長さ2.66mm、幅1.80mm、厚さ1.64mmを測る炭化物が1個確認されたが、分類群、部位ともに不明であった。分析残渣は、炭化材、菌核、岩片、土粒、虫類などが確認された。

第8表 種実同定結果

遺構名	試料名	同定結果	種実以外
SL1	Sベルト	炭化種実確認されず	炭化材、菌核、岩片、土粒
SL1	Nベルト①	炭化種実確認されず	炭化材、土粒
SL1	Nベルト②	炭化種実確認されず	炭化材、菌核、岩片、土粒
SL1	Nベルト③	炭化種実確認されず	菌核、土粒
SL1	Eベルト①	炭化種実確認されず	炭化材、岩片、土粒
SL1	Eベルト②	炭化種実確認されず	炭化材、岩片、土粒
SL1	Eベルト③	炭化種実確認されず	炭化材、土粒
SC1	中央床直①	炭化種実確認されず	不明炭化物(長さ2.66、幅1.80、厚さ1.64mm)、炭化材
SC1	中央床直②	炭化種実確認されず	炭化材、岩片、土粒
SC1	中央床直③	炭化種実確認されず	炭化材、岩片、土粒、虫類

## 第5節 考察

竪穴建物跡の放射性炭素年代測定結果を見ると、SA1より出土した炭化材2点はほぼ同時期を示し、補正年代で1,980~1,960yrBP、暦年代でcalBC40~calAD81の値を示した。この年代値は、弥生時代中期末~後期に相当する。一方、SA3より出土した炭化材5点(No.3~No.7)も同時期を示し、補正年代で1,950~1,900yrBP、暦年代でcalAD4~208の値を示した。この年代値は、弥生時代後期に相当する。SA4より出土した炭化物(No.8、9)と土器付着炭化物(No.10、No.11)は補正年代で1,990~1,950yrBP、暦年代でcalBC42~calAD120の値を示した。この年代値は、弥生時代中期末~後期に相当する。SA2の土器付着炭化物(No.14)は補正年代で1,920yrBP、暦年代でcalAD29~129で弥生時代後期に相当する。SC1(No.15)は補正年代で1,980yrBP、暦年代でcalBC39~calAD68で弥生時代後期に相当する。

発掘調査所見では、竪穴建物や土器が弥生時代終末期~古墳時代前期前半と想定されており、測定結果はそれより古い年代が得られている。測定値を詳細に見ると、SA1、SA4、SC1の3基の竪穴

建物および土坑と S A 3、S A 2 の 2 基の竪穴建物で測定値に若干のズレが有ることから、建物が埋没する過程で時期差があった可能性もあるが、判断しかねる程度であり、今後のさらなる調査が望まれる。

No.12とNo.13はこれらよりやや古いが、これは土器に付着した炭化物が薄く、素地に含まれていた炭素の影響を受けている可能性がある。

次に炭化材の樹種についてみる。S A 3 の炭化材は、建物の壁際を中心に出土しており、一部中央付近の床面上にも認められる。壁際の炭化材は、軸方向が建物の中心部を中心とした放射状や、壁に対して平行な状態で出土しており、垂木などの建築部材に由来すると考えられる。これらの炭化材には合計 10種類が認められた。また、樹種同定の対象になっていなかった炭化材 15、16、と S A 4 の炭化物 C、D についても同定を実施した。S A 3 の炭化物 15、16 はクスノキ科とアカガシ亜属で、S A 4 の 2 点はカエデ属あることを確認した。

各種類の材質についてみると、常緑広葉樹のアカガシ亜属、モッコク、サカキ、モチノキ属、落葉広葉樹のコナラ節、カエデ属、ムクロジ、エゴノキ属は、比較的重硬で強度が高い。クスノキ科は常緑広葉樹と落葉広葉樹があり、材質はやや重硬なものから比較的軽軟なものまで幅がある。ミツバウツギは、小径木で利用されることが少なく、材質に関する資料がほとんど無いため、詳細は不明である。

材質の面からみると、炭化材には比較的重硬な材質の種類が多く、建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。S A 3 の建築部材は、アカガシ亜属、コナラ節、クスノキ科が複数点確認されているが、点数に対して種類数が多く、雑多な種類構成となることが特徴といえる。また、確認された種類から、遺跡周辺には、アカガシ亜属、サカキ、モチノキ属などの常緑広葉樹、コナラ節、エゴノキ属などの落葉広葉樹が生育していたことが推定される。

なお、種実同定試料からは、炭化種子が全く検出されなかった。よって、当時の周辺植生や植物利用について検討は困難である。

## 引用文献

Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 51, 337-360.

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P.

M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg,

A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards,

D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht,

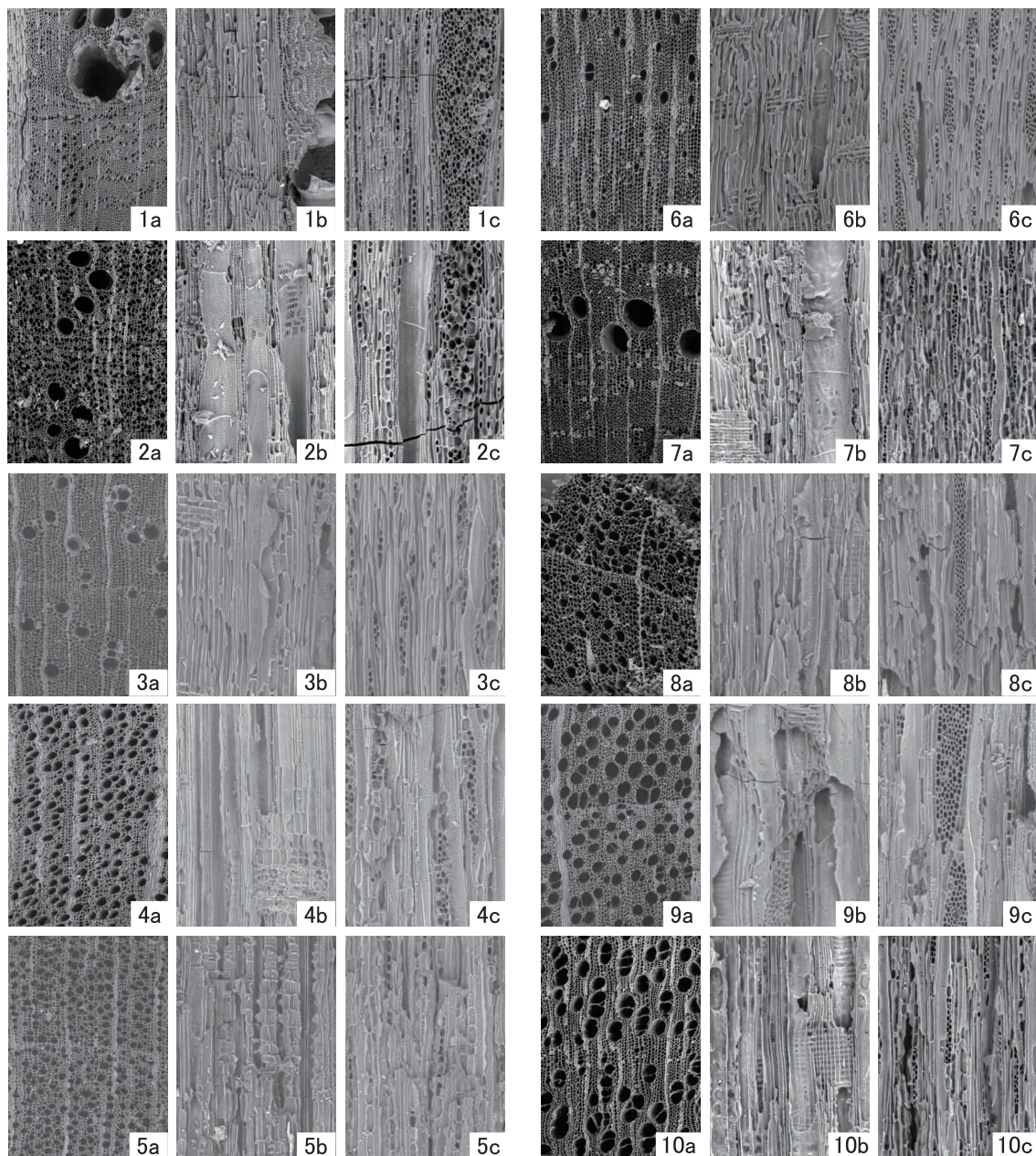
J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP.

*Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data, Radiocarbon, 19, 355-363.

Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



- 1.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SA3;⑮)
- 2.コナラ属アカガシ亜属(SA3;⑬)
- 3.クスノキ科(SA3;⑨)
- a:木口,b:柁目,c:板目
- 4.モッコク(SA3;⑯)

- 5.サカキ(SA3;⑥)
- 6.カエデ属(SA3;⑭)
- a:木口,b:柁目,c:板目
- 7.ムクロジ(SA3;⑦)
- 8.モチノキ属(SA3;⑫)

- 9.ミツバウツギ(SA3;①)
- a:木口,b:柁目,c:板目
- 10.エゴノキ属(SA3;③)
- a:木口,b:柁目,c:板目

■ 100 μ m:a  
 ■ 100 μ m:b,c

写真 1 3号竪穴建物出土の炭化材

## 第V章 総括

松下遺跡は、標高約146～148mの横市川左岸の高位の河岸段丘面に位置する。本調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期前半を中心に、縄文時代晩期～近世まで幅広い遺構・遺物を確認した。本章では、地域の様相を踏まえつつ、本遺跡の各時期の様相について概観する。

### 第1節 弥生時代～古墳時代の様相

本調査で確認した当該期の遺構と遺物は、弥生時代中期後半と弥生時代終末期～古墳時代前期前半の2時期を主体とする。弥生時代中期後半の明確な遺構は検出できなかったが、第2次調査区最南東部で当該期の土器集中区を検出した。すぐ東側には、土器集中区に続く自然流路と考えられる3条の浅い溝状遺構が検出され、明確な平面形や掘り込みを確認できなかったことから、自然流路内の窪みに溜まった土器の集中と考えられるが、簡易的に掘られた廃棄土坑の可能性もあると思われる。

集落としての様相が明確になってくるのは弥生時代終末期になってからであり、点在する竪穴建物で構成される集落が形成される。第1次調査では、竪穴建物跡3軒、周溝状遺構1基、土坑1基、第2次調査では、竪穴建物跡1軒を検出した。検出した竪穴建物の時期をみると、SA1が弥生時代終末期に、建て替え後のSA2とSA3及びSA4が古墳時代前期前半であると考えられる。なお、第1次調査の包含層出土土器を見ても、弥生時代終末期よりも古くならないことを考えると、建て替え以前のSA2とSA3も同時期から連続するとしても差し支えないだろう。

先にも言及したが、調査範囲内でみると、竪穴建物は点在する様子が伺え、最も近接するSA2とSA3でも約30m離れている。周辺の当該期の遺跡をみると、横市川から見て左岸の低位に所在する今房遺跡では、竪穴建物跡は21軒検出されており、松下遺跡対岸の低位の河岸段丘面に所在する平田遺跡でも、時期の幅はあるが、竪穴建物跡41軒が検出されている。一方、月野原台地北端に所在する大久保第2遺跡では竪穴建物は4軒、周溝状遺構1条が検出されるのみであり、本遺跡と様相が似ている。これらのことに加えて、横市川から見て高位の河岸段丘面に弥生時代後期以前の竪穴建物跡がほとんど検出されていないことから、横市川沿いに形成された集落は兩岸の低位～中位の河岸段丘面に中心的な集落が展開し、時期が下がるにつれて、横市川から見て高位の河岸段丘面や台地上に、小規模な集落が点在するように形成されていったと考える。今後の調査によって、当該期の集落の様相がさらに明らかになっていくことを期待したい。

なお、今回の検出した竪穴建物のうち、特筆すべきは焼失住居と考えられるSA3で、床面上から炭化材が数多く確認された。出土状況から、それらは建物の部材で、樹種同定（第IV章参照）によって、カシやコナラ、サカキ、カエデ等、多くの種類が同定された。多種類の木材が利用されている背景として、近隣に、常緑広葉樹からなる照葉樹林のような森林がなく、雑木林程度の林が存在していたと考えられる。また、出土遺物も少なく、ほとんどが細片であることから建物を廃絶させる際に意図的に燃やしたのではないかと考える。さらに、SA3では、周囲を巡る周堤と考えられる高まりが確認できた。管見では、県内において当該期の周堤そのものの類例はないことから、事例の増加も含めて今後の調査に期待したい。

SA4は平面形状が凸状を呈するが、第1床面とした貼床面の下にも、同じ凸状をした二回り程小

掘り込みを確認し、この下部に第2床面が存在したが、ここでは柱穴や貼床、土器等の生活が営まれた形跡は検出できなかった。現段階でどのような意図をもってこのような建物構造をとっていたのか不明であるが、こちらについても類例の増加を待ちたい。出土した土器にも注目したい。胴部中央に「U」字形の線刻が刻まれている完形の壺79は、北側の壁際の床面に横倒しになった状態で出土したことから、建物廃絶させる際に置かれたとも考えられる。使用用途は分からないが、瀬戸内系の長頸装飾壺の胴部78には、肩部の突帯を境に下部に火を受けた痕跡が残る。また、県北部平野部で出土例の多い、外面に強いタタキが施されている甕81（SE1出土194～196も同一か）も出土し特筆される。

SA1の東に近接するSL1は、SA1と同時期に存在していたと推測する。北西部からは破碎された壺が、まとめるように置かれた状態で出土した。対岸の平田遺跡では、周溝状遺構から炭化米が大量に出土したことで注目を浴びた。本遺構においても、埋土のサンプリングを行い、種子同定（第IV章参照）を行ったが、検出には至らなかった。SL1の性格は判断しきれないが、飛躍的に推測するならば、人為的に破碎され、置かれた壺には意図的なものを感じられることから、祭祀的行事を行う施設であったと考えられよう。

SA3に近接するSC1では、人の出入りを思わせるステップや底面の硬化が確認された。深さも約1.0mあり、簡易的な土坑にしては深い。自然科学分析による種実同定を行ったが検出には至らず、出土した土器も少なかったため、SC1の性格を判断することは難しいが、SA3を焼失させていることから考えると、道具や食糧等を持ち出したと考えるのが自然である。SA3に近接していることや、先述したSC1の形状や人の出入りの可能性を感じさせる痕跡から貯蔵穴と考えておきたい。

また、今回、堅穴建物出土の炭化材及び土器付着炭化物などを対象に放射性炭素年代測定分析を実施した（第IV章参照）。分析した土器の年代観や堅穴建物の存続時期について、近年の土器編年（河野2017、近沢2016）を勘案しながら示すと、弥生時代終末期～古墳時代前期前半に収まるものと考えられる。年代測定の分析結果としては、堅穴建物出土の炭化木材と土器付着炭化物ともに一部を除いて暦年代で概ねcalBC50～calAD200前後にあり、土器の年代観から見ると古い測定値が得られている。今回の分析では、土器付着炭化物以外にも、堅穴建物出土の炭化材も分析対象としており、それぞれの建物毎では比較的まとまった測定値が示されている。加覧淳一氏は土角遺跡出土の「後期後葉～終末期の土器」の年代測定分析の結果を受けて、「現行土器編年による相対年代よりも古い数値が得られて」おり、「当該時期における放射性炭素年代の暦年較正年代決定については、未だ議論の余地があるとはいえ、（中略）データの蓄積も待ちながら、改めて検討する必要がある。」（加覧2019）と指摘しているように、分析結果と現行土器編年による相対年代との齟齬について今後も注視していく必要がある。

## 第2節 古代の様相

古代の遺構は、第2次調査区を横断する溝状遺構だけであった。SE1の埋土には桜島文明降下軽石が含まれず、桜島文明降下軽石層（第III層）がSE1をバックするように堆積していたことから、SE1の時期は桜島文明降下以前、つまり15世紀後半以前であったと推定した。出土遺物は流れ込みである弥生時代～古墳時代のものが多かったが、山下大輔氏の分類（山下2014）によるIV期（9世紀末から10世紀初頭）に該当する古代の土師器等が出土したことから、SE1もほぼ同時に属すると考えるに至った。検出長40m以上で、断面形状は逆台形状を呈し、深さも検出面から最大1.9mであることから、防御

としての機能も十分に考えられる。また、S E 1の両側で確認できた霧島御池降下軽石を含んだ層（22層）は、土塁の痕跡であった可能性も残しておきたい。

周辺の遺跡では、鶴喰遺跡、今房遺跡、江内谷遺跡、馬渡遺跡、加治屋B遺跡等から9～11世紀に属する溝状遺構が検出されている。中でも馬渡遺跡では6条の溝状遺構が検出され、そのうちの一つは一直線に伸び、検出長約50mを測る。断面形状は本遺跡のS E 1と同じ逆台形状を呈し、深さは最大0.8m程である。近くに掘立柱建物跡を多数検出していることから、この溝を居住の区画溝と想定している。また、加治屋B遺跡でも古代～中世における溝状遺構が多数検出されており、6条が古代のもので、断面形状は塊形を呈し、深さは約0.3mである。さらに中世では、館跡の周囲を巡る東西140m、南北140mの溝状遺構が検出され、13～14世紀において大規模な館が築かれていたとされている。この溝状遺構は、断面形状は「U」字状あるいは逆台形状を呈し、深さは最大で1.6mを測る。さらに、掘り直しの可能性も指摘されている。これらの周辺遺跡の様相から鑑みると、本遺跡のS E 1は加治屋B遺跡の館を巡る溝状遺構の様相に近いが、S E 1出土の遺物には中世のものがなく、層位的な状況も含めて、やはりここでは古代の溝状遺構と考えておく。近年では、都城市郡元町所在の郡元西原遺跡において、島津荘の現地経営拠点の一部である可能性が指摘されている、大きく深い区画溝の検出例もあることから、古代の溝状遺構は今後も注目する必要がある。

### 第3節 中世～近世の様相

平面的に検出できたのは第2次調査区北半だけであるが、15世紀後半に降下した桜島文明降下軽石で埋まる畠畝間を検出した。北側の第1次調査区でも断面で確認できる同様の溝群が確認できることから、本遺跡周辺は耕作地帯であったと考える。また、平田遺跡や加治屋B遺跡、鶴喰遺跡等、当該期の周辺遺跡においても同じ様相が認められることから、横市川流域一帯に耕作地帯の様相が広がっていたと言える。また、本遺跡では水田跡は検出されなかったが、中世～近世における水田跡は、今房遺跡や平田遺跡、肱穴遺跡等において検出されている。注目すべきは平田遺跡D地点・E地点で、横市川に近い氾濫原に位置するD地点では畠跡と水田跡が検出されているが、そこから約7m程高い、横市川から見て低位の河岸段丘面に位置するE地点では、畠跡のみが検出されている。水田経営において、常時水が必要なことは言うまでもないが、堆積土壌の質も重要である。そのことから鑑みると、横市川流域の氾濫原や低位の河岸段丘面においては、稲作に適した環境が整っており、畠に加えて水田も広がっていたことが考えられ、本遺跡のような高位の河岸段丘面や台地上においては、水田経営よりも畑作が中心となっていたのであろう。

近世では、第2次調査区で溝状遺構1条を検出した。南北に一直線に伸び、90度屈曲しながら西へ続く。対象とするものは今回の調査では分からなかったが、何らかの区画溝と考える。

#### 【参考・引用文献】

岡山県備前市教育委員会 2013 『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告第11集

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2018 『山ノ口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（195）

加覧淳一 2014 「都城盆地における弥生時代中期から後期前葉の土器様相」『新田栄治先生退職記念論文集 Archeology from the South II』新田栄治先生退職記念事業会



- 加覧淳一 2019 「第5章総括 出土遺物について」『土角遺跡』都城市文化財調査報告書第136集 都城市教育委員会
- 河野裕次 2013 「南部九州における弥生時代中期土器様式圏の動態」『古文化談叢』69 九州古文化研究会
- 河野裕次 2017 「宮崎県の様相—宮崎平野南部を中心に—」『九州島における古式土師器』九州古文化研究会
- 近沢恒典 2016 「都城盆地における古墳時代の土器について」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ（発表資料）』  
宮崎考古学会
- 坪根伸也・佐藤良子 2010 「第Ⅲ章第2節（3）弥生時代前期から中期の遺物」『下郡遺跡群Ⅶ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書100 大分市教育委員会
- 堀田孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について」『宮崎考古』23 宮崎考古学会
- 正岡睦夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編一』株式会社木耳社
- 都城市史編さん委員会 1997 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市
- 都城市史編さん委員会 2005 『都城市史 通史編 中世・近世』都城市
- 都城市史編さん委員会 2006 『都城市史 資料編 考古』都城市
- 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』都城市文化財調査報告書第5集
- 都城市教育委員会 1993 『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第25集
- 都城市教育委員会 1998 a 『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第38集
- 都城市教育委員会 1998 b 『鶴喰遺跡』都城市文化財調査報告書第44集
- 都城市教育委員会 1999 a 『肱穴遺跡』都城市文化財調査報告書第47集
- 都城市教育委員会 1999 b 『大久保第2遺跡』都城市文化財調査報告書第48集
- 都城市教育委員会 2000 『横市地区遺跡群 肱穴遺跡（1）・今房遺跡・馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第50集
- 都城市教育委員会 2001 『横市地区遺跡群 馬渡遺跡（第2次調査）・坂元A遺跡』都城市文化財調査報告書第55集
- 都城市教育委員会 2004 a 『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第61集
- 都城市教育委員会 2004 b 『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
- 都城市教育委員会 2004 c 『今房遺跡（第2次調査）』都城市文化財調査報告書第64集
- 都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡 坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集
- 都城市教育委員会 2007 a 『鶴喰遺跡（中世編）』都城市文化財調査報告書第79集
- 都城市教育委員会 2007 b 『今房遺跡』都城市文化財調査報告書第80集
- 都城市教育委員会 2007 c 『加治屋B遺跡（縄文時代・弥生時代編）』都城市文化財調査報告書第81集
- 都城市教育委員会 2008 a 『肱穴遺跡（2）』都城市文化財調査報告書第85集
- 都城市教育委員会 2008 b 『加治屋B遺跡（平安時代～近世編）』都城市文化財調査報告書第86集
- 都城市教育委員会 2008 c 『横市地区遺跡群 平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集
- 都城市教育委員会 2018 『郡元西原遺跡（第2次調査）』都城市文化財調査報告書第134集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 a 『上牧第2遺跡・母智丘第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 b 『牧ノ原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『平田遺跡D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2019 『平田遺跡F地点・G地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第247集
- 宮崎市教育委員会 1987 『源藤遺跡』宮崎市文化財調査報告書
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 森田稔 1995 「8. 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山下大輔 2014 「第5章 第1節 出土遺物の様相」『真米田遺跡・七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第111集



図版  
1

都城道路  
路線上での  
位置関係

←金御岳

←平田遺跡

←横市川

←松下遺跡  
2次調査区

←松下遺跡  
1次調査区



松下遺跡から南を望む（北から）



調査区遠景（南から）



調査区全体合成写真（左が北）



第1次調査区（上が北）



第1次調査区西側土層断面（南から）



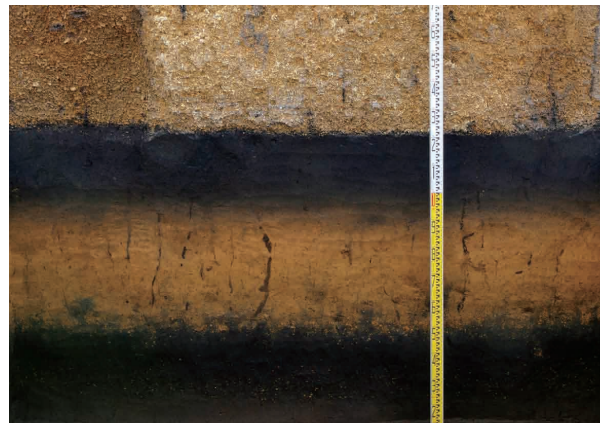
第1次調査区東側土層断面（北から）



第2次調査区（上が北）



第2次調査区東側土層断面（北から）



第2次調査区南側下層堆積状況（北から）



SA 1 床面状況① (東から)



SA 1 土層堆積状況 (東から)



SA 1 完掘状況 (東から)



SA 1 拡張床面出土土器



SA 1 中央土坑付近土層堆積状況 (東から)



S A 2 建て替え前床面状況① (上が北)



S A 2 土層堆積状況 (南から)



S A 2 建て替え前床面状況② (南から)



S A 2 完掘状況 (南から)



SA3全景 (南東から)



SA3床面状況 (南東から)



SA3完掘状況 (南東から)



SA3、SC1全景 (上が北)



SA3土層堆積状況 (南東から)





S A 3 南側周堤堆積状況 (東から)



S A 3 北東隅出土炭化材



S A 3 出土炭化材14



S C 1 床面状況 (南西から)



S C 1 土層堆積状況 (南西から)



S C 1 北肩部出土土器 (南から)



S C 1 底面出土土器 (北から)



S A 4床面状況（上が北）



S A 4 第一床面遺物出土状況（北から）



S A 4 第二床面完掘状況（北から）



S A 4 土層堆積状況（北から）



S A 4 貼床下土層堆積状況（北から）



S L 1 完掘状況 (北西から)



S L 1 東ベルト土層堆積状況 (北から)



S L 1 出土遺物状況 (北から)



S C 2 遺物出土状況 (西から)



1号土器集中区及び溝状遺構状況 (南から)



SE1 完掘状況（西から）



SE 1 土層B-B' 堆積状況 (東から)



SE 1 土層F-F' 堆積状況 (西から)



SE 1 土層A-A' 底面堆積状況 (東から)



SC 3 遺物出土状況 (西から)



小溝状遺構群完掘状況 (北東隅から)



縄文時代の遺物



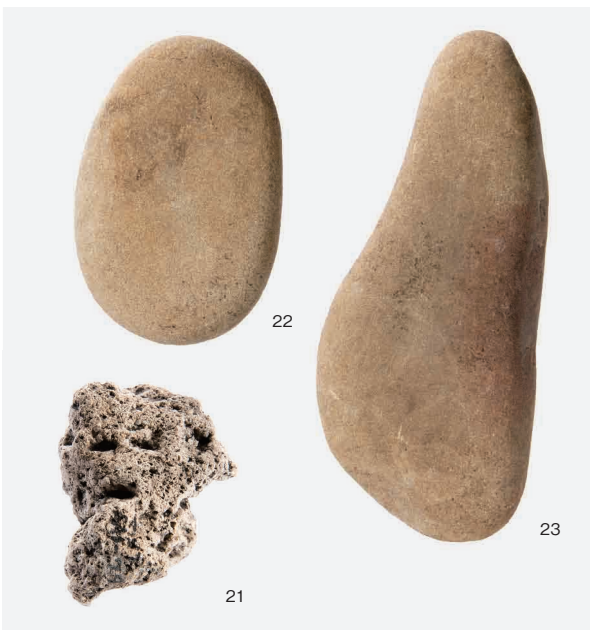
14



SA1出土遺物



9



15



24



27



29



30



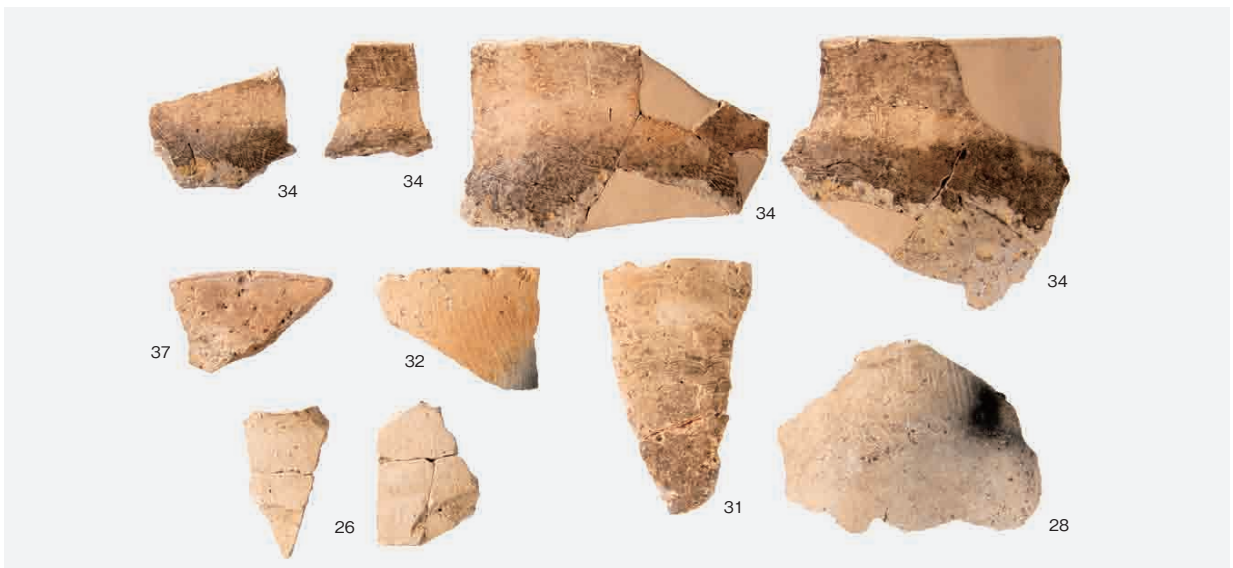
33



39



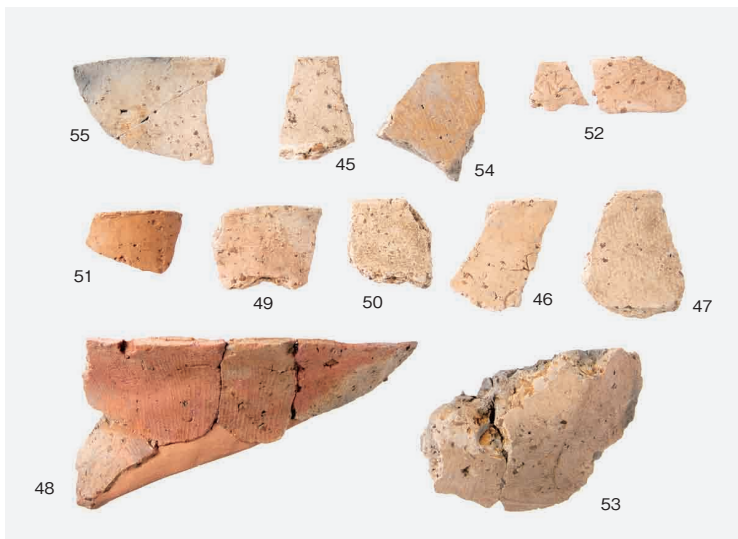
40



S A 2 出土遺物



56



SA3 出土遺物



61



62



60



78



86



67



72



73





79線刻

79



79口縁部

84



87



S A 4 出土遺物



63



88



89



93



S A 1 出土遺物



S A 2 出土遺物



S A 3 出土遺物



S A 4 出土遺物



100



SC1 出土遺物



101



106



112



108



111



118



SL1出土遺物



1号土器集中区出土遺物



126



131



133



包含層出土弥生時代中期の遺物



157



163



167



165



169



171



178



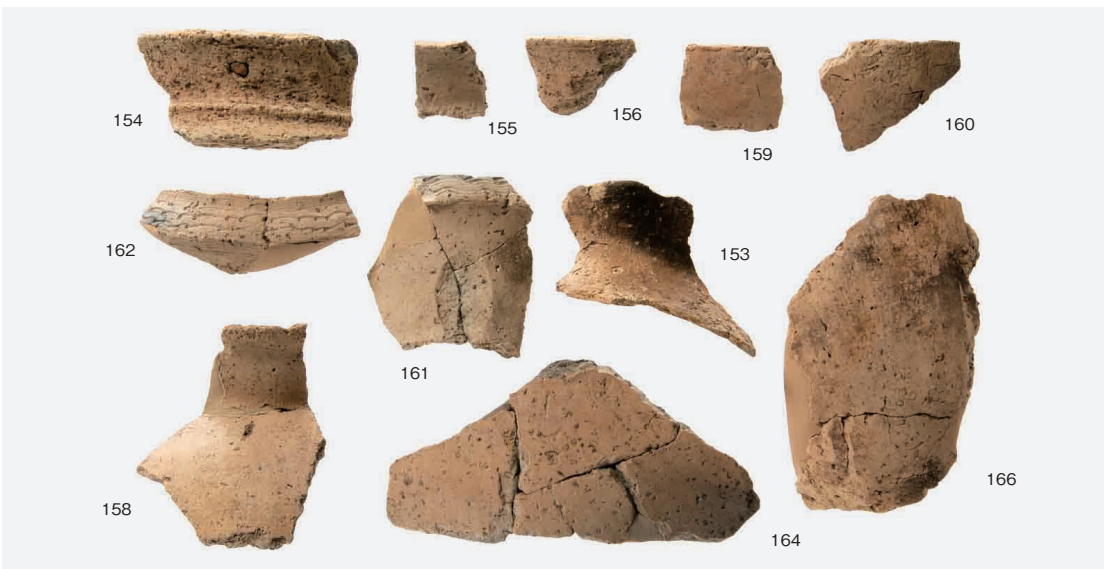
179



180



第1次包含層出土 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物①



第1次包含層出土 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物②



第1次包含層出土 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物③



第2次包含層出土 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺物



198



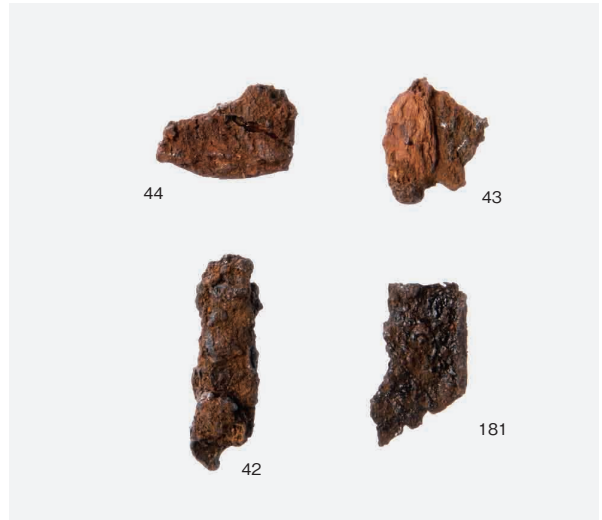
194・195・196



SE1出土遺構に伴わない遺物



石包丁



鉄片



213



212墨書



SE1 出土遺物



212



214



218





219



221



220



222



215

216

223

217

包含層出土古代の遺物



224



227

228

229

225

226

SE2出土遺物



230

236

232

235

231

234

233

包含層出土中世の遺物

## 報告書抄録

ふりがな	まつしいせき							
書名	松下遺跡							
副書名	一般国道10号都城道路建設に伴う発掘調査報告書7							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第252集							
編著者名	恵利 武馬 (編者)・藤木 聡 (文化財課)							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2020年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつした 松下遺跡	みやざきけんみやこのじょうし 宮崎県都市 しびたちょう 志比田町 ばんち 9541番地ほか	45202	1710	31度 45分 07秒 付近	131度 02分 46秒 付近	第1次 2017.06.05 ～ 2017.10.27	第1次 約3,500㎡	一般国道 10号都城 道路建設 事業
						第2次 2018.09.25 ～ 2019.01.25	第2次 約1,600㎡	
ふりがな 所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
まつした 松下遺跡	散布地	第1次	弥生時代終末期～ 古墳時代前期初頭	竪穴建物跡 周溝状遺構 土坑	弥生土器 石器(石包丁)	周堤を伴う焼失住居の 検出		
			中世	小溝状遺構				
	第2次	古墳時代前期前半	竪穴建物跡	弥生土器				
		古代	溝状遺構	墨書土器	延長40mを越える一直 線の深い溝の検出			
		中世～近世	小溝状遺構 溝状遺構	陶磁器				
要約	<p>松下遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の竪穴建物跡4基、周溝状遺構1基、土坑2基、古代の溝状遺構1条、中世～近世の小溝状遺構群、土坑1基、溝状遺構1条を検出した。弥生時代終末期～古墳時代前期前半の竪穴建物跡では、建て替えの痕跡や焼失住居と思われる多くの炭化材を検出し、周堤と思われる盛土の痕跡も確認した。古代の溝状遺構は、検出長40m以上、深さ最大1.9mを測る大溝であった。遺物については、弥生時代を中心に近世までの幅広い時期のものが出土した。</p>							

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第252集

## 松下遺跡

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

2020年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 有限会社 河野印刷 宮崎支店  
〒880-0052 宮崎市丸山1丁目65番地  
TEL 0985(60)1611 FAX 0985(60)1612

---

---

Miyakonojo City

# MATSUSHITA site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center  
vol.252

2020

Miyazaki Prefectural Archaeological Center